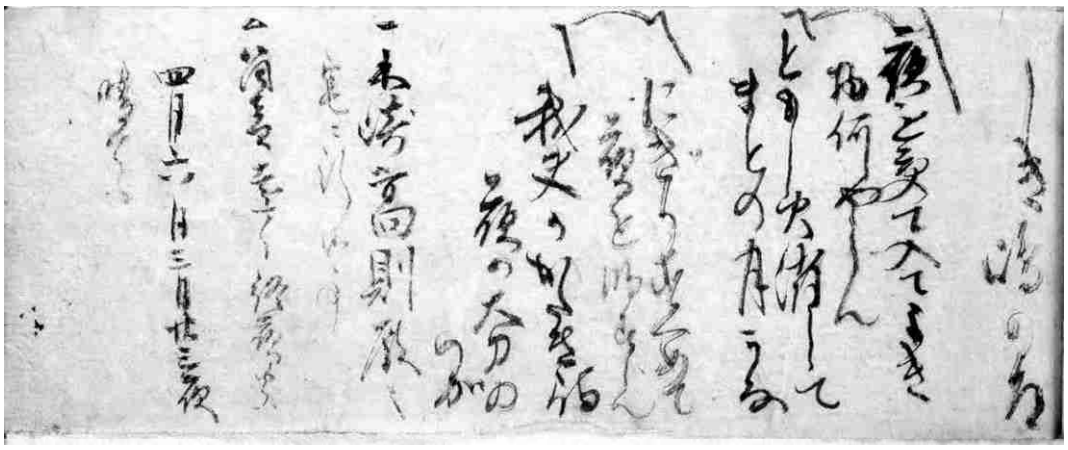


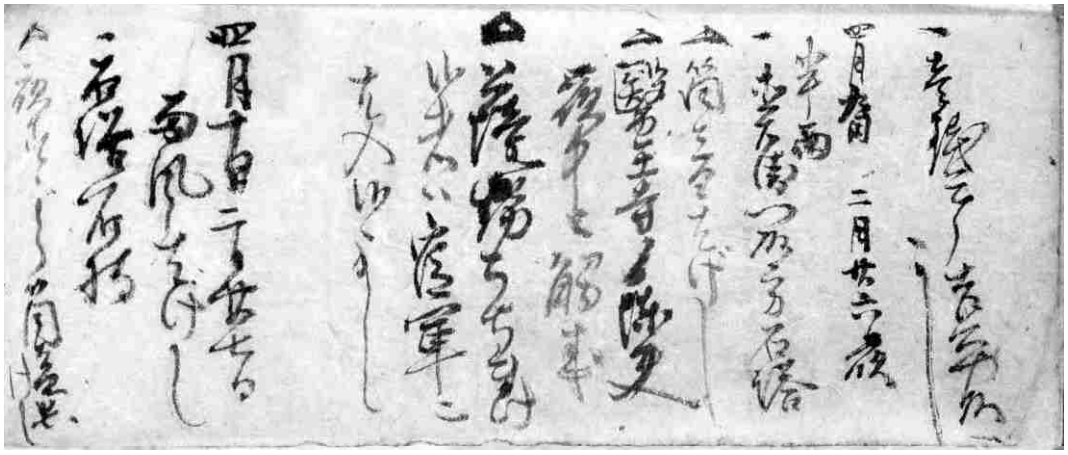
157

158

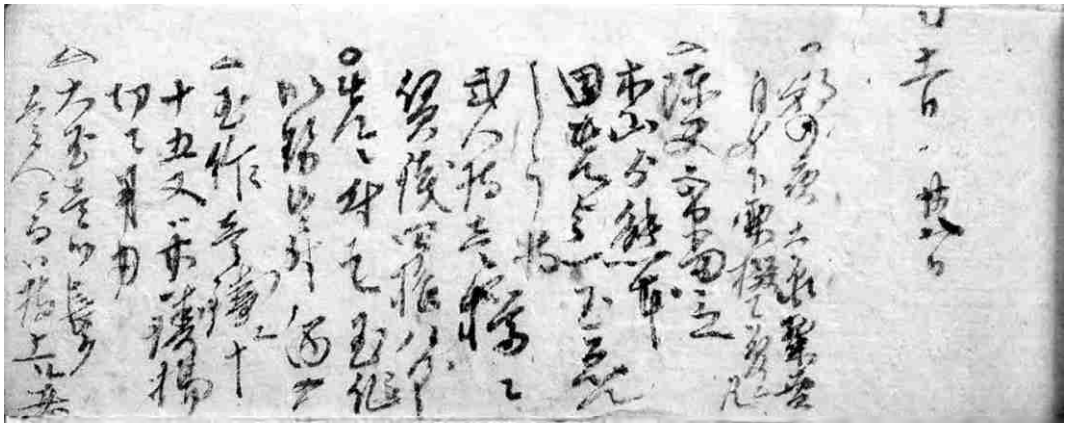
159

160

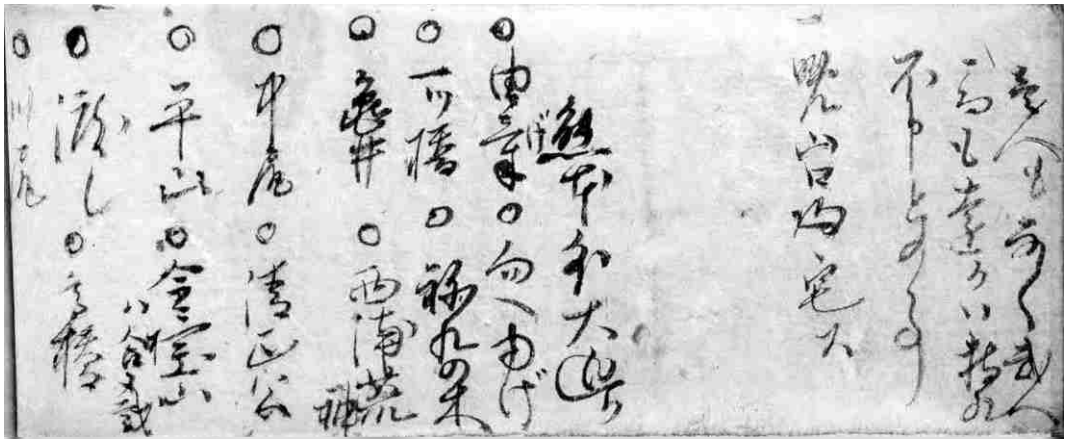
161



162

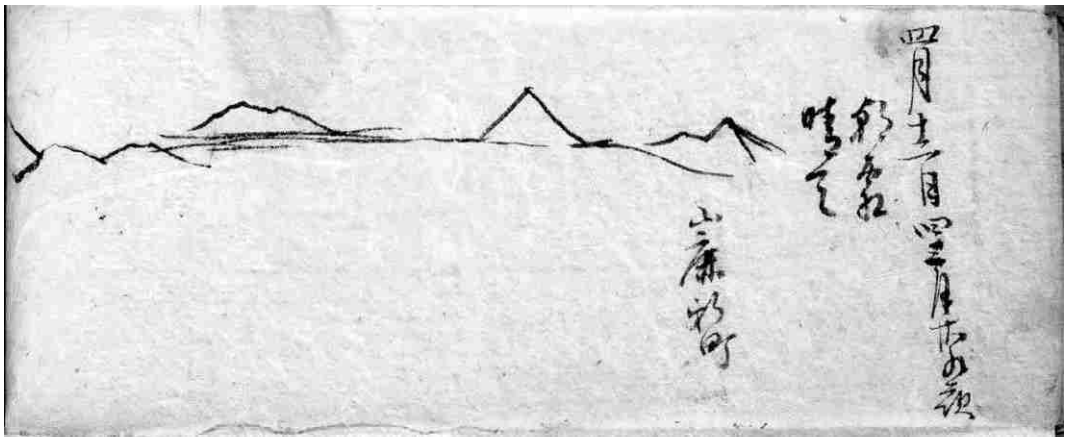


163

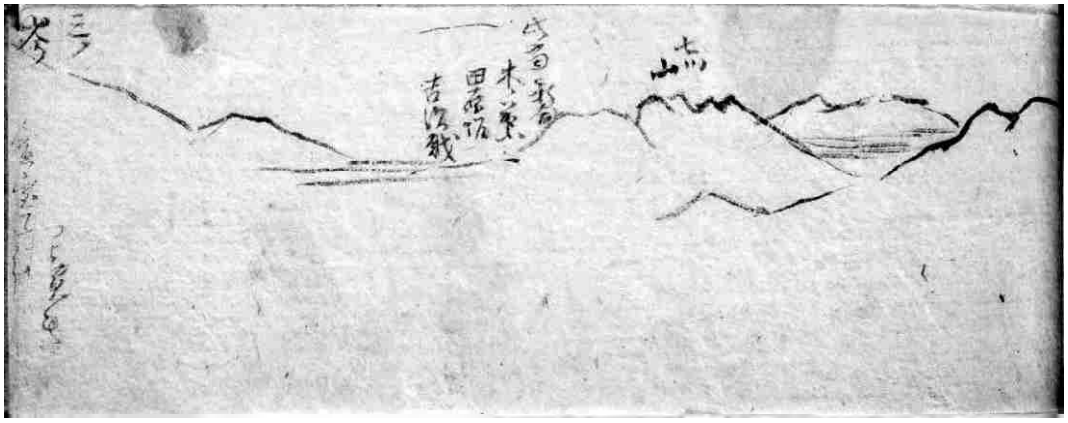


164

165

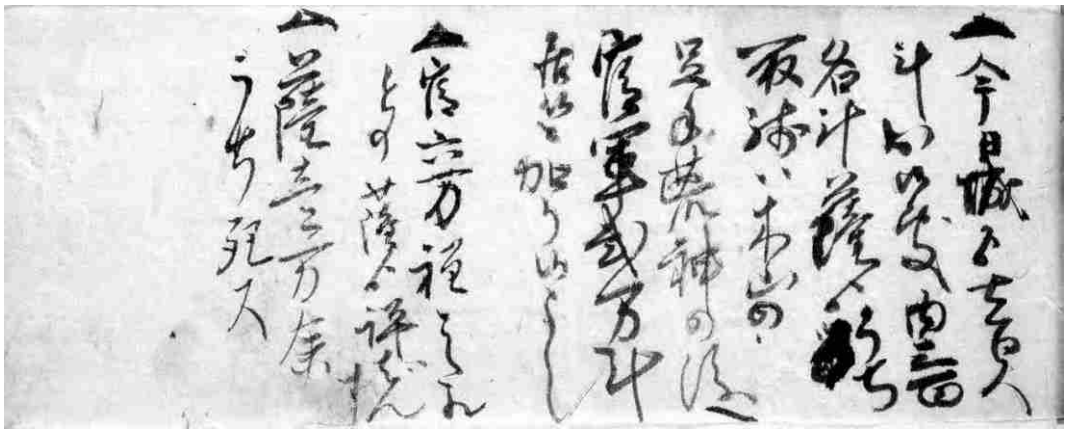


166

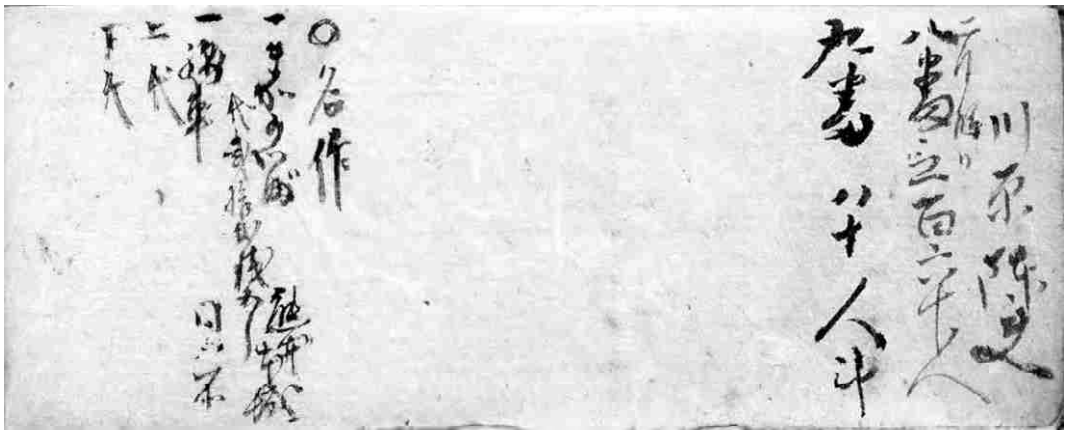


167

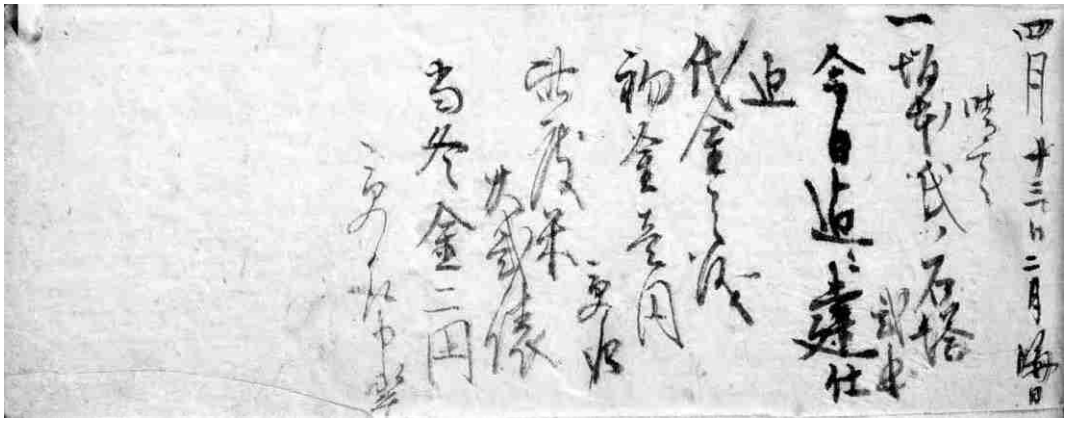
168



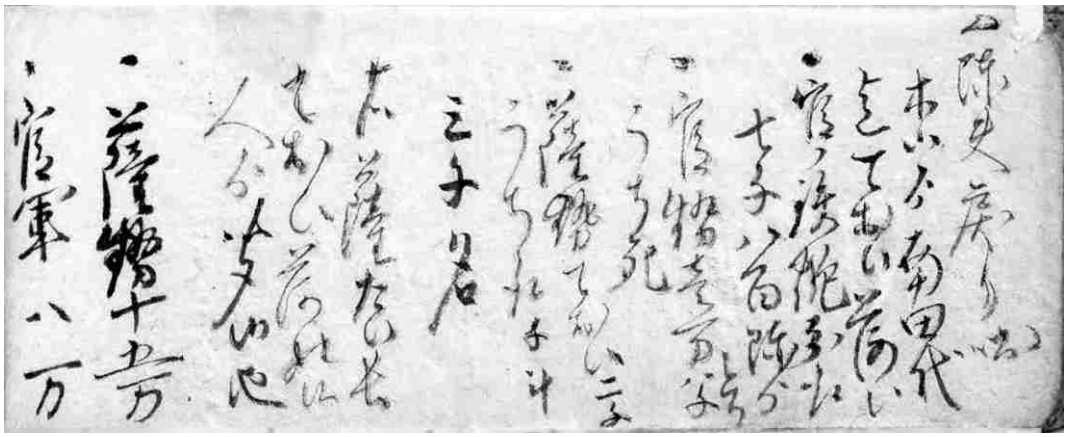
169



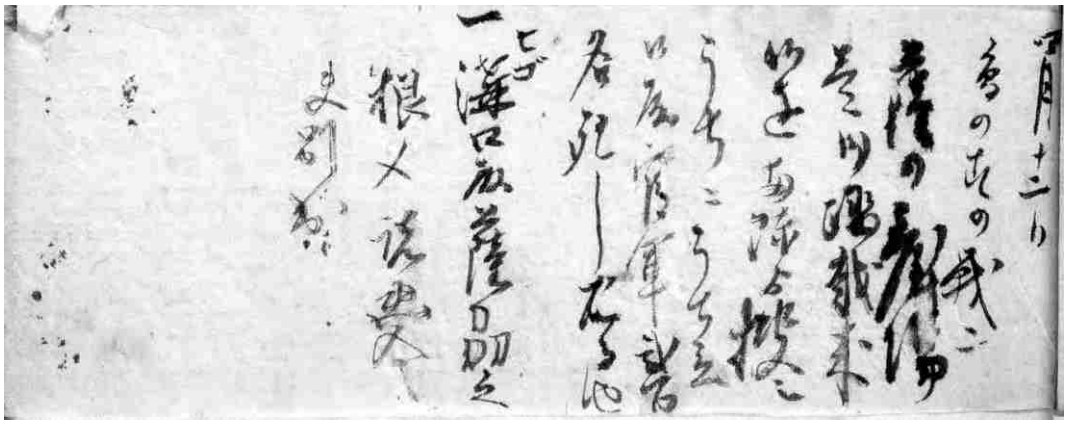
170



171



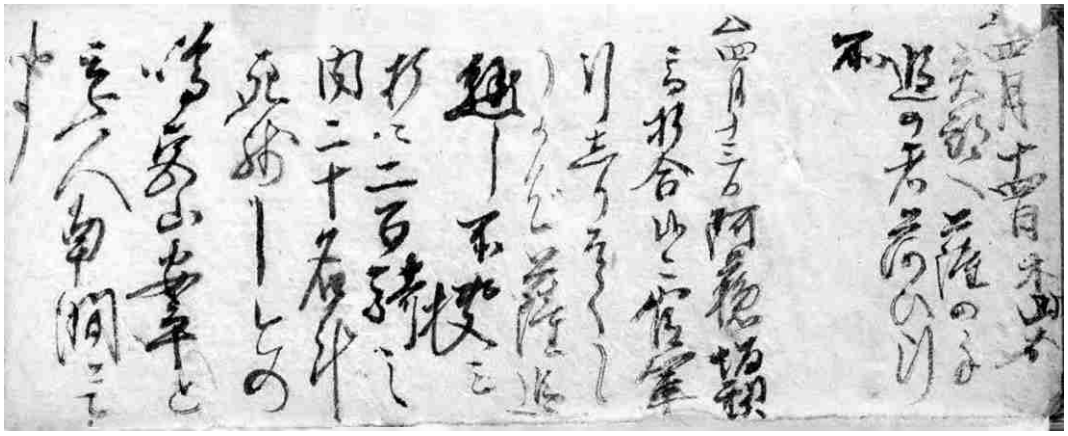
172



173

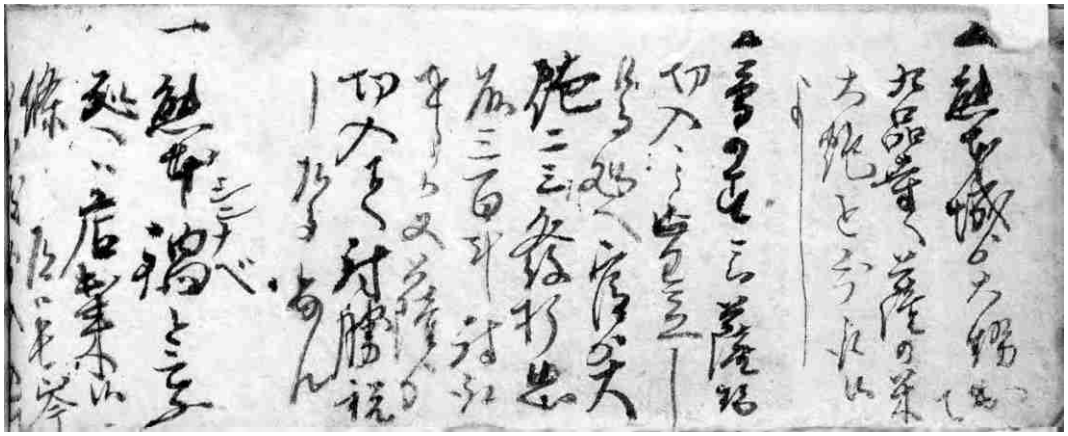
174

175



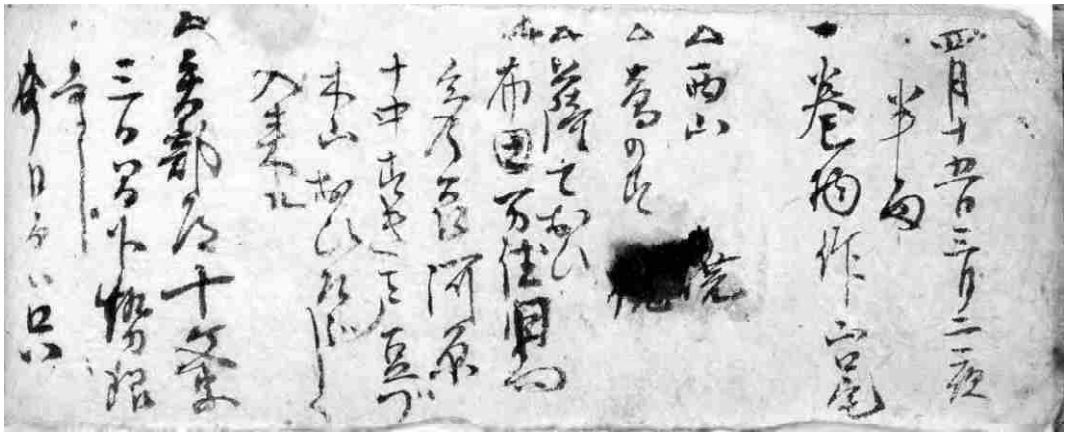
176

177



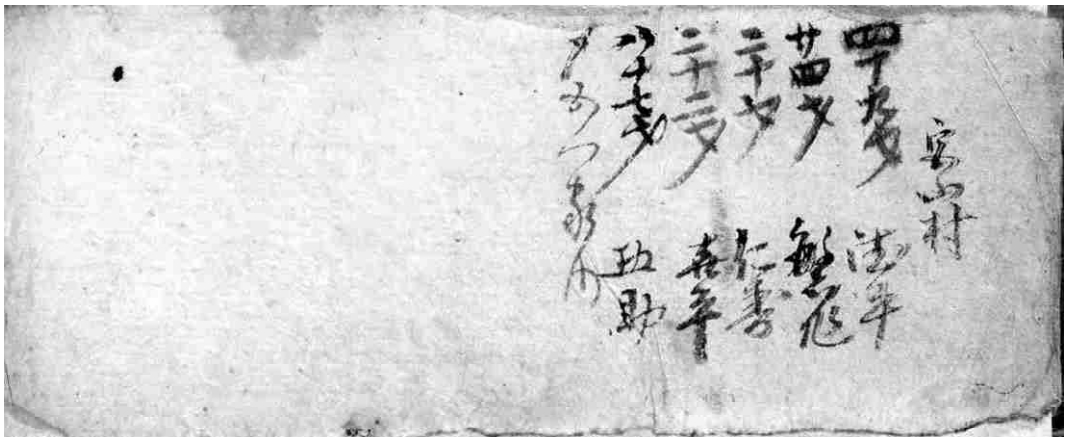
178

179

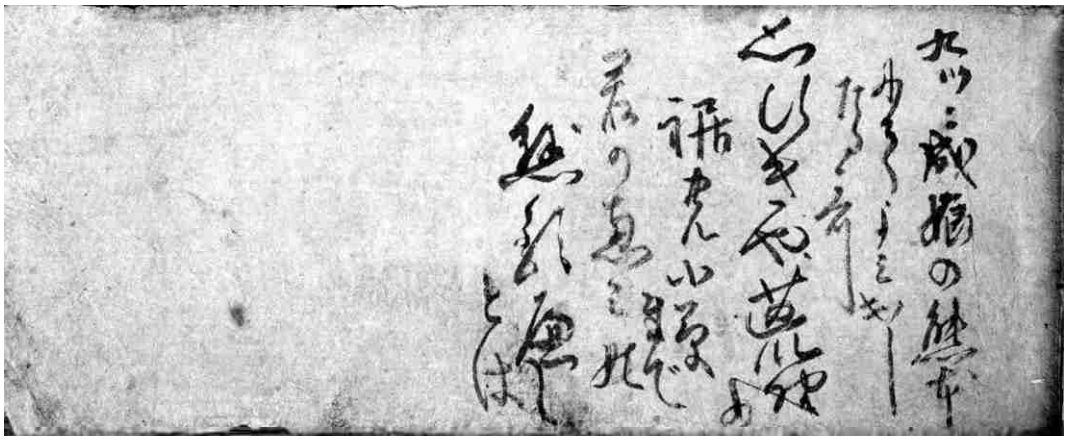


180

１８１



１８２

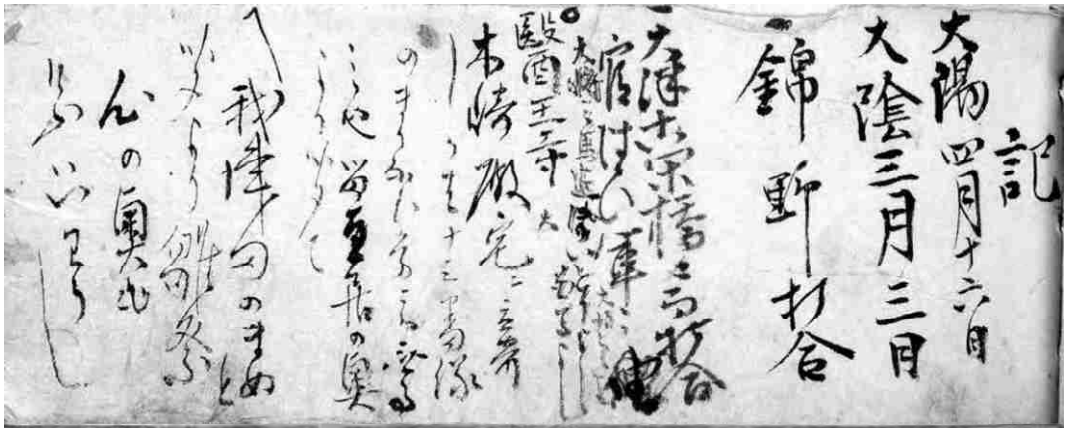


１８３

１８４

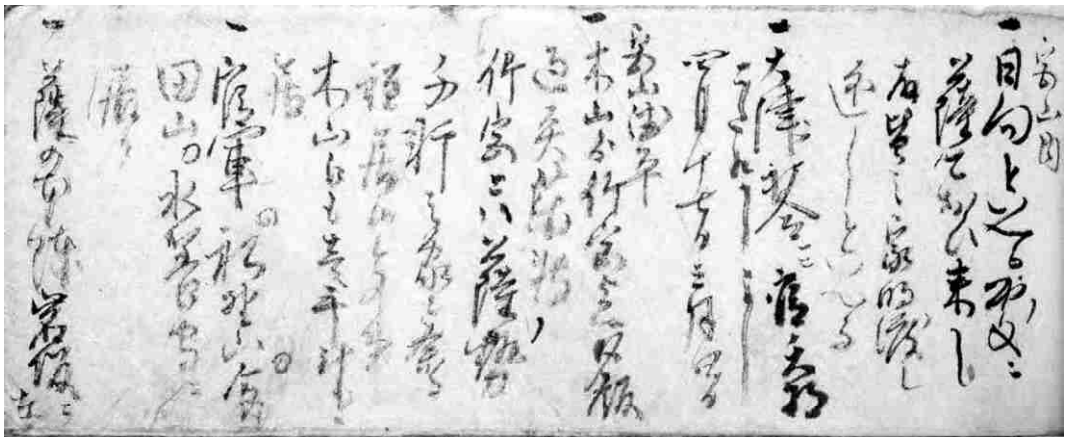
185

186

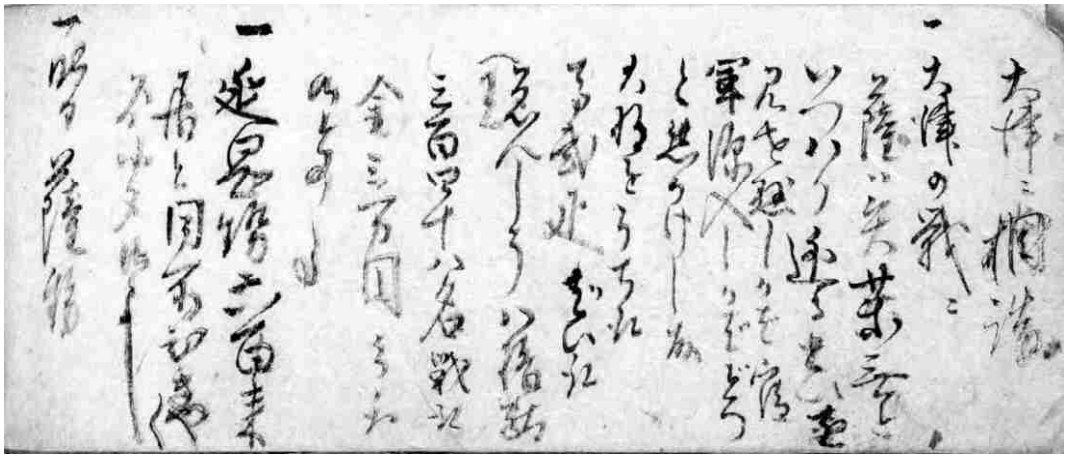


187

188

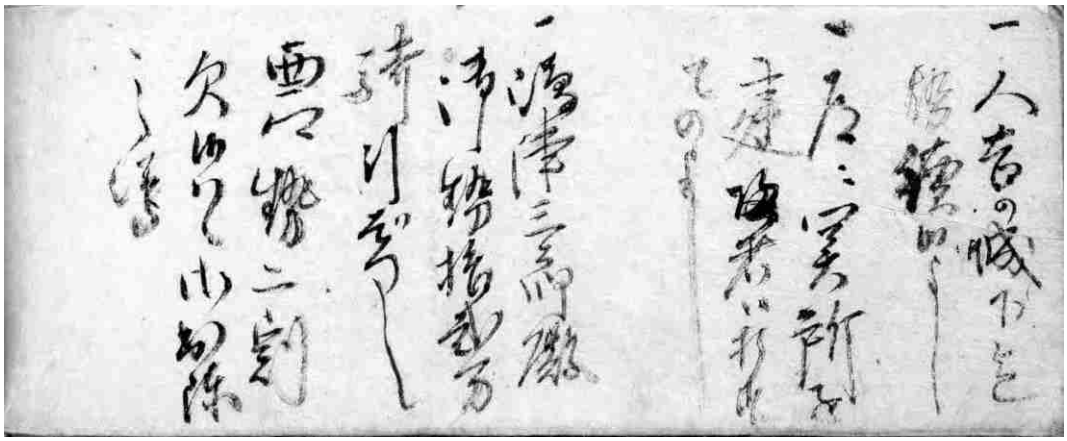


189



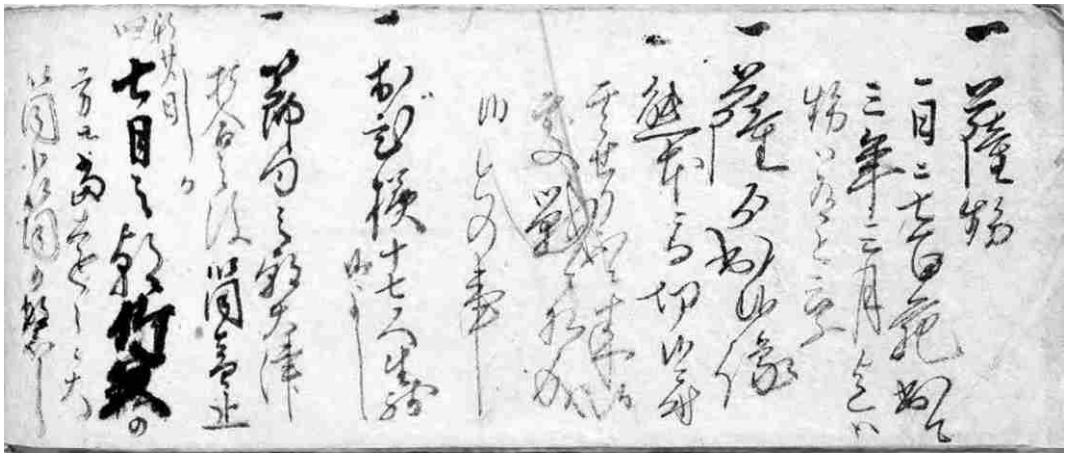
190

191



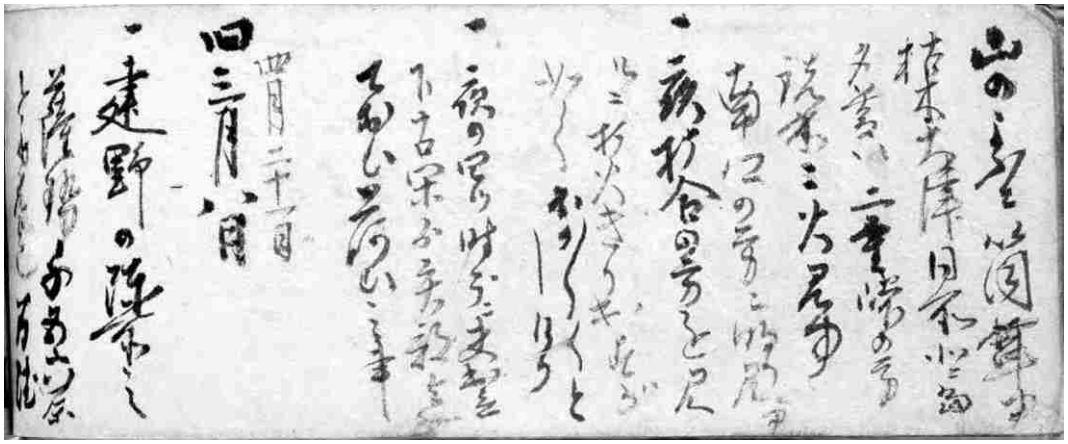
192

193



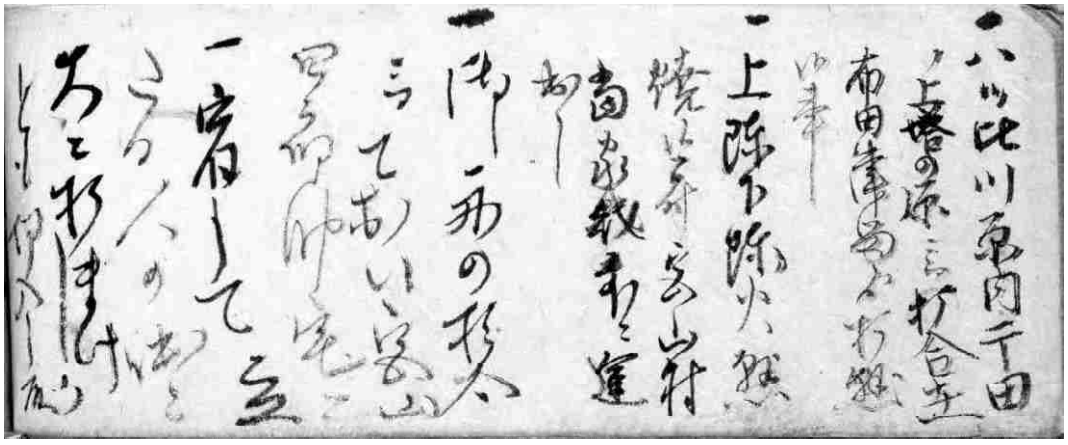
194

195



196

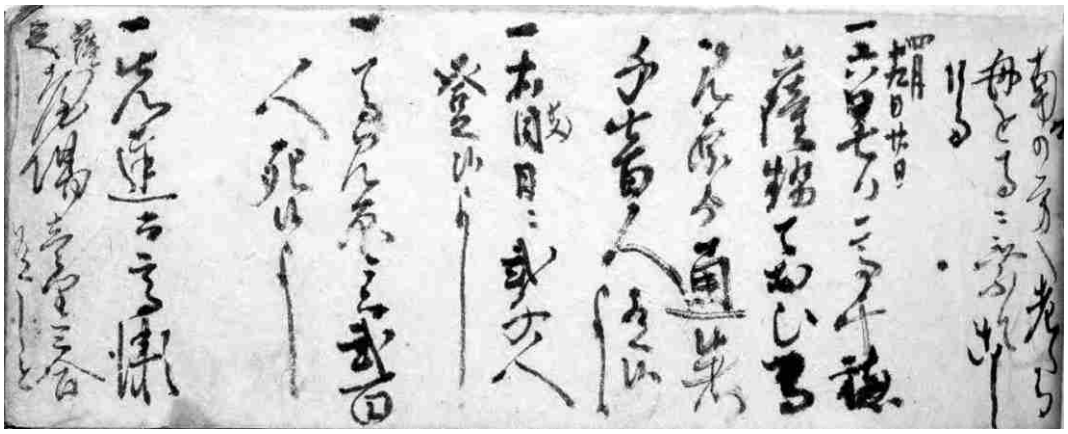
197



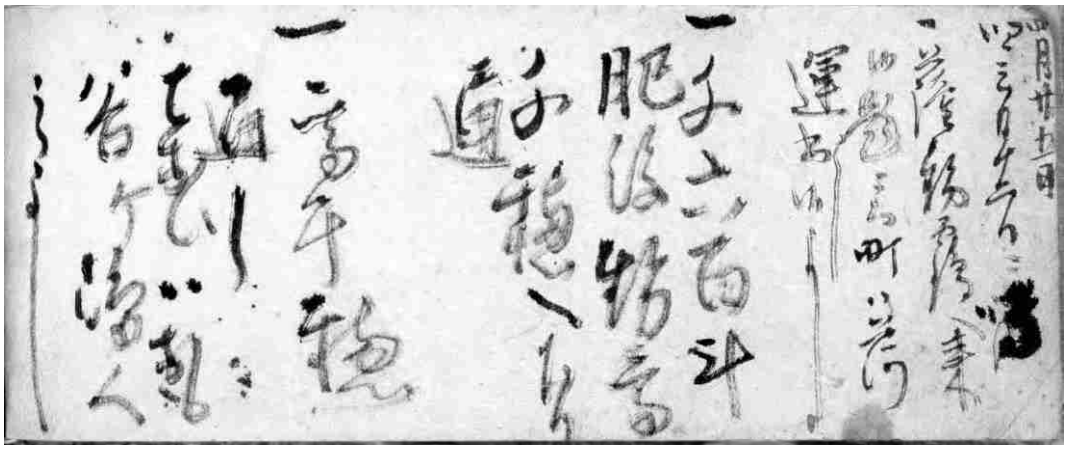
198

199

200

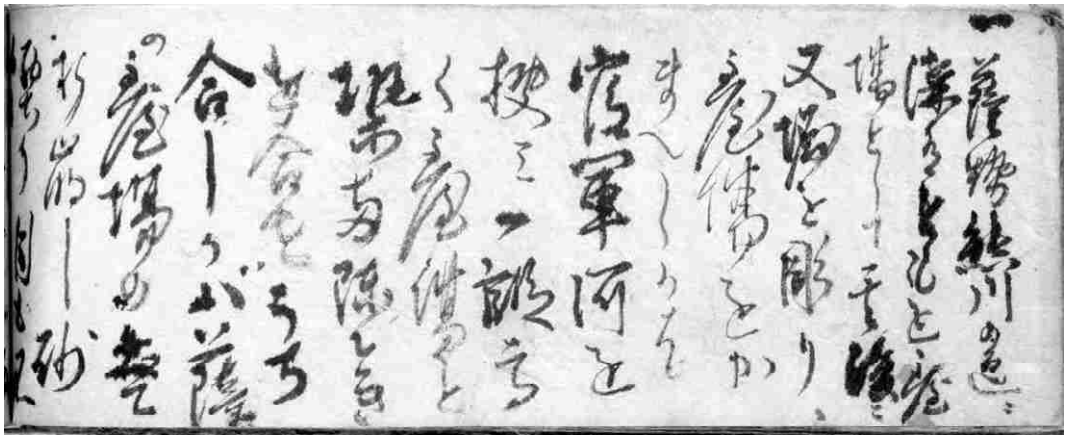


201

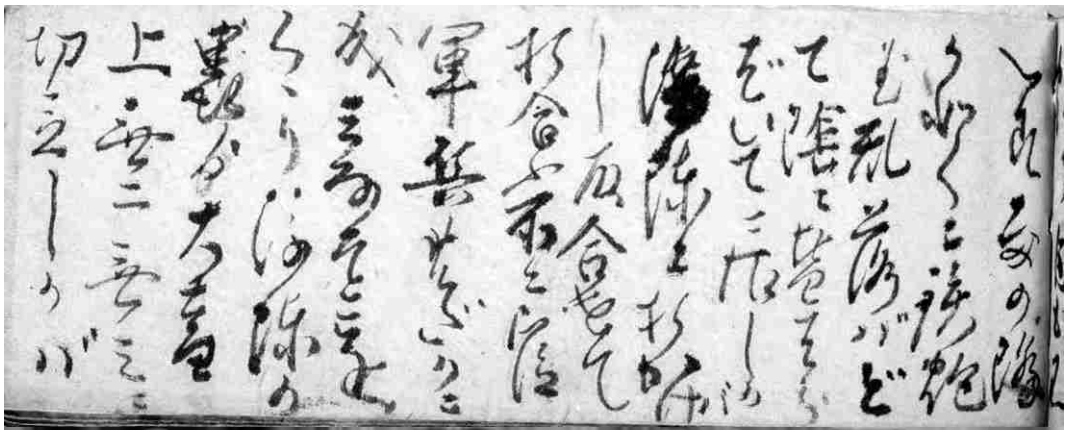


202

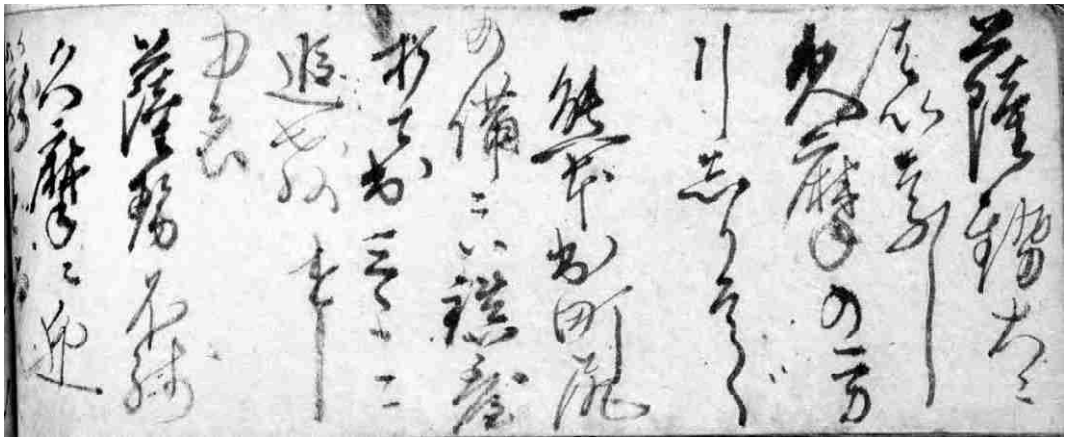
203



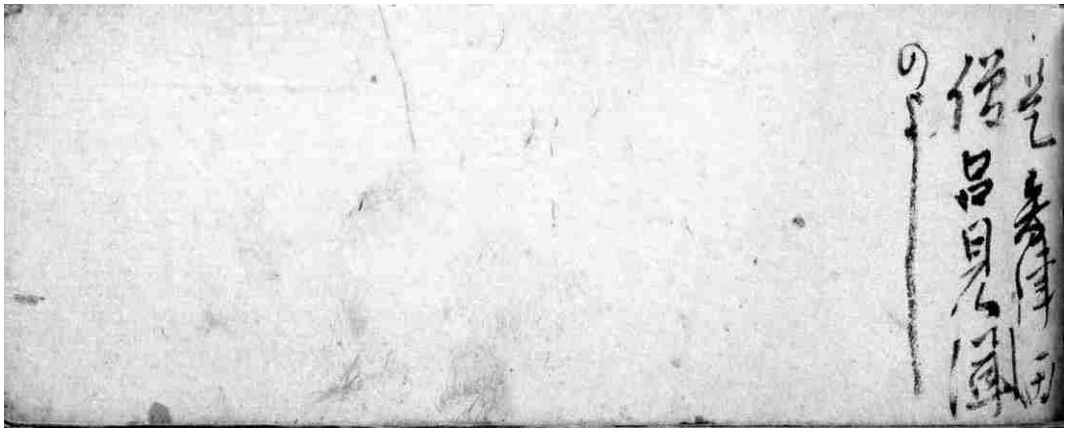
204



205

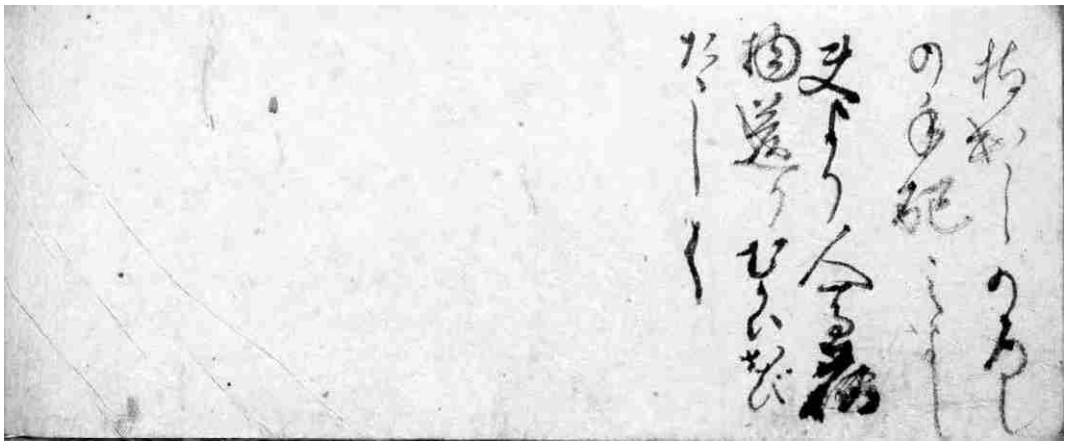


206

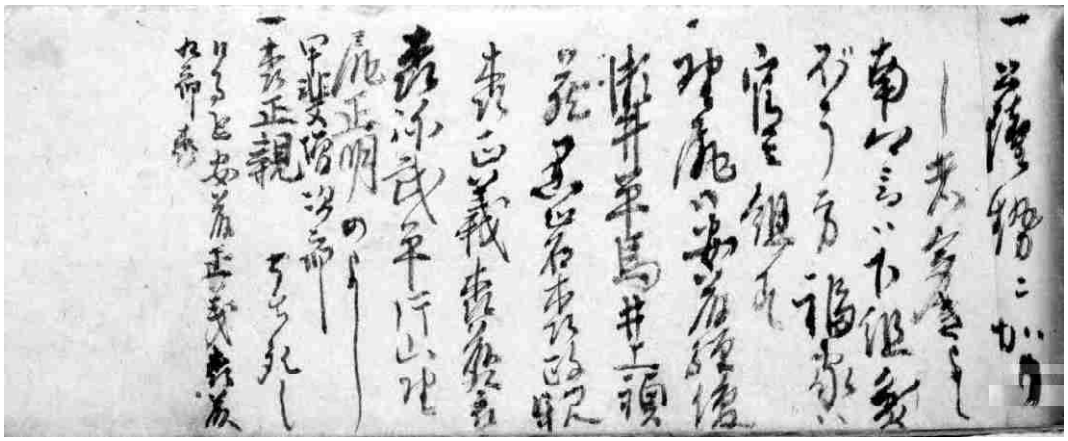


207

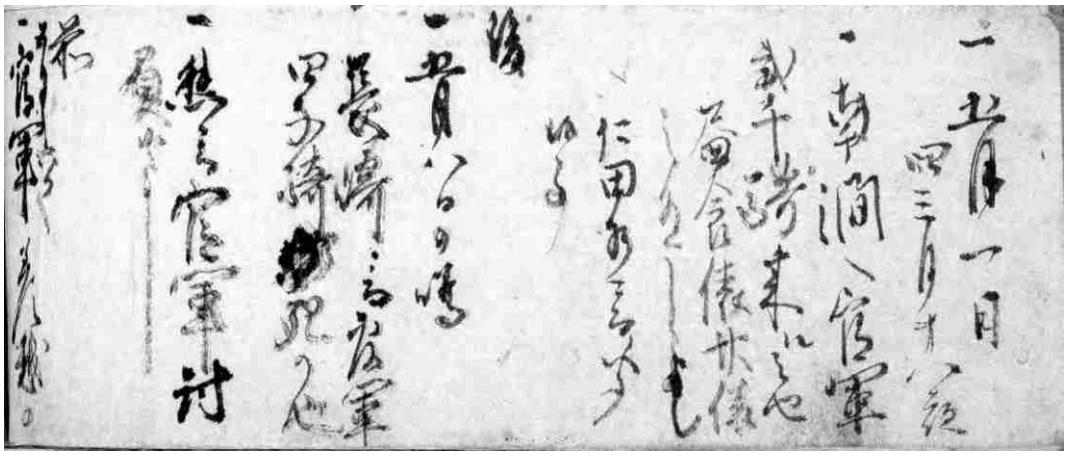
208



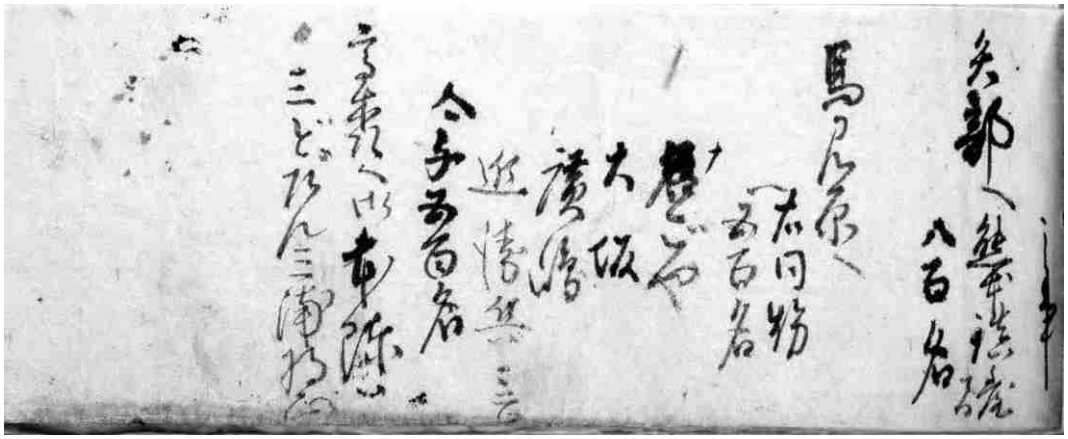
209



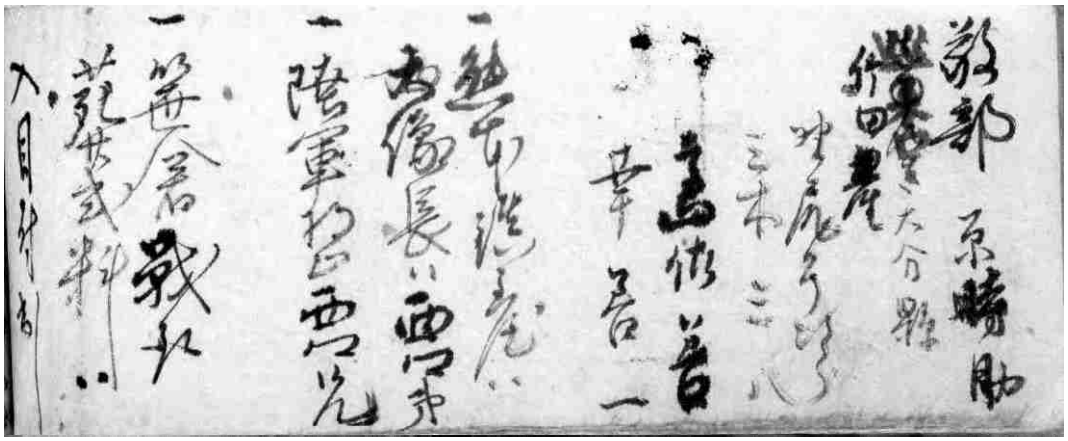
210



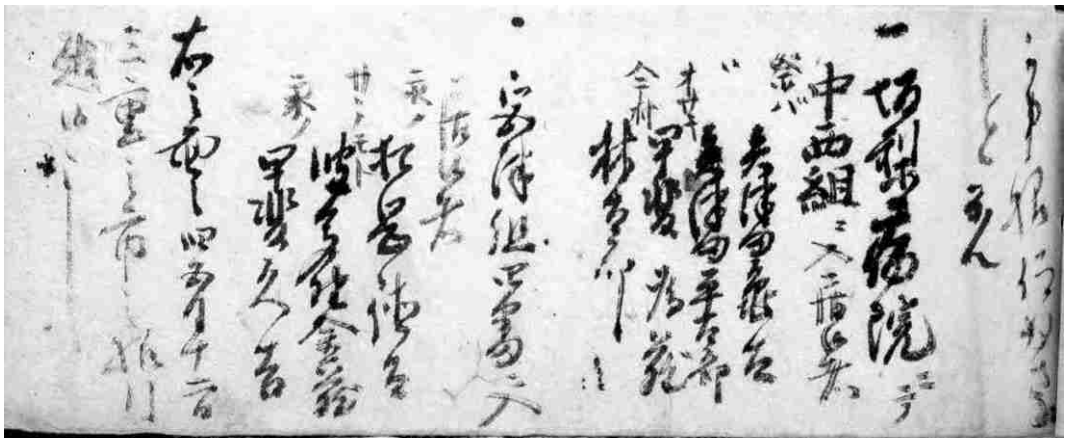
211



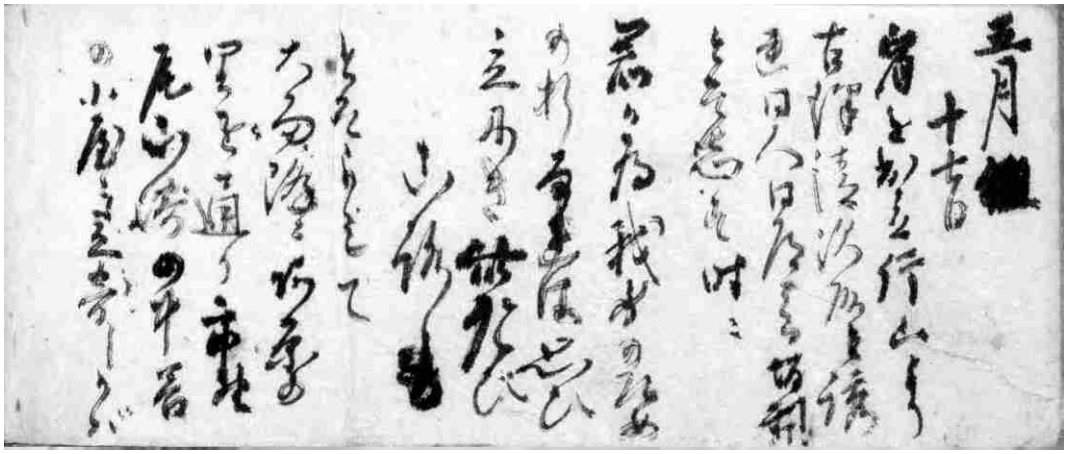
212



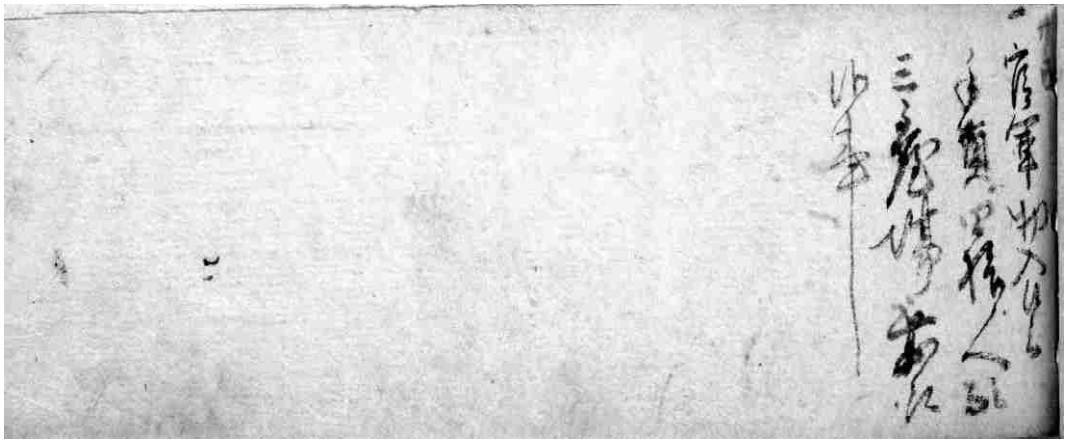
２１３



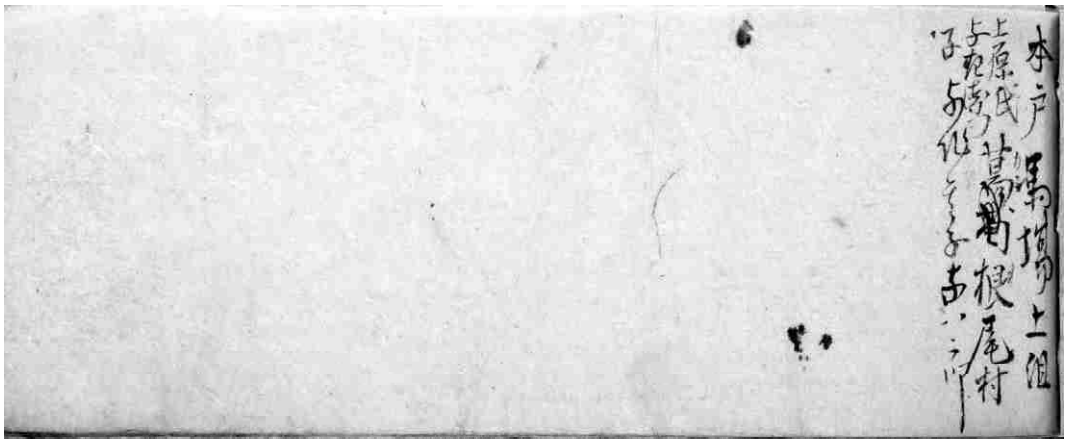
２１４



２１５

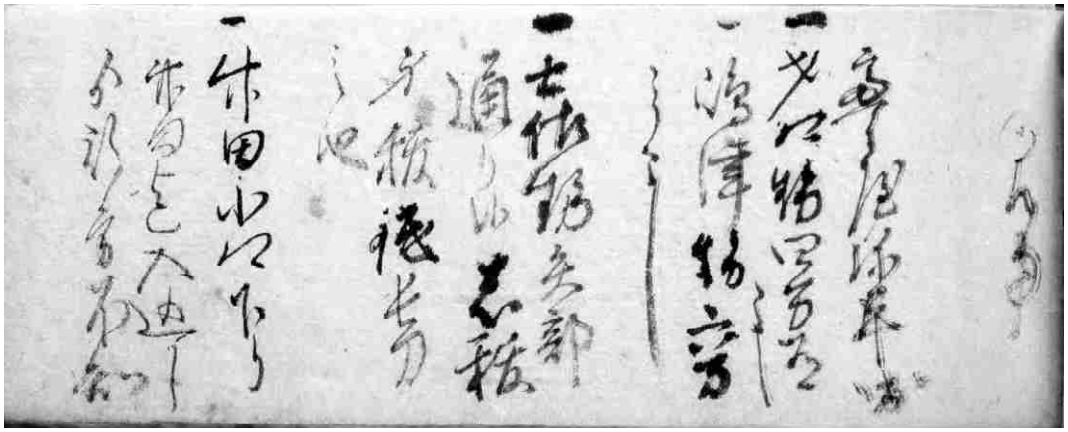


２１６

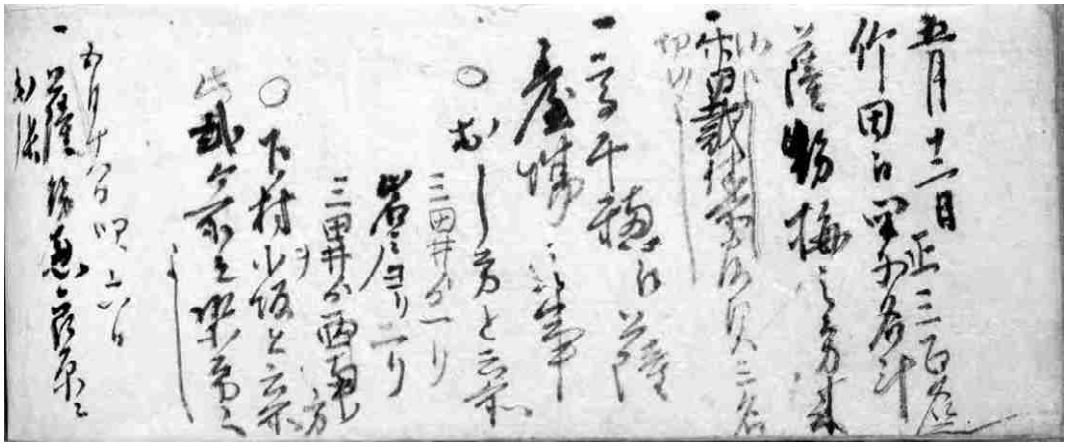


217

218

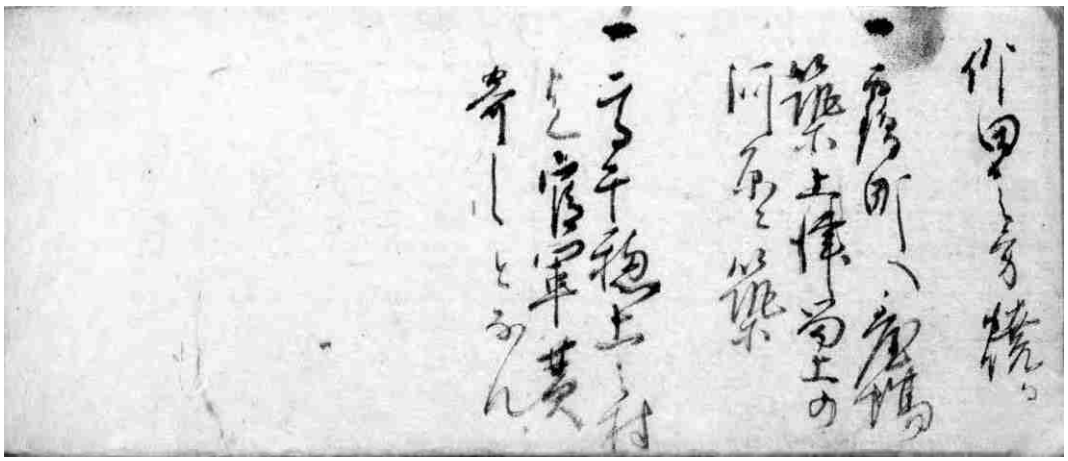


219

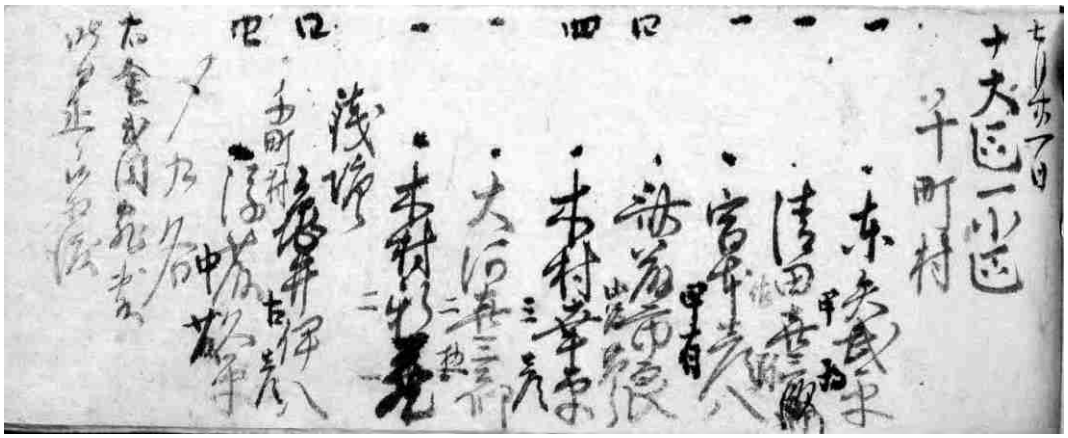


220

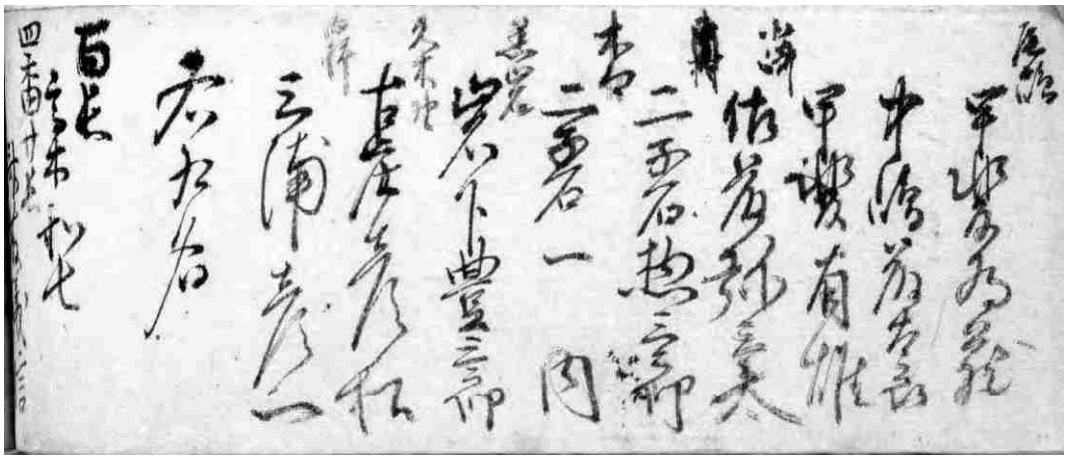
221



222

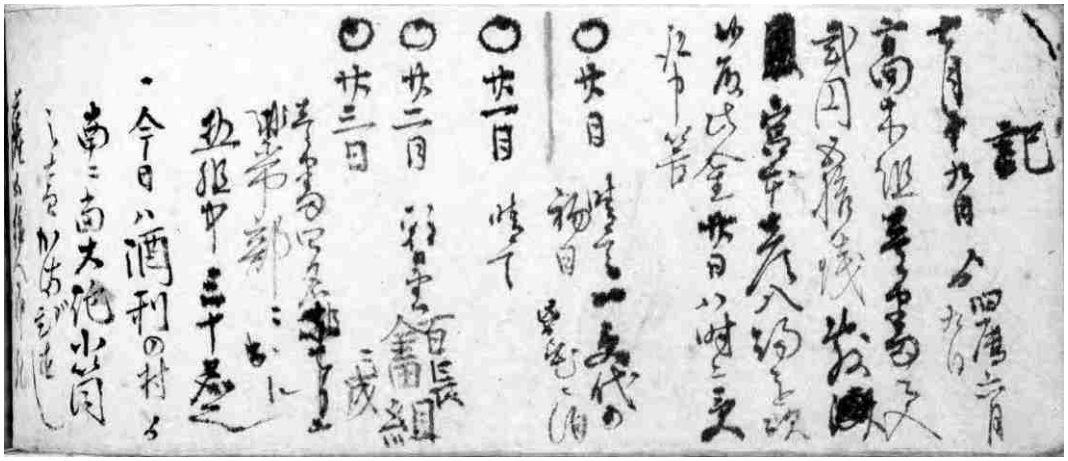


223

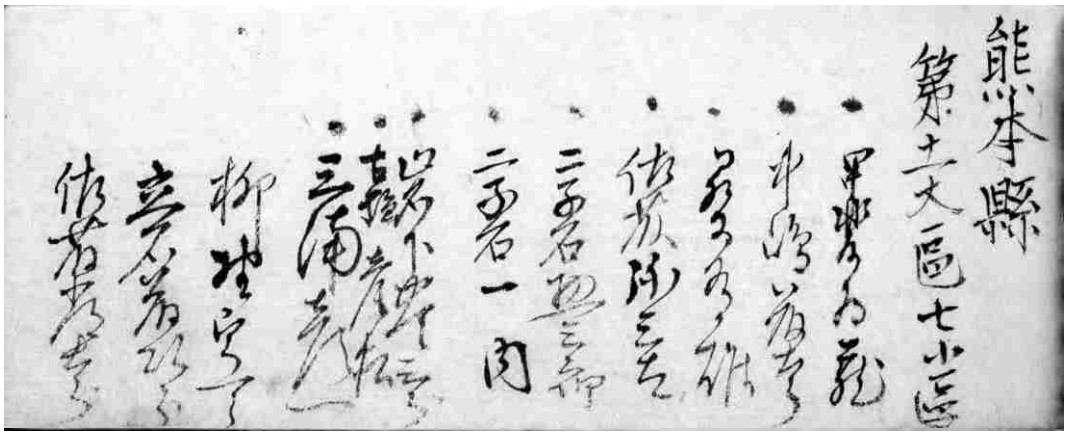


224

225



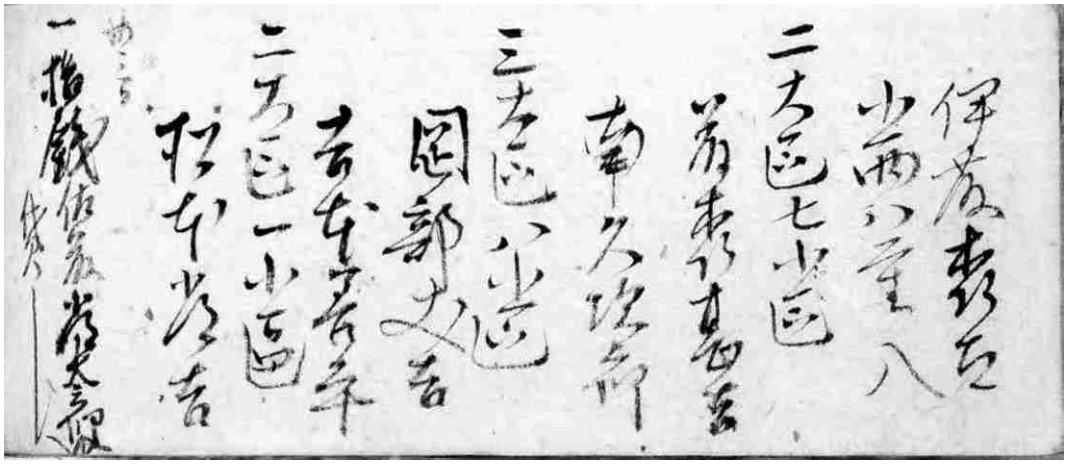
226



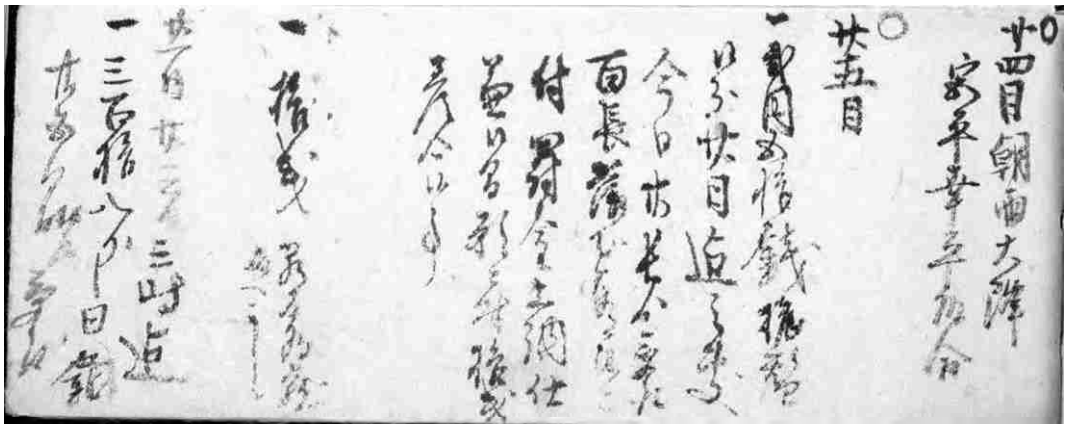
熊本縣

第十大區七小區

227

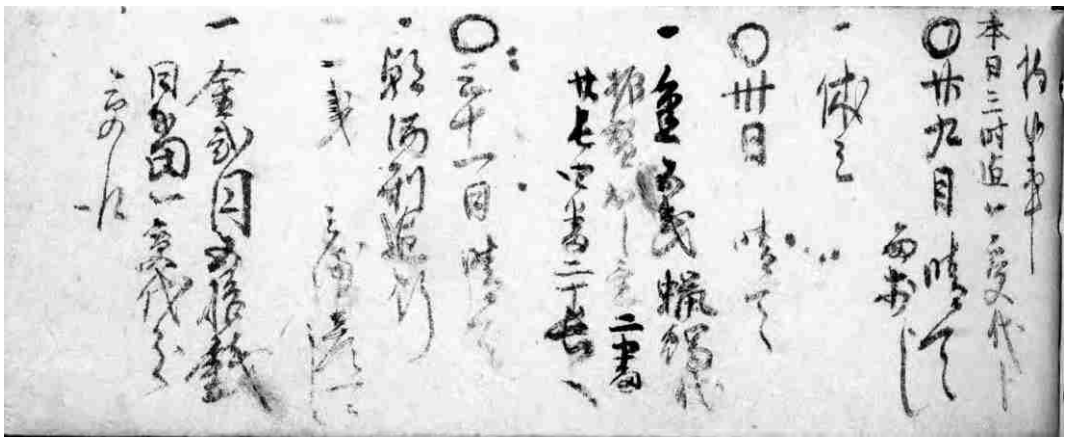


228

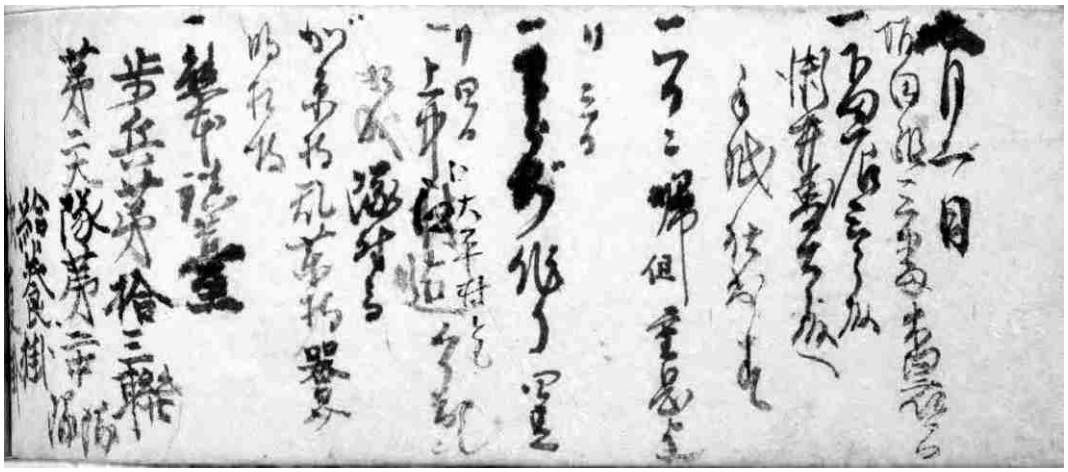


229

230

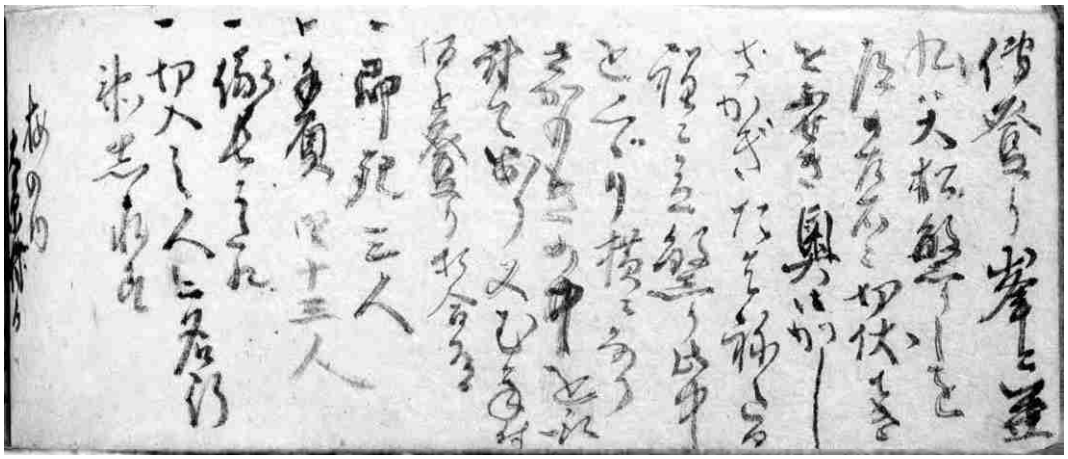


231



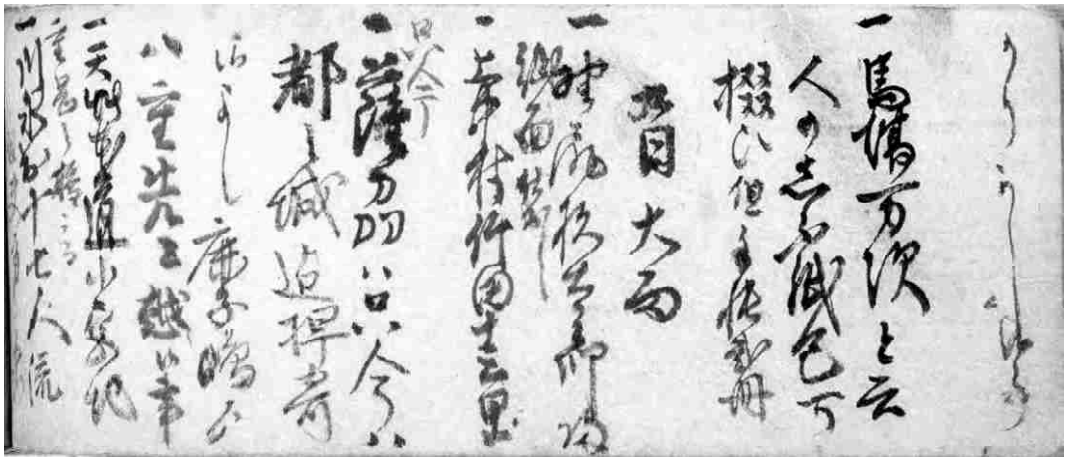
232

233

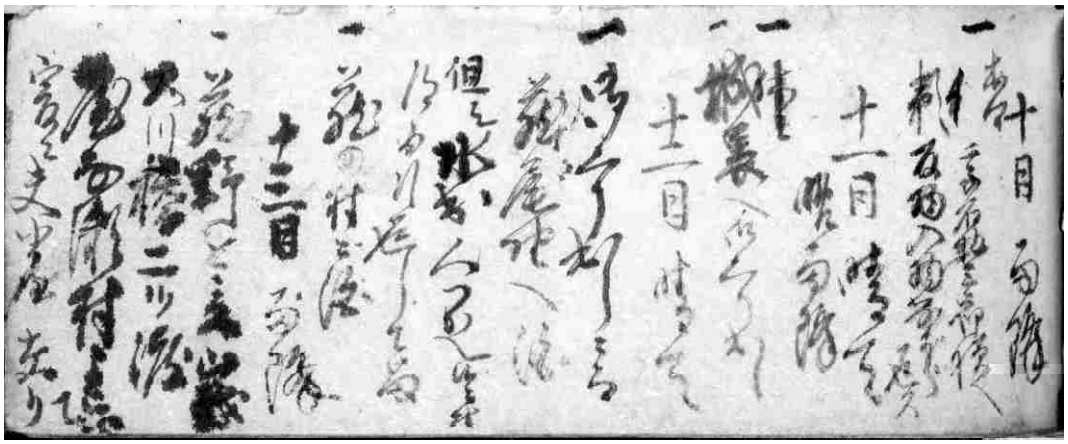


234

235

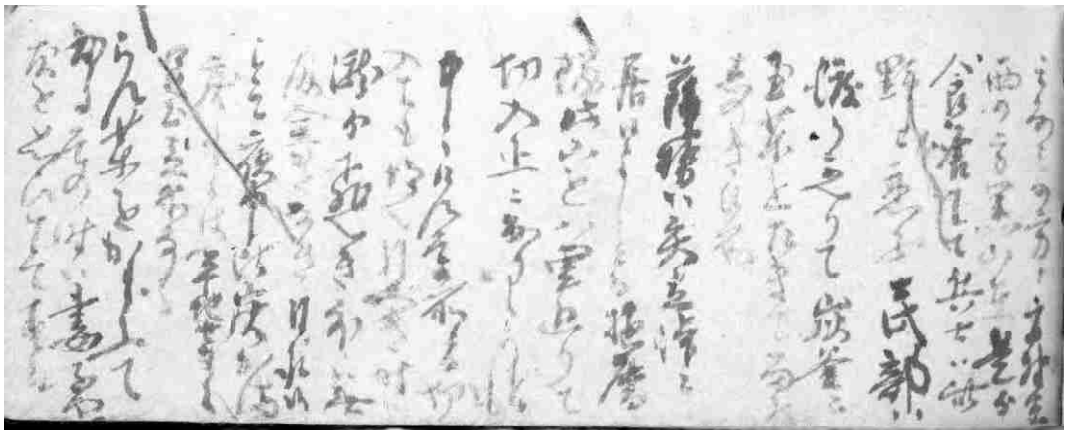


236

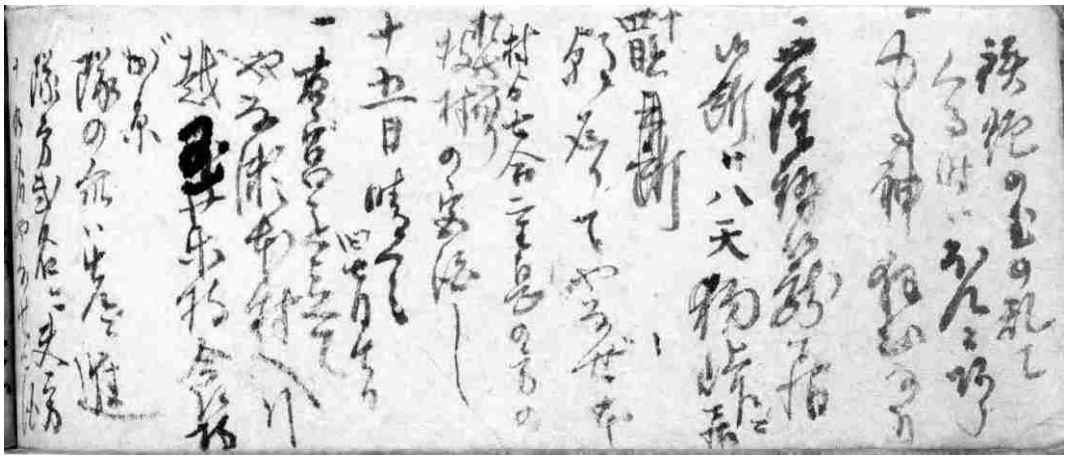


２３７

２３８

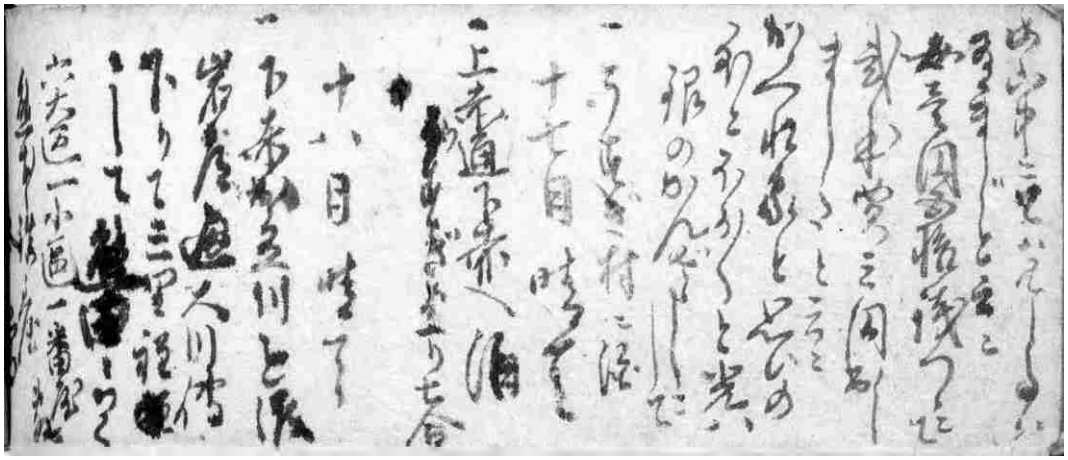


２３９

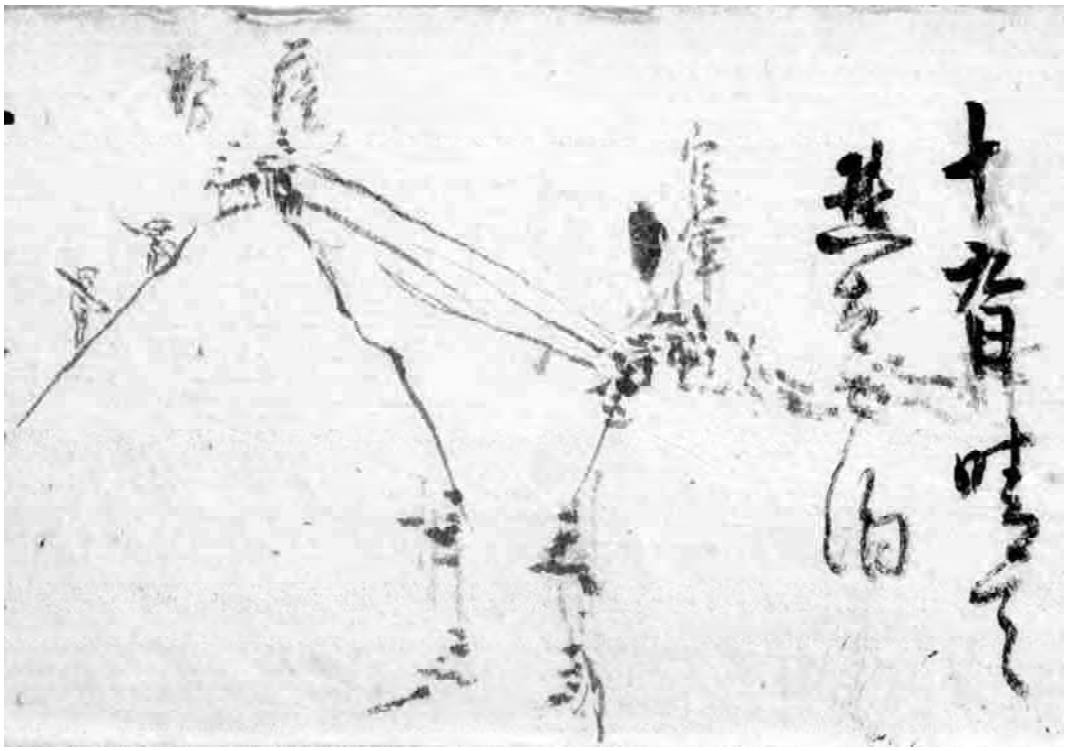


２４０

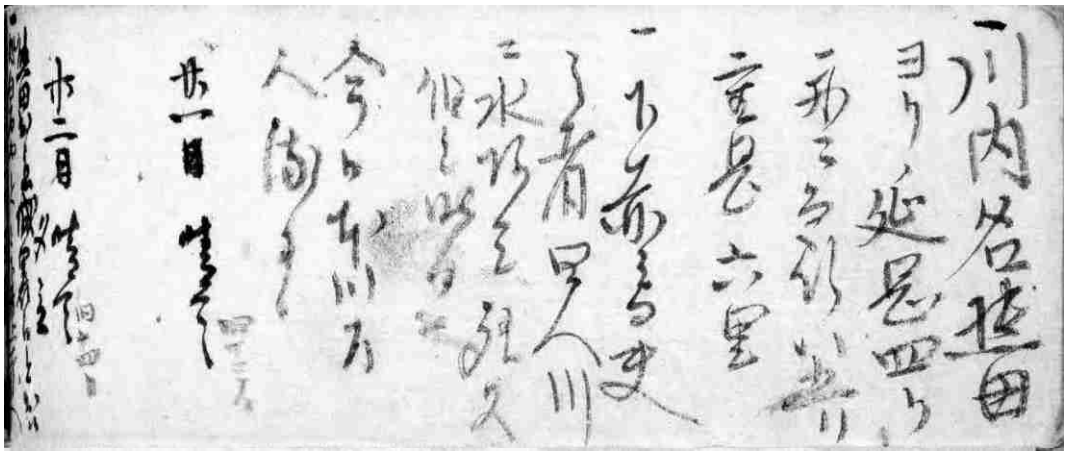
241



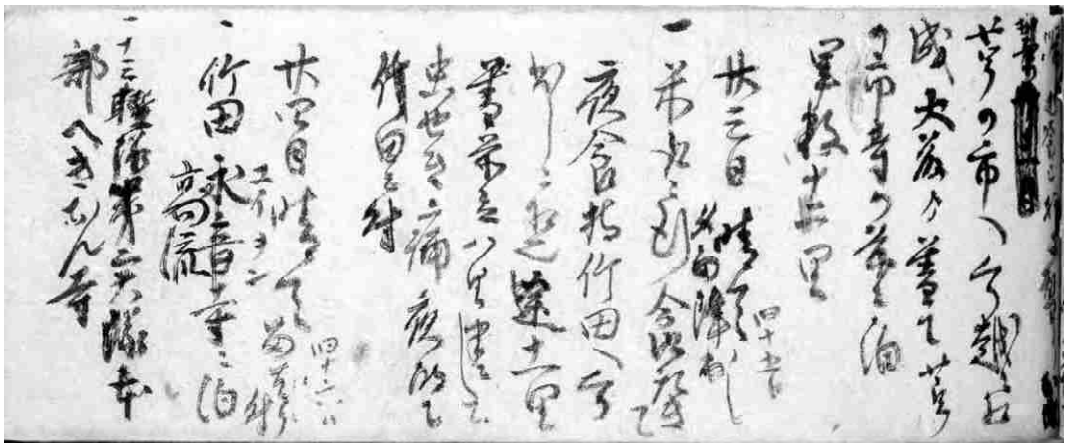
242



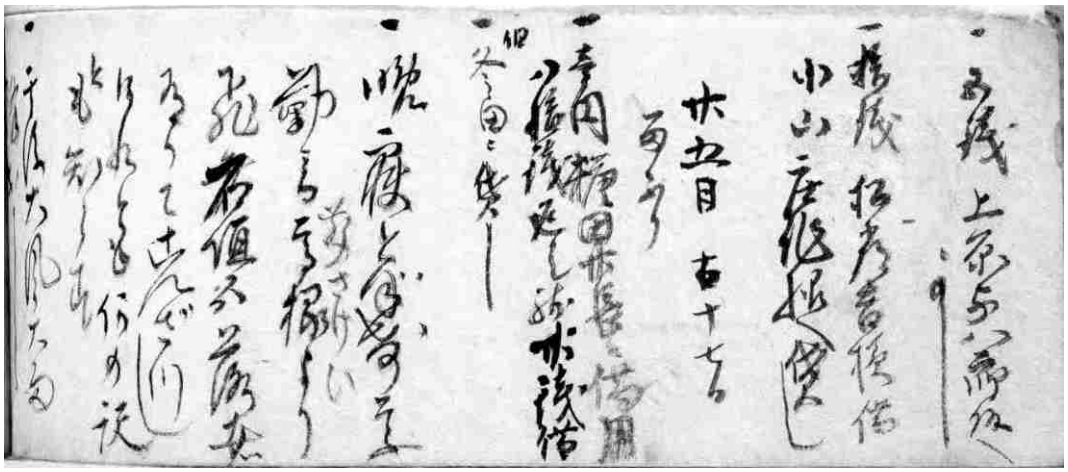
243



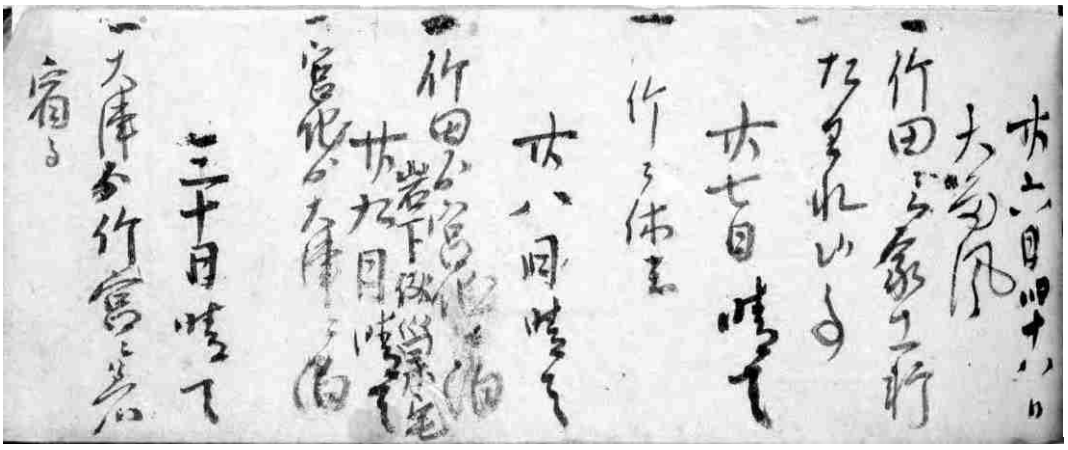
244



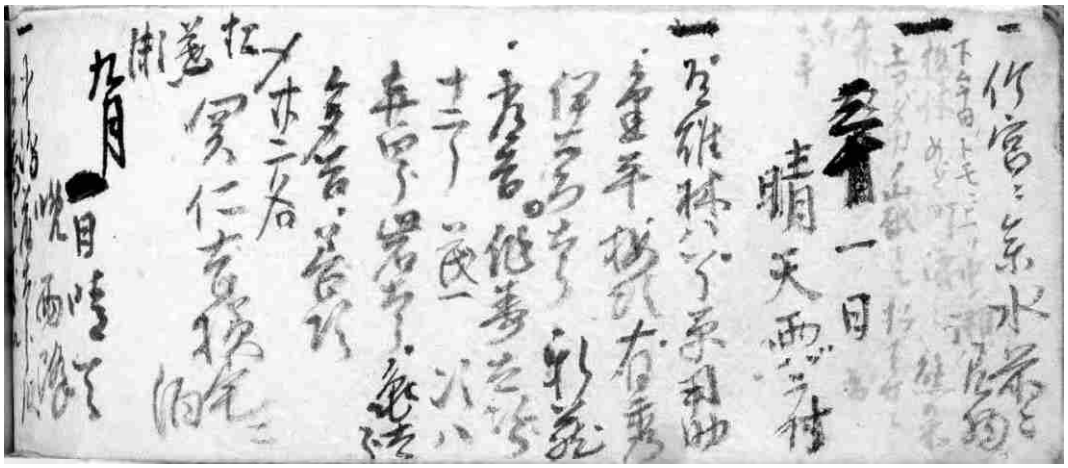
245



246



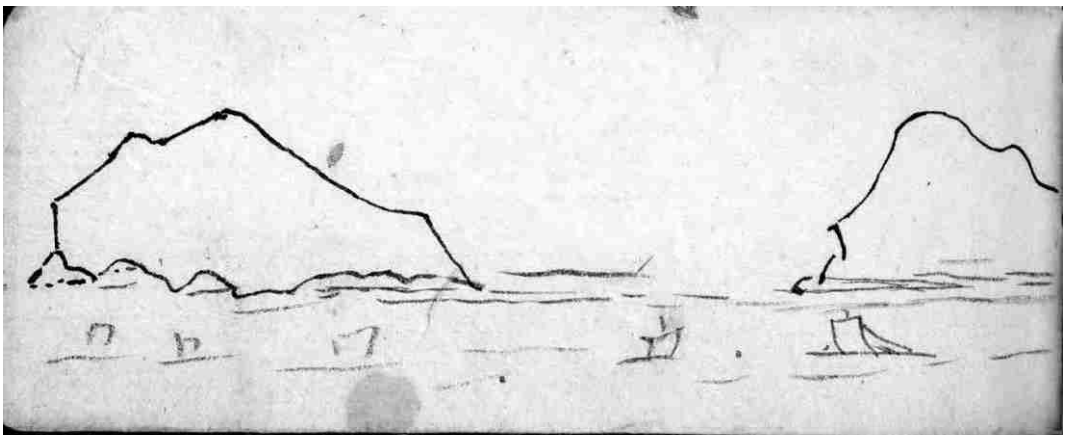
247



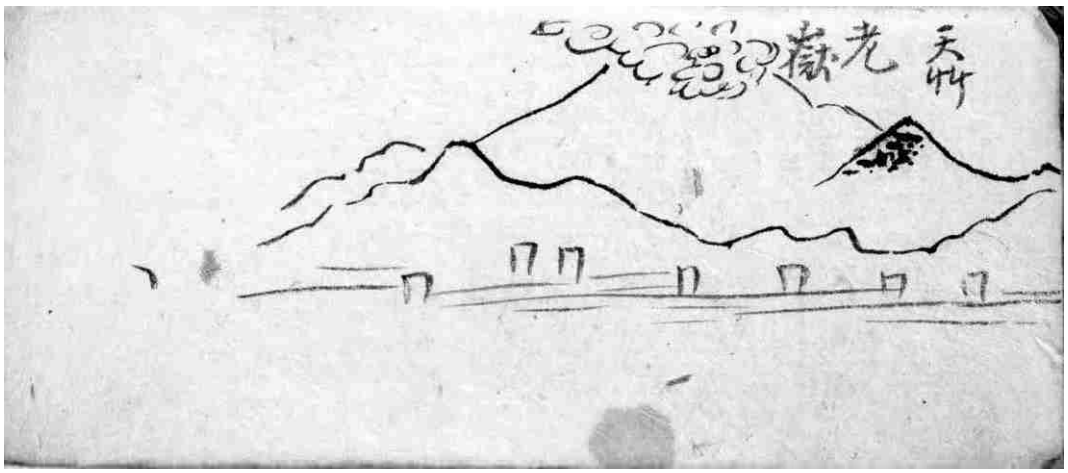
248

249

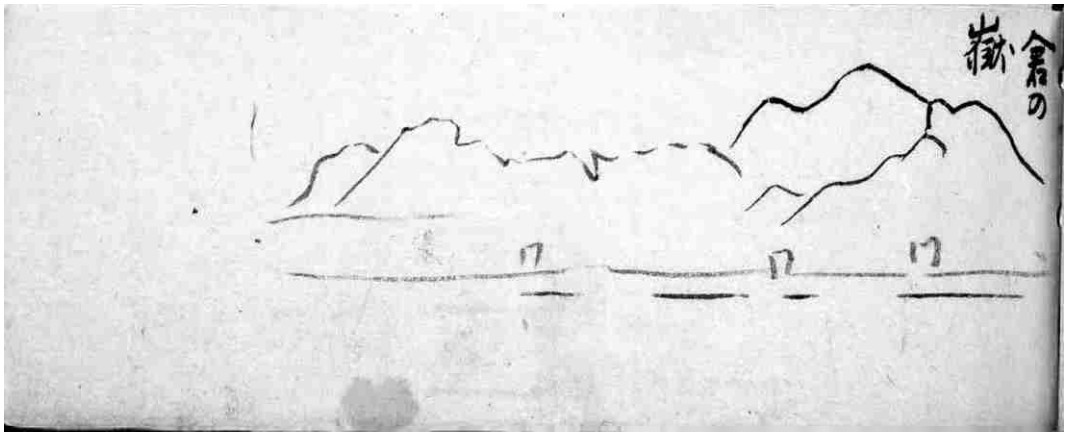
250



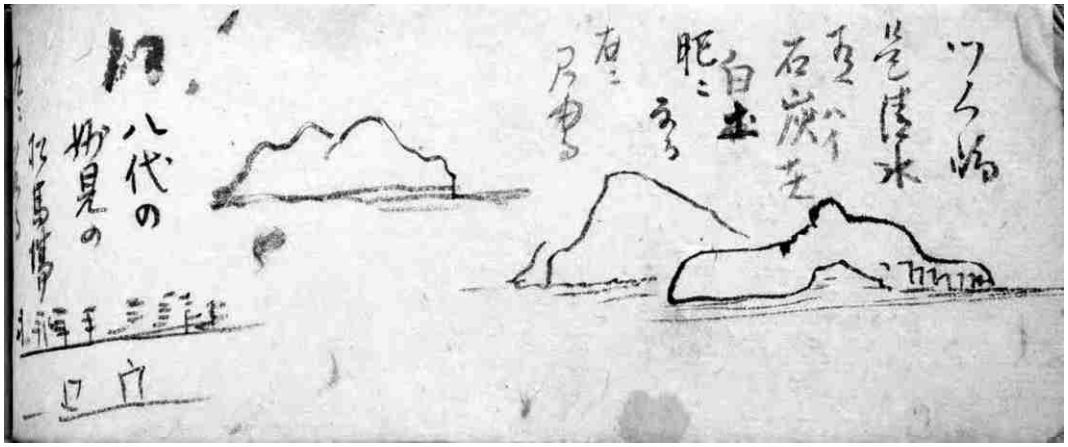
251



２５２



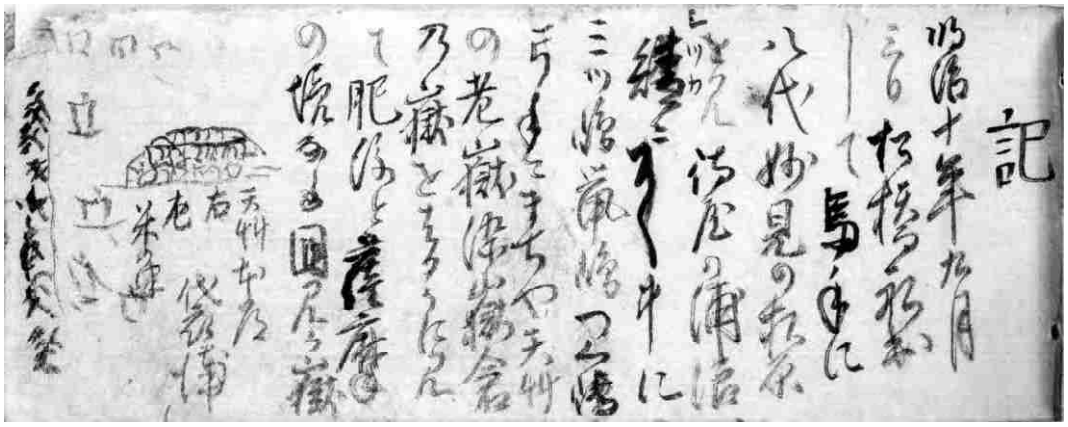
２５３



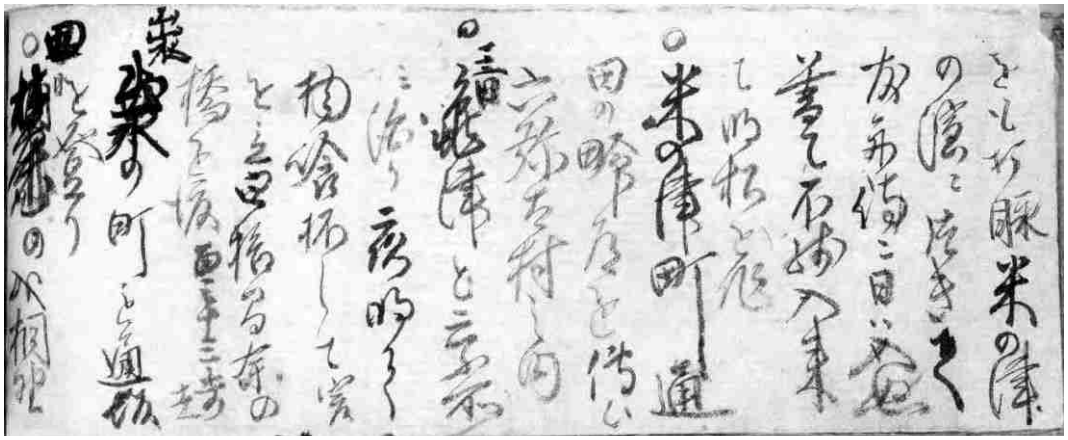
２５４

２５５

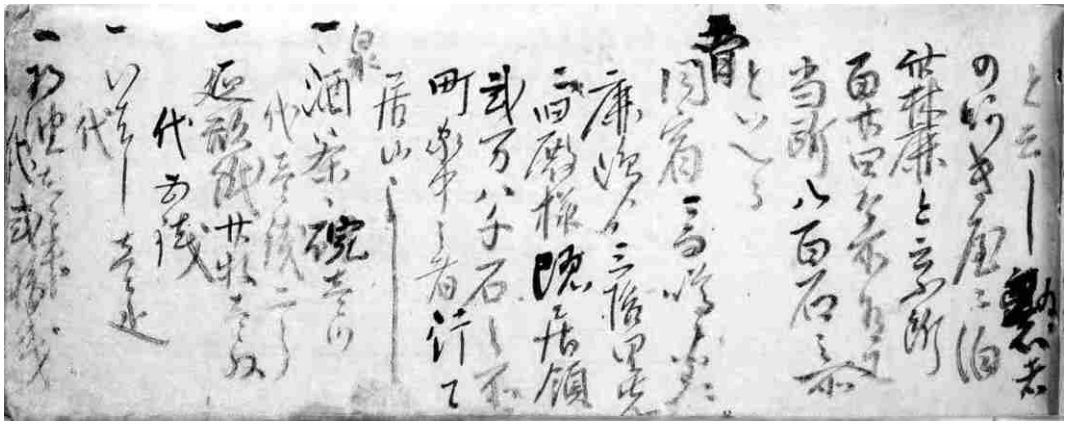
256



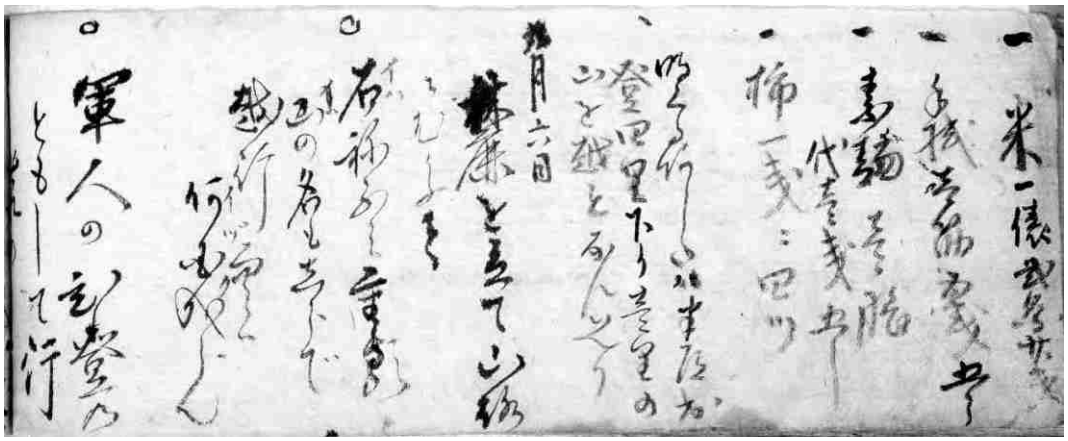
257



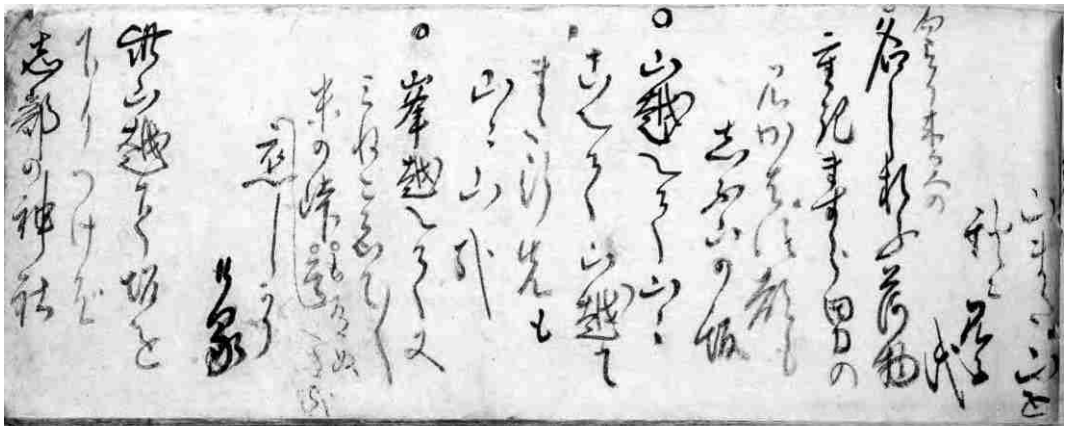
258



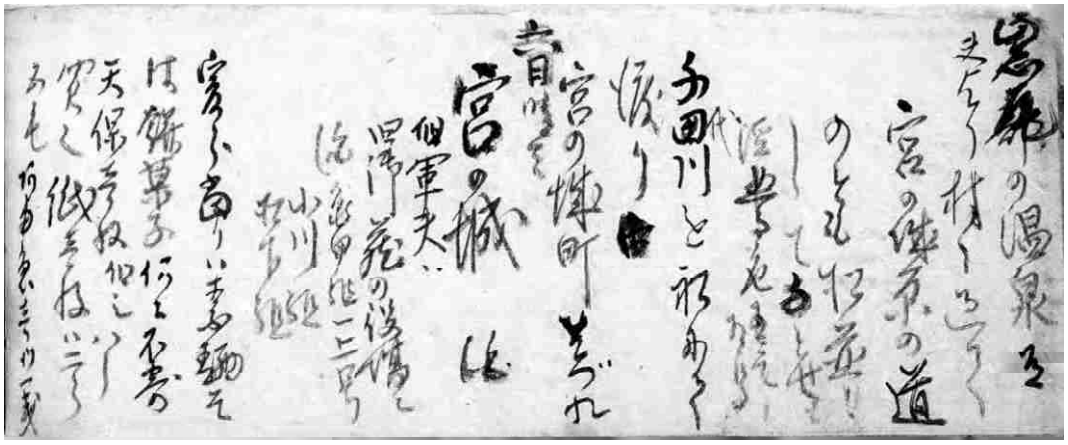
259



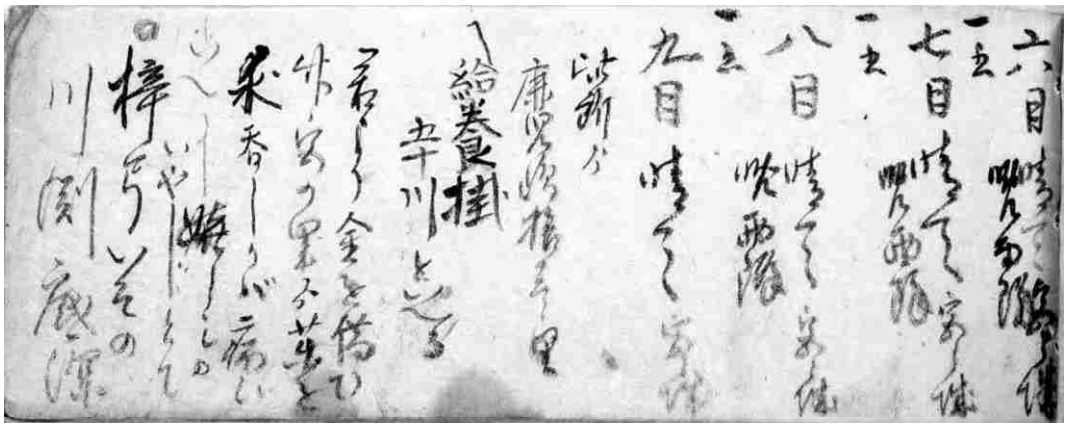
260



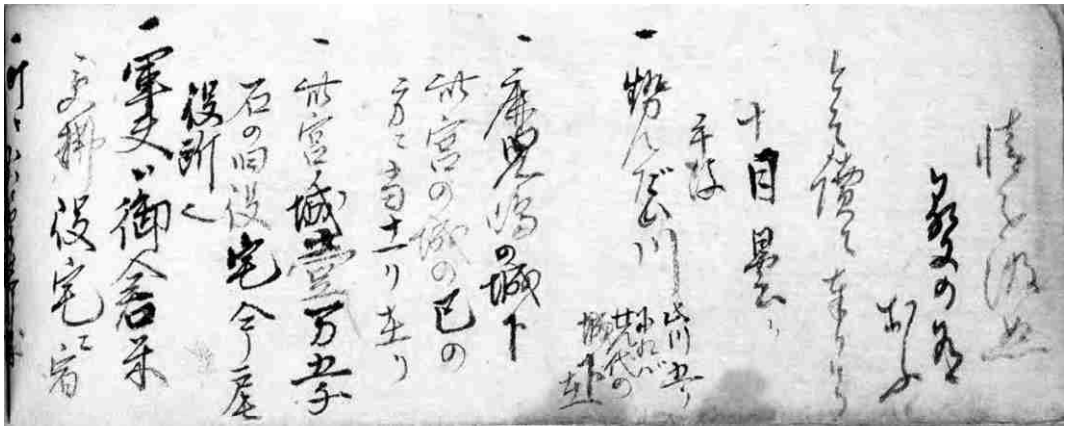
261



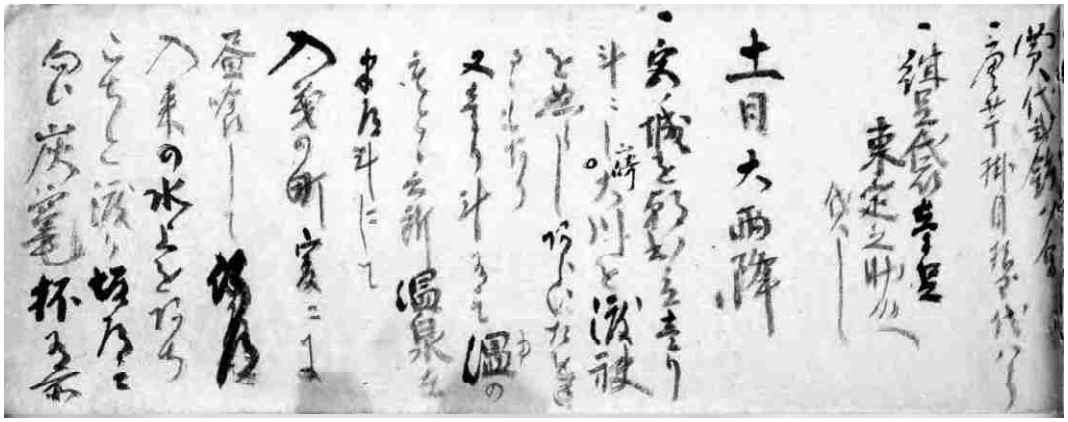
262



263



264

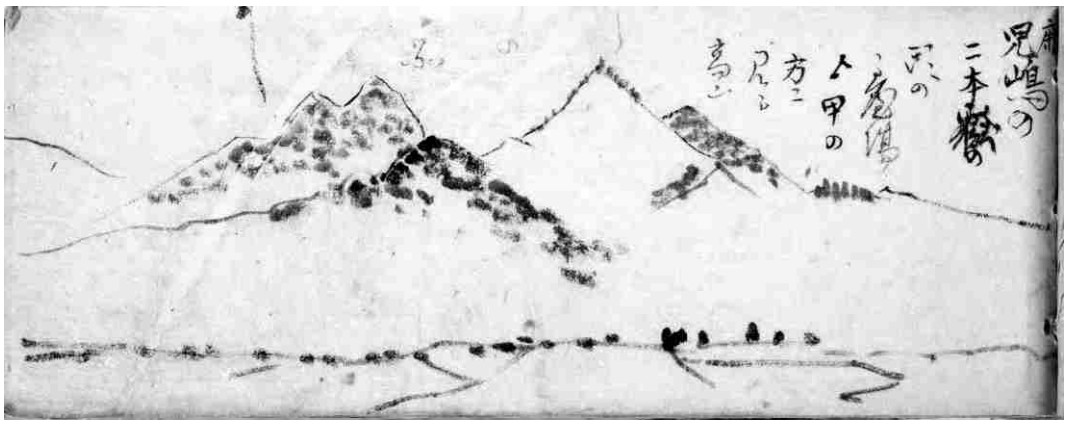


265

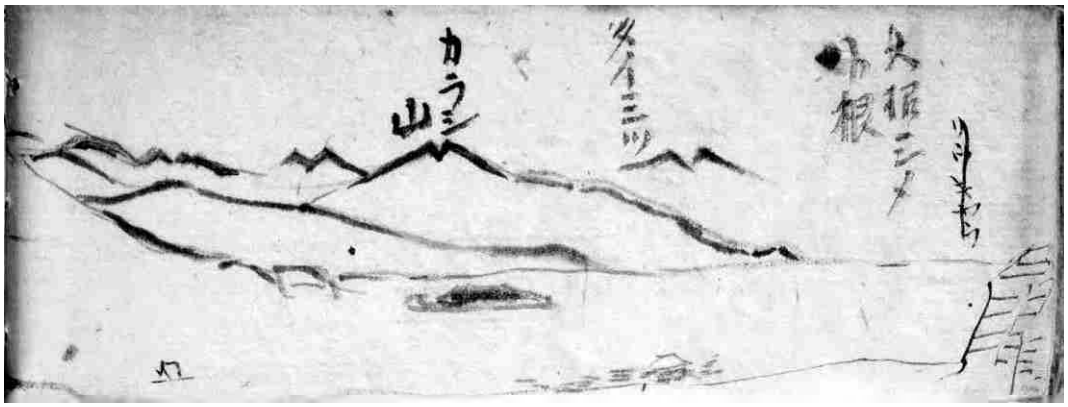
266

267

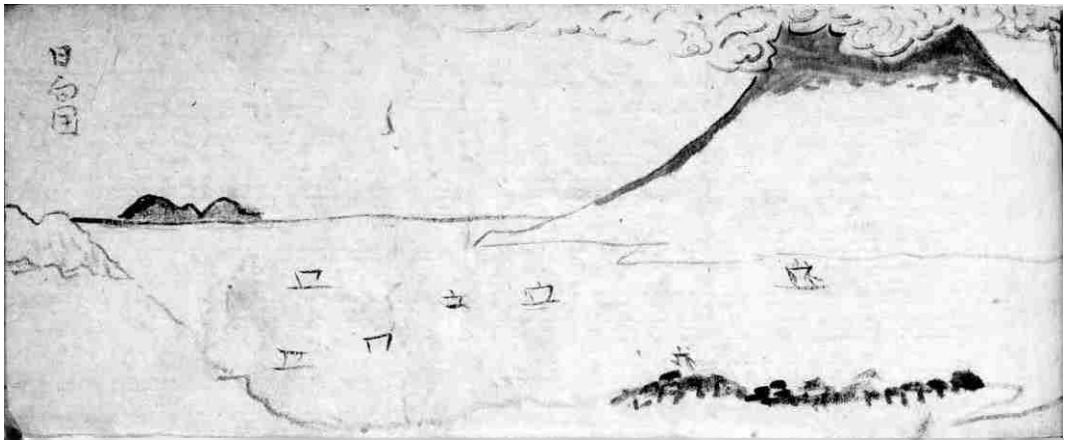
268



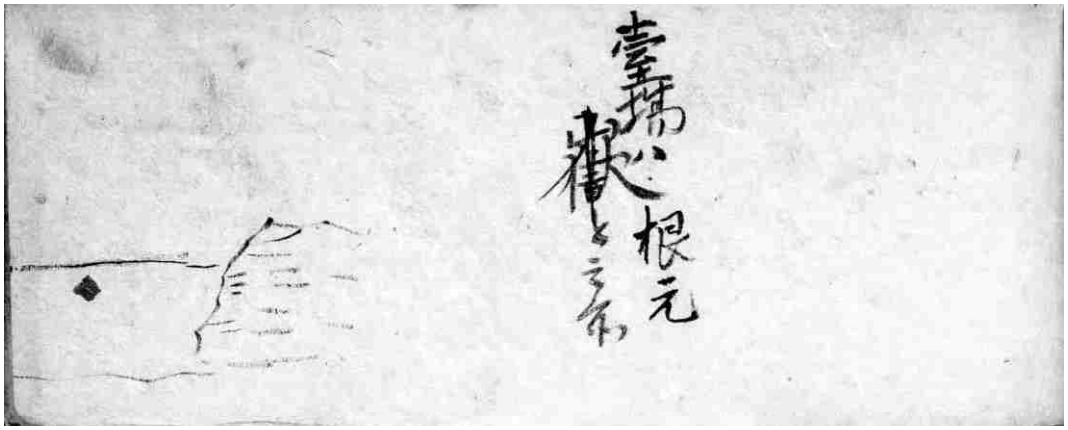
269



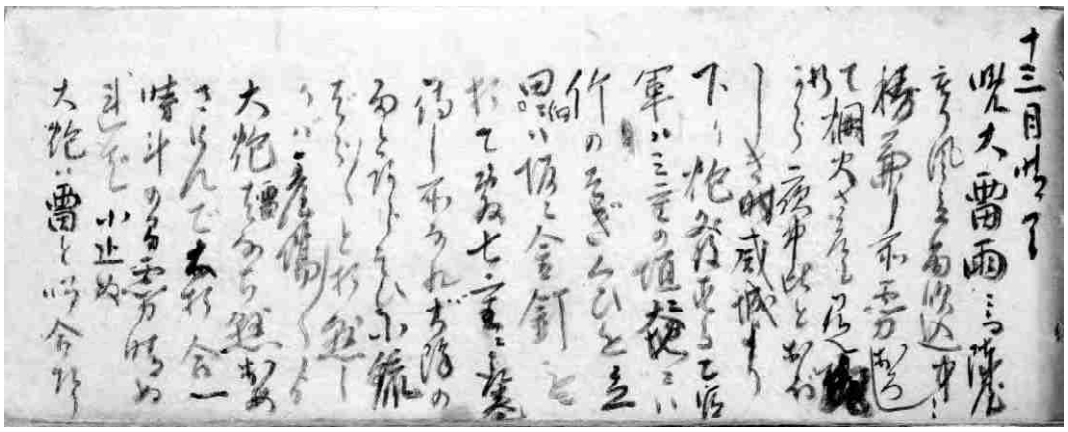
270



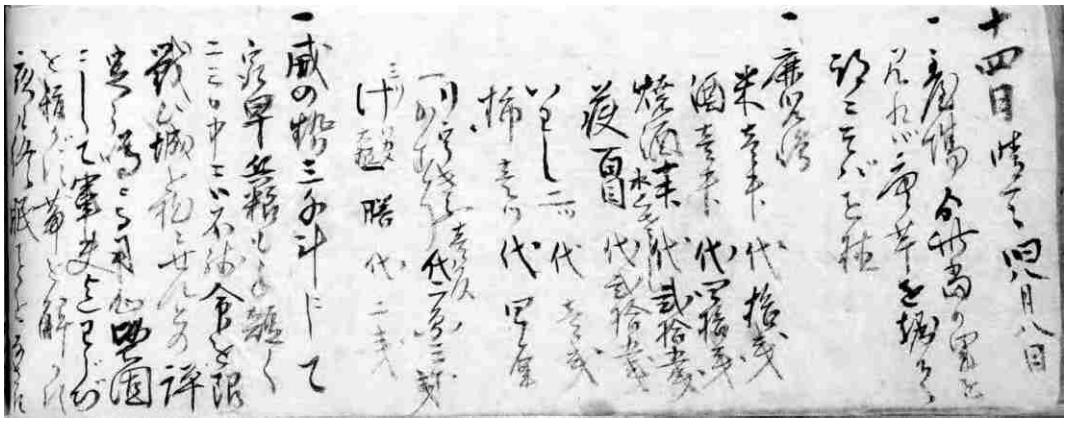
271



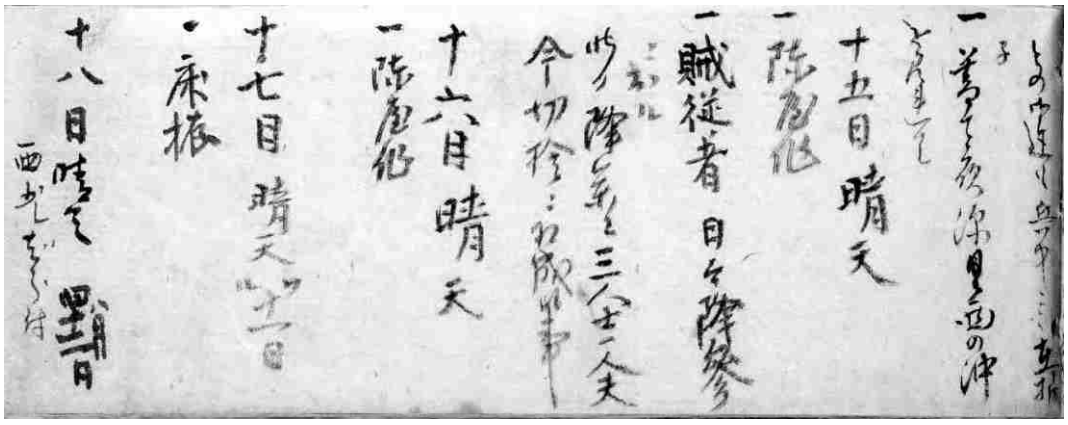
272



273

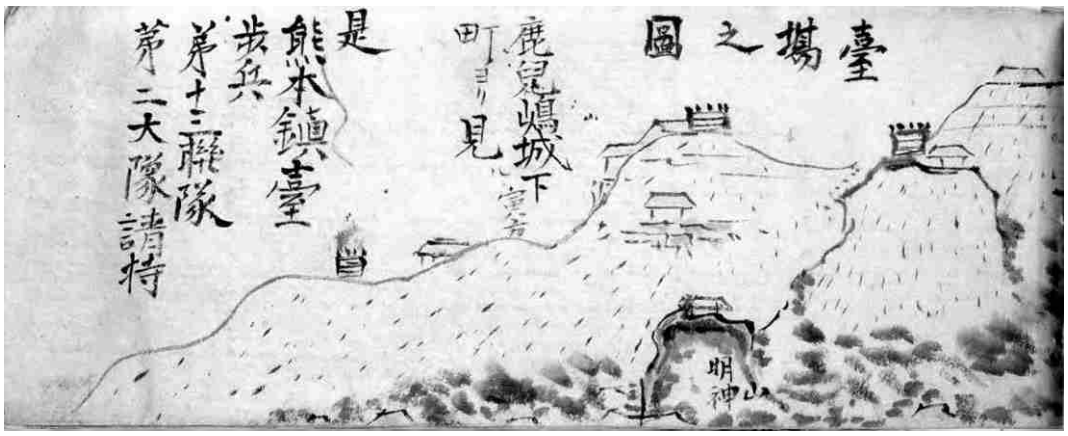


274



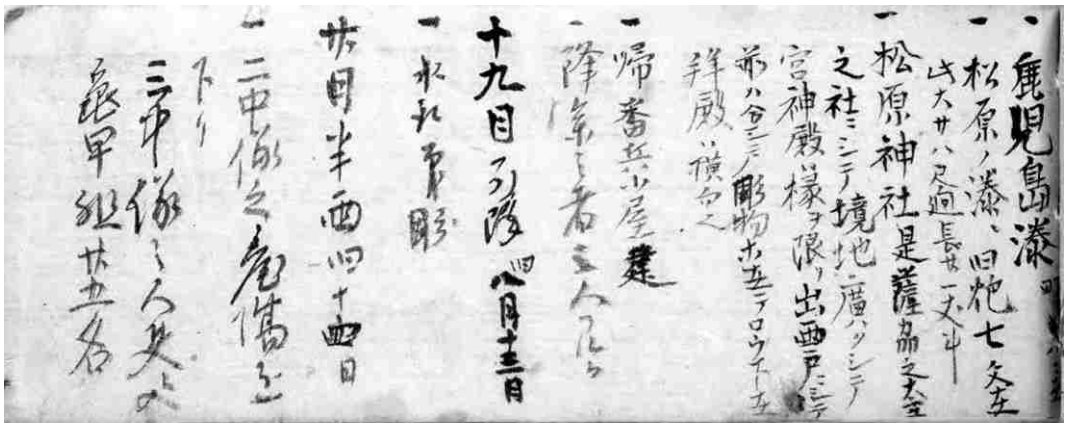
275

276

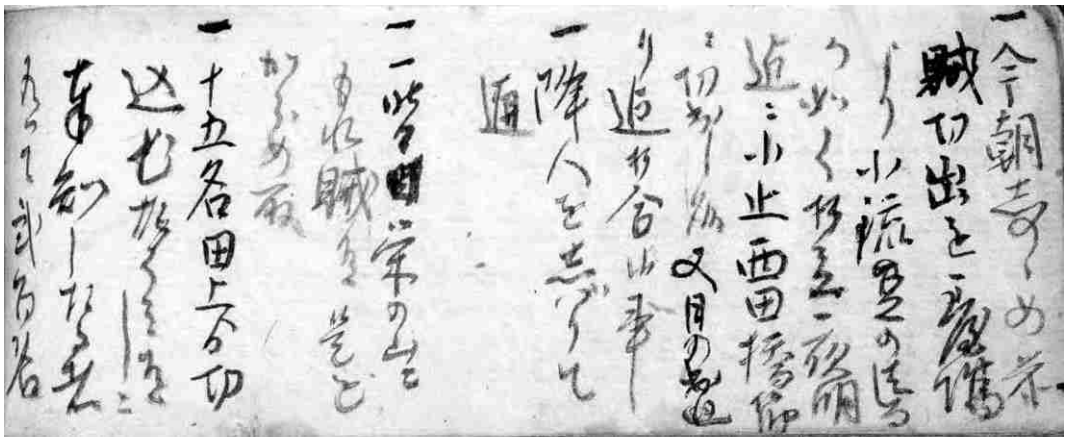


277

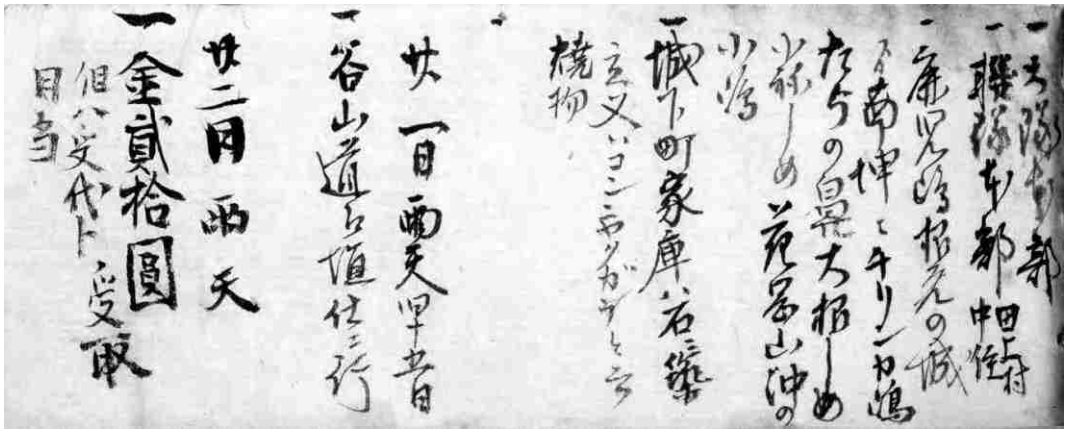
278



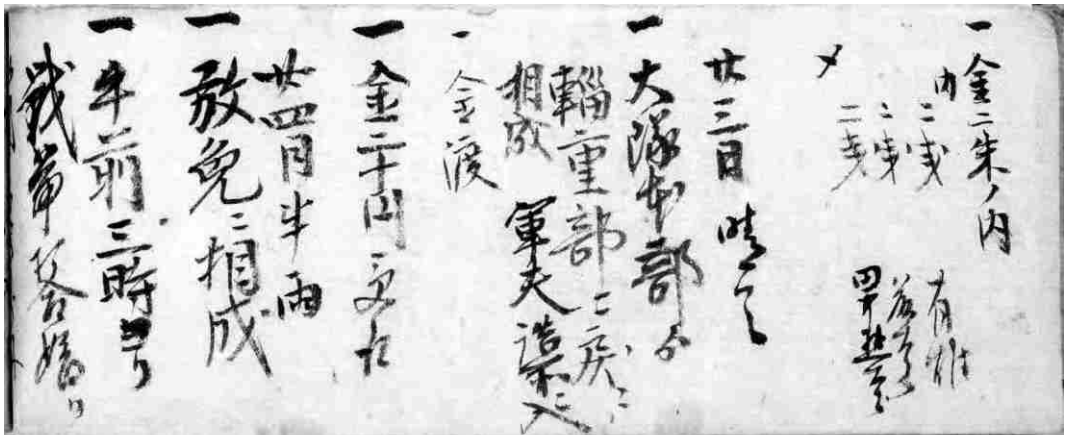
279



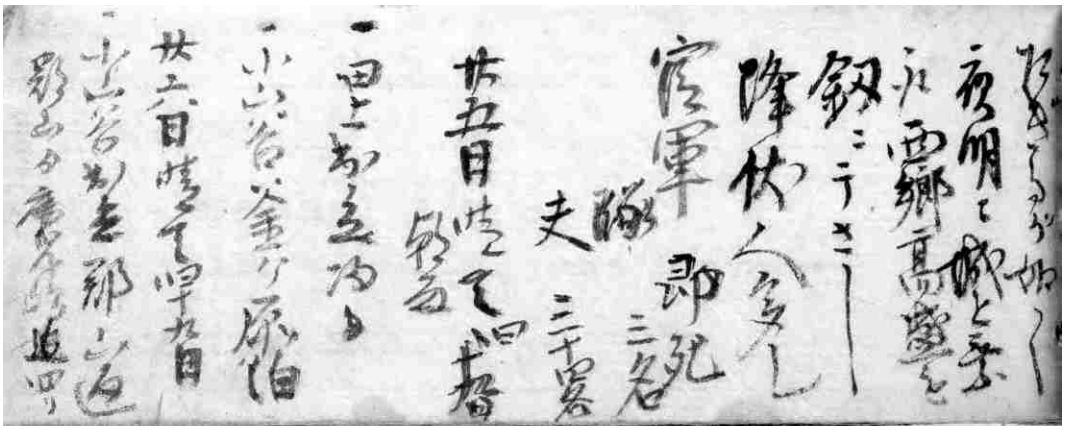
280



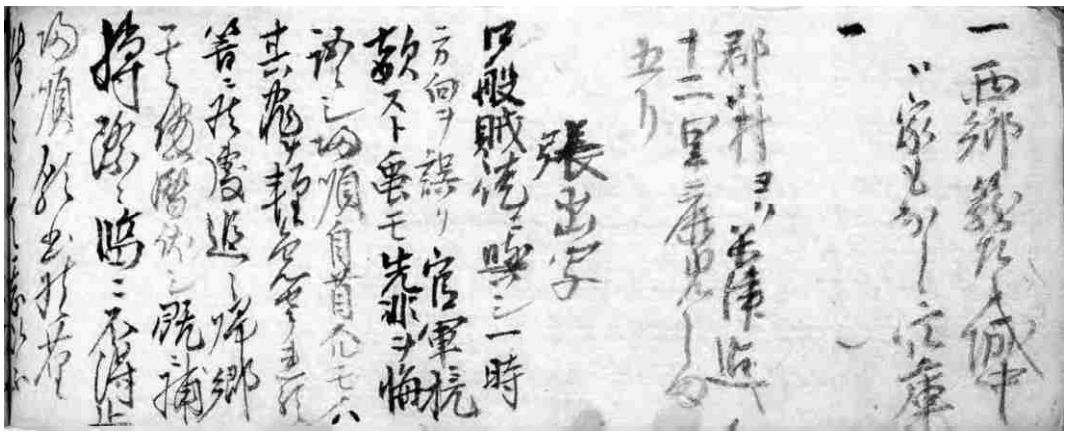
281



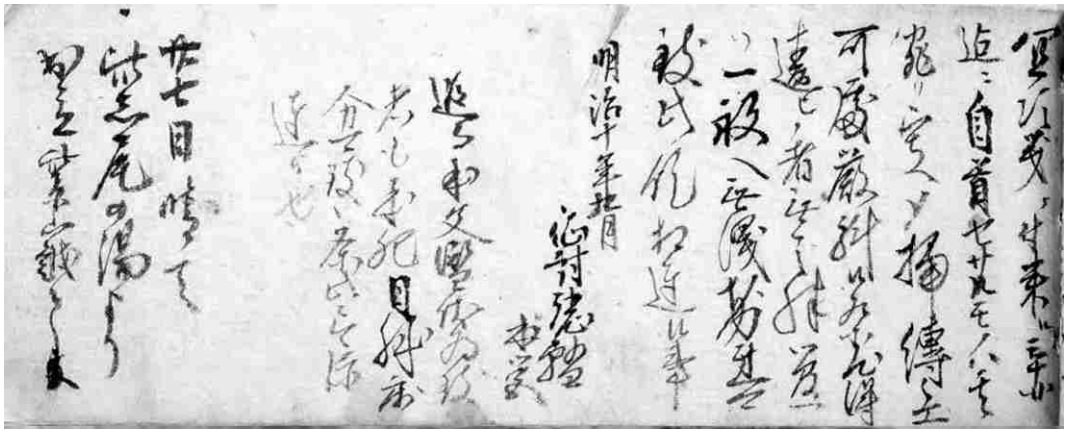
282



283

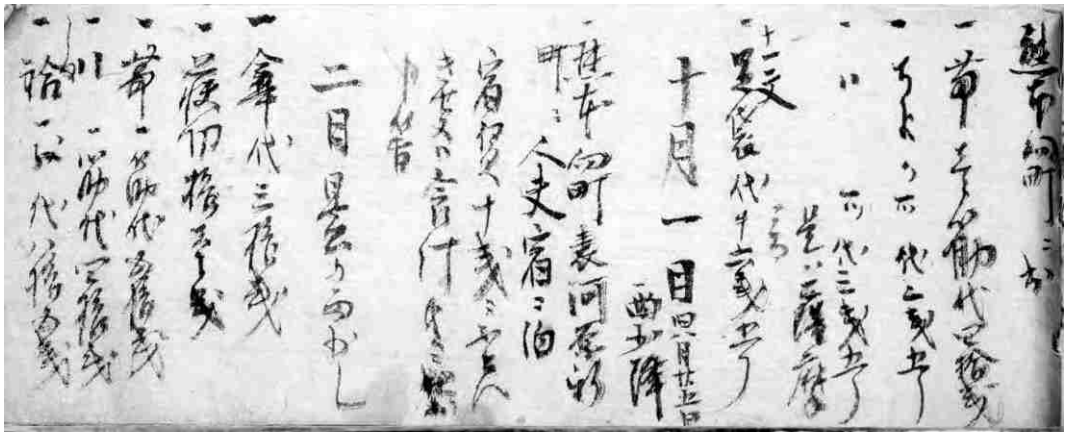


284

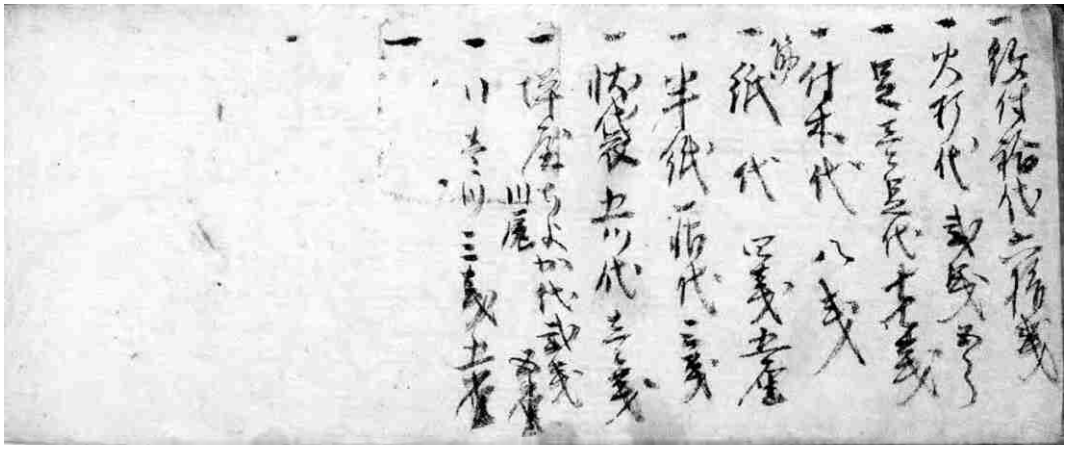


285

286

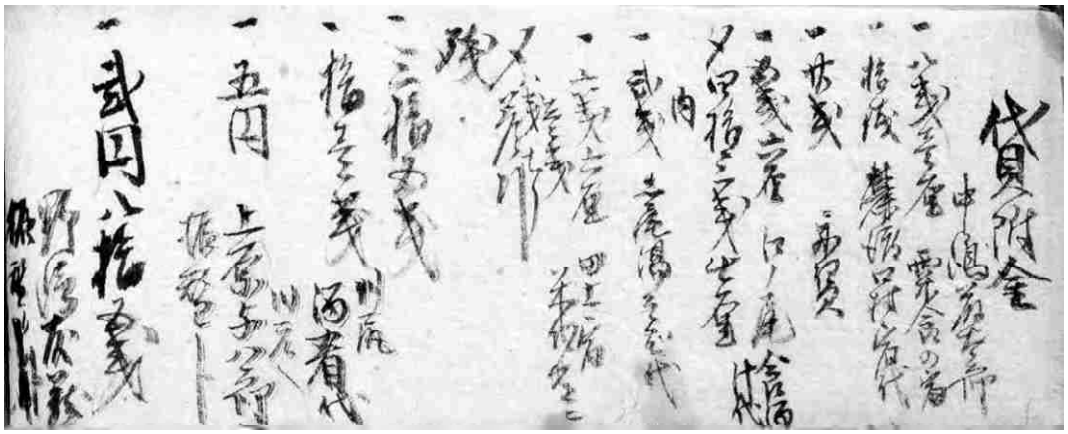


287



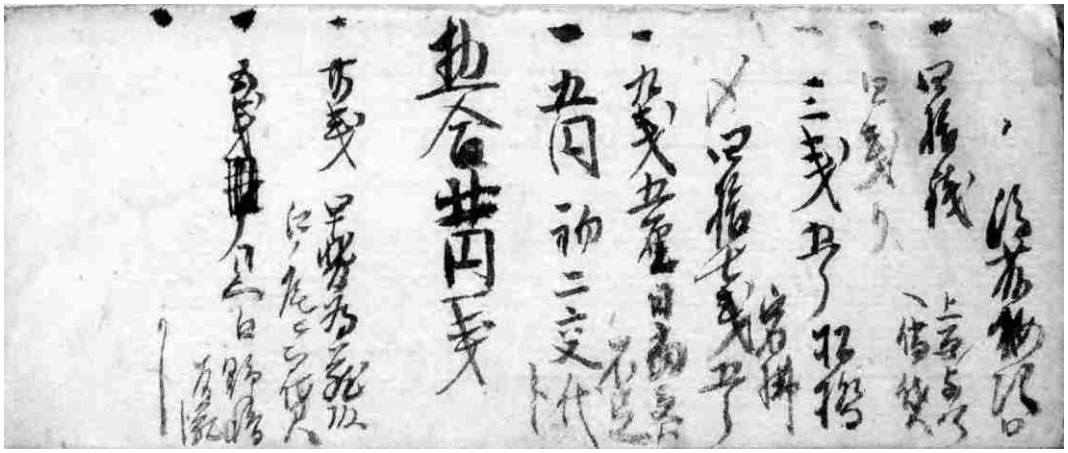
288

289



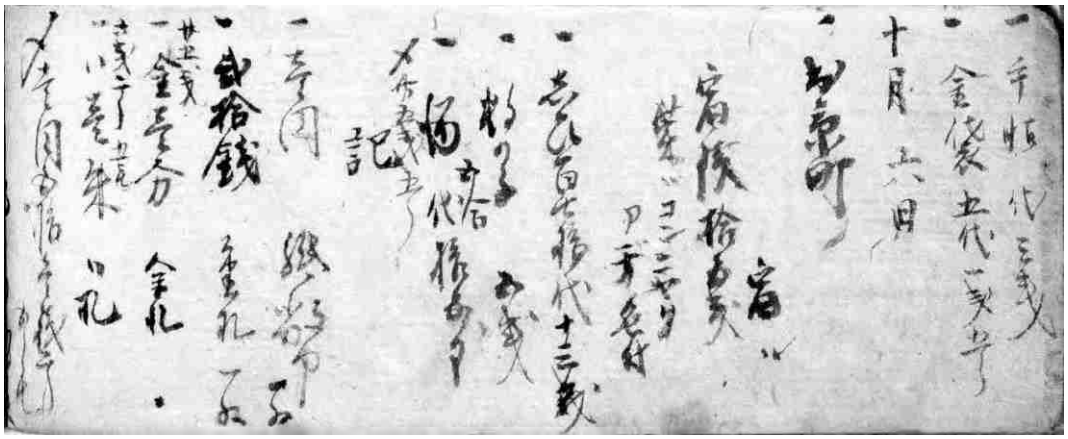
290

291

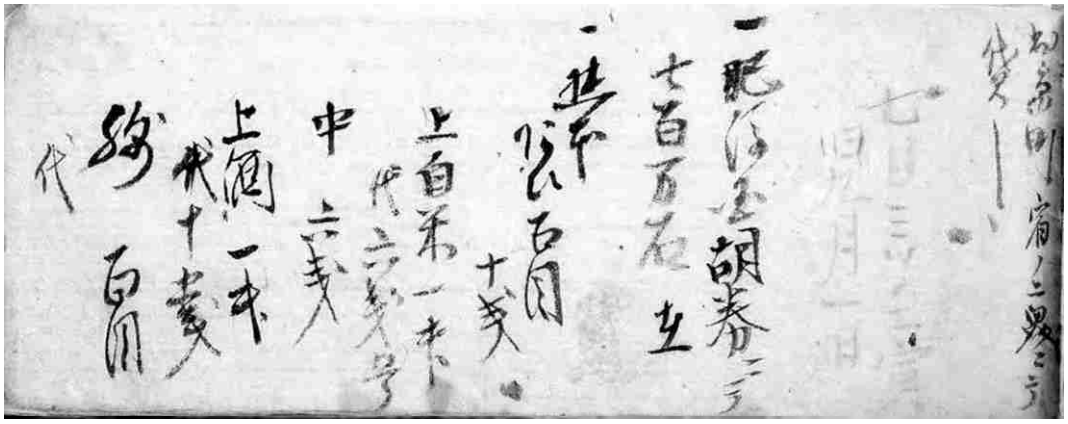


292

293

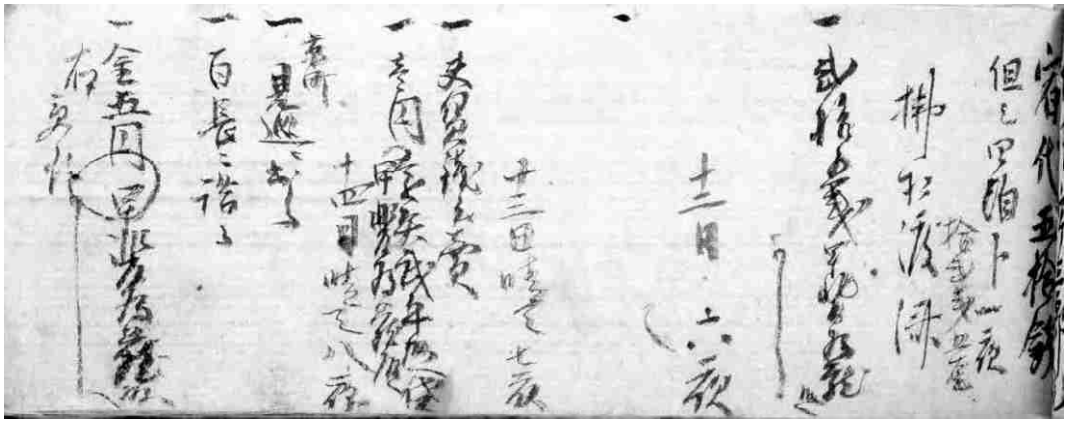


294



295

296



297

298

299

瀬井家資料「明治十年日記」翻刻

明治十年
一月一日　十七日

二日　十八日　朝雪　晴天
一　中江より帰宅、河原へ立寄権言祭ニ参り

三日　十九日
一　元始祭
一　勘次郎殿宅へウス直ニ行

四日　十九日　晴天
一　朝牧戸江行
一　金壱円朝おうき殿より
　但シ米代として

五日　廿日
一　原田耕雲様へ後藤磯平入門仕

六日　廿一日
一　大円坊常念寺ニ而説法

七日　廿二日　あらし
一　右同
一　石田多学殿へ当廿五日迄之證書渡ス
一　内田次平殿へ證書渡

八日　廿四日　火伏祭、加藤祭

九日廿五日
一
学校　十八銭
税　十三銭二厘　尾下
　三銭三厘　野尻
民費　六拾五銭八厘
〃　壱円三厘
石切　十二銭五厘
　出生御届
　幾男
　幾女
　何誰

■本月何日出生仕候
此段御届仕候也
　第何大区何小区何方
　何番地　士農工商
　年號月日　何誰印
　戸長
　何之誰殿

　病死御届
　小　続柄
　大　何ノ誰
右本月何日病死仕候、此段御届仕候也
　年号月日　何誰印
　戸長
　何ノ誰殿

一　坪付帳壱冊
　五百九拾三番地
　幸本幸八　例
但大津鉄炮小路ニ入置候町引戻し候処、永野興梠政九郎殿へ渡送る、其時明治十一月十五日

一月十三日　出立
　雪
中原高倉国松殿宅へ一泊
　十七日　晴天
一　白川古閑勝太郎殿宅へ一泊

十八日　晴■
一　下久木野新出店今村正勝殿方へ一泊、道
誌彫宿代六銭
十九日　晴天
一　道誌彫
一　宮山山口徳平殿方ニ泊
廿日　雨降り
一　徳平殿方ニ伝授ひながた作り
廿一日　晴天
一　用掛荒川熊七殿方より猪音寺茂平殿方
へ行
廿二日　晴天
一　山田半次郎殿方広伝左衛門
地蔵尊づし石取ニ正木野ニ行
廿三　雨降風
一　同人方づし仕揚
〆四工有　四工徳
廿四日　旧十一日
一　山内孫一殿方へ弘法大師作り
廿五日　旧十二日
一　右同断
廿六日　旧十三日　□天
一　矢ヶ部山ニ雪降

一　弘法大師三工半ニ而仕揚
一　午後より志内安平殿方石塔切
廿七日　旧十四日　晴天あつし
一　志内氏方石塔仕上、晩字四十五字彫
一　猿田彦神の石持
廿八日　旧十五日　辛丑
晴天あつし
朝しも
○　張三大正大二大　節分十二月二十一日
宮山
一　猿田彦太神石ニトリカヽリ
○有　○徳　初
夕部ハ済祝ひ有
廿九日張　十六日
朝雪降
一　志内安平殿方石塔切　○有
○徳
△　徳平娘おミ寿かね付
廿日旧十七日　晴天
あつし　風立
一　猿田彦大神字彫
○有
○徳

廿一日　旧十八日
一　猿田彦大神字彫
○有
一　晩風当木森出火
七竈焼　馬四疋焼死す
外ニ馬屋一ツ焼
二月一日　大張　十九日
晴天あつし
一　猿田彦大神字彫
○有
二日　張　廿日
晴天
一　猿田彦大神字彫
○有　字彫
○徳　台彫
三日　廿一日
○有　字彫
○徳　石垣築
四日　廿二日
雨降
一　天神作り
五日　廿三日

晴天
○字彫　有
○石垣築　徳
一　神體勧請
六日　廿四日
雨降
一　天神彫刻
一　猿田彦大神
八工　甲斐有雄
五工　山口徳平
七日　廿五日　晴天
一　猿田彦大神朱入
八日　廿六日　曇り
少雨
一　庚申像刻上田次三郎殿宅ニ而
九日　廿七日　本雨
一　右同断
印　廣　廣瀬伊熊
伊
十日　廿八夜　雨降
一　天神作
十一日　廿九夜　晴天
一　天神宮小社作

十二日　旧大三十夜
△　朝矢ヶ部山雪四合積り、已前あられ宮山ふり
一　小籠
○　上田次三郎殿方ニ庚申像刻仕揚
庚申刻三工
十三日　旧正月元夜
朝雪はら付
霜氷り壱寸程立
一　宮山神社へ参詣し、夫より宮番の宅ニ寄る、年始の盃をはやし、夫よりきも入彦右衛門
一　鳥前ニ北の方火事有
十四日　二夜
晴天
一　辛の方ニ火事のあかり見ゆ
△　ミきあまさけ遣
○　さす竹の宮の山々
夜を重ねても
あふふしなき
そかなしかりけり
○　さす竹の
根ふしも近ひ

宮山に幾夜すがらに物とふらん
△　宮山神社番方二人在、此給料壱竈より夏春壱升、秋粟壱升宛、於其外朔日十五日御供米壱合つゝ、大年にハ鏡餅二重つゝ、初参ニハ御供米弐合五勺つゝ、大年の夜ハ乙年とて氏子より酒壱升つゝたつさへ持て夜明し、唯神楽種々のなくさめして、夜明ニハ赤酒を献りて休して宿ニ帰る、皆々氏子中参詣して三木を奉す
一　宵之間火事之事、内牧竈三十間焼失ニ而、宮山村在男等消方へたごもつこ等たつさへ行
一　酉辛の方の赤きハ杉水と云ふ
一　宮山村大年の儀式
一　年の夜ハめしニ汁肴共を加へ夜ニ入て酒を呑
一　元日ハざふ徒計
一　二日ハ同様
縄ない初
一　十一日鍬入
一　十五日ハ綱引
十四日　二夜　寒し

一　天神細色
一　内牧三拾壱戸焼失ニ、在男縄持参ニ而普請
一　昨朝宵高町四拾軒焼失のよし
十五日　三夜
　　朝雪霜氷
一　熊本行
十六日　四夜
　　朝夜雪、熊本ニ而薄かたひら
一　熊本より宮山へ帰る
十七日　五夜　庚申
一　松へ紙面仕出し
　荷物小牧廣瀬茂八様へ頼ミ、暮て宮山徳平殿宅へ帰
十八日　六夜
　　雪降　深サ三寸
一　小社作
十九日　七夜

　　晴天
○小社作り　有
○道具作　　徳
一　熊本へ大炮三発なりしより、五ツより八ツ迄けふり見ゆ
昨日井手ノ口甚蔵小牧脇右衛門と云人の三人連ニ、熊本より今夕帰宅の物語、きのふハ五拾宛取て荷を運び、立帰て紺屋町ニ入込候処、御城より黒烟もへ上り、夫逃よといふニかけ出し見れバ諸所ニ火おこり候故走行所、道を見かへりしか飛てくる人在、ソレ追てくるそといへば一生けん命走るニ、跡より追付人を見れは是もおなじ逃る人にて有、夫より御ふく抔を積たる人力車、あや綿のほろゝゝ落るもかまはす、いきを限り引て行しとなん
△　　八日ニ
熊本へ行たる人の物語り、おしろを始慶徳堀より明午橋新屋敷迄焼、不残戸を閉チ壱人も人ハ不居、只あちこちするハじゆんさ計、ふしん成者ハ切捨之よし
△　川尻ニ船多く、遠目かねニ而相見へ申候事

廿日　八夜　晴天
　　少し雪
一　火伏地蔵作り
一　中園山本林作殿方へ年始ニ招かれ候事
△　夕方熊本火の明り在り
廿一日　九夜　晴天
一　熊本ひめもす煙立、西山の左り手見へて西山へなびく
○お志路をも、くろ熊本と、成りニけり
〈なげかわしきハ肥後の熊本とて、鎮台も居り九国二嶋四国の兵も集、繁栄の色めき賑しき都にて、ハふり本とからハ手もあてられぬよふがひを、内からやぶる栗のいがもがたちかくるひ屋ぶり、初て鎮台をうちしよりおたやかならす、又もさつ州よりせめる噂かな
考難義も出たりけんニ、熊本の旧士もさつよりたまされしならんか
△　筒の音唱止ず
△　九ツ比大炮の音三ツ在
△　夕部ハ向ひ町三舟口より焼亡
△　又々大炮・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
○　西山辺へ地獄の煙立かびて、弥陀の助も
　及ばさりけり
△　先知事公御帰国被為在候事
△　城跡ニ台場築多の事
　見物ニ集りて
○　とん
△　宮山数上より見物ス
○　西山ハ死出の山ちかく見れバ、かしや
　くのけふり立おふゐけり
△　かの所ニ御達状着の事、鹿子嶋ほん件相
　顕候ニ付せいばつ仰被仰出、大政大官三
　條実儀より雷報行如期
夫より味曽塩米等用意置可申候事
　《図あり》
ひの国の、もゆる煙の立登る、雲の上にもあ
われとも見
久かたの、雲の上をも曇り迄、ひのくまもと
のもゆるけふりハ
△　六半五ツの頭と思比、大炮二発音スけり
・・・・
△　台荷勢、今夕高森泊之由、万徳詰所へ通
達之由
三廻りの四廻り来ハ春か渡ハを
終夜天をこがし熊本之方明り渡り、鳥後矢ヶ
部山の方南郷当火のあかり相見へ
廿三日　十日
△　早朝筒音数限もなく、竹の子をいづるか
　如く聞ゆ
△　町焼拂候跡ハ壱間一坪弐円五拾銭宛御
　渡し方の事
△　鎮
△　縣聴御舟ニ移のよし
△　昨日井手口小牧より廣瀬用平列熊本行
　之咄ニ、五尺六尺の桶へ白米一はひつめ
　置たるを、たれにても唯くれ候といへと
　取者まれなり、塩米重々倉ニ入置戸をゞ、
　追々跡焼拂申跡ニ残りたる城より火矢
　打かけ、倉ニ当るをいなや内より火越
　かゝり、八方ニふきかるとなん
△　大筒小筒の音巳の刻たきり止、又夜すが
　ら大炮の音まれにし、暁がた志けし、北
　ニ唱南ニ唱
廿三日　十一夜　あつし
　夕方雨
一　熊本行、本村迄
廿四日　十二夜　朝雨
　さむし
一　宿へ手紙認かへす
廿五日　十三夜　晴天　寒し
　朝霜氷
一　不動尊作
▲　薩州三百計万徳通候
廿六日　十四日　晴天
　御立ち　甚寒し
一　不動尊作
△　藤崎宮嘉藤社ハ竹宮へ移し座候也
廿七日　十五夜　晴天
　寒し
一　不動尊作
一　天神宮開眼
△　薩州南郷より千騎万徳ヲ通との噂有し

か、四十人計通り
夫　馬二十八疋宮山より立ツ
人三十人
歩夫六十三匁
馬七十目
右万徳より保田窪迄
一　大炮まれゝゝニして唱止す
一　薩州より多くはなちしか、城方より一ツも熱矢うたず、物見より見てハうちゝゝし候よし

廿八日　十六夜
一　河原内すの倉助左衛門
地伏石割ニ行
○徳
○有
一　矢七枚　下こが
しぼり　藤左衛門殿へ頼置候所、旧十七日朝六枚多取夫助右衛門
△　大田九郎うちてとして、もんでと云ふ処ニて士五人帯刀ニ来、泊り候よし
一　宮山内目はき池田遠園宅へぬす人入、着類五ツ、夜具五貫目がた程ぬすミ取、逃候事

三月一日　旧暦正月十七夜
○石割　徳
○同　有
△　晴天晩雨あられ
所持之道具
一　矢十六枚
一　げんのふ一ツ
一　かなでこ壱本
一　鶴はし　弐丁
一　ぼた　壱丁
一　のミ　四本　徳
二本　有
一　■　二枚
一　つほかね　一前

《中表紙》
明治十年巳
二月二十八日
大陰正月十六夜
晴天

一　河原内須之倉竹内直七様宅地伏石割ニ入込
○有
○徳

三月一日　正月十七夜
晴天四時分より雨あられふり
所持
書籍
一　菊池軍記　○二三四五六七
○九十
〆八冊
一　仏像　四冊
一　千字文　一冊
一　消息往来　一冊
一　ひさくりげ　一冊
一　孝子伝　一冊
〆
一　字彫たかね　二十八本
一　ぼた

二月二日十八夜
晴天

○　有
石割　晩帰ル
○　徳
一　百田紙壱帳
竹内娘へ借
一　金弐拾銭
但シ同人ニかり、鍛冶入用
△下古閑鍛冶尾口
一　細工料五拾二匁之
内　三拾目入置
残弐拾二匁かり
二月十八日　九日
一　尖七口　しぼり
代五拾目
一　鶴はし一口しぼり
代四匁五分
此処に金弐拾銭入置
同十九日朝
一　鶴　壱口　とぎり
一　のミ　壱口　とぎり
廿日
一　鶴はし二口しぼり
代四匁五分

廿日
一　のミ一口ときり代壱匁
廿三日
一　のミ四口トギリ
一　鶴はし一口トぎり
一　同はかね付一口
代二拾目がた
廿五日
一　鶴はし二口しぼり
一　ノミ三口　しぼり
一　ぼた壱作　一口
〆ノミ九口
ツルハシ六口
ボタ一口
鶴バシはかね付
代弐拾目
差引残
代合六拾三匁五分
三月十一日旧正月廿七日
拂相済
三月三日十九夜
晴天寒し

○徳
○有　石割
一　南郷谷在百姓壱騎起り、同役人夫共山西へ逃籠るとそ
一　午前より須の倉の上より戌の方ニ当り、筒音切間無之とよめき渡り、間々大筒之音唱響事雷の如し
一　見る人高瀬にとぞいへる
一　熊本より北ニ当る
一　熊本之方にも煙散乱す
一　亥の方ニ午時分烟立ぜんと相見候事
《高瀬七ッ山の図あり》
△　此比植木ニ而ハ官軍薩州勢相戦ひ、両陣共ニ二三十騎成り官軍逃しとなん
△　申刻より筒音止
▲　木葉の方横嶋の方、夫より壱里宛も間道五ヶ所烟ゑんゝゝと立登
一　干田ノ道帯刀したる人、腰ニわらぢ二足付たる人、おとゝひも通しかまたもけふ通り
此須ノ倉ヨリ
木山町二里　熊本五里
御舟五里　灰床一里

山鹿本町九里
晩の物語
〈焼酒殿ニ酒様
けどふたご汁
ぬす人唐いも
〈呑めゝゝと、いふ奥さんハよけれども、呑せぬかゝの面のにくさや
○はれ物出来たる所に行て、夫ハまじなひならよかるべし云女心か酒肴を出してもてなし願ふニ私の申通ニ云べしとて
〈曇らば曇れ箱根山、はれりとてといふがいなや摺こ木行追出せしとなん
一　筑前の国人ニ大長者有けるか、此家の先祖ハ堂ニ六歩の宿り病わつらふニ、村中よりかわるゝゝかひほふしける内、乳を呑このミける、夫ハ子をいだき妻ハ行て乳を与へんと云けれバ、いだきて給へと云ニ痛伏大小便ニよごれたるもいとわず与へけれハ、嬉しかりて頼ひ仏ニ仕込たる金をあたえる故、かれが死すれハ引受て埋てくれ、残ける金を国へ送しかば倍増ニ添て返しくれしニより、かこ之栄となりしとなん

三日
▲　夕部暮て五ツ比と思ふ、須の倉の上ニ登て見るニ熊本より北ニつゝきて二里、三里、五里計ニも火炎々と照りあかり、熊本へ筒の音の有を見れば花火にぞ有ける、何れものろしと云物ならんか
○　火のなかゝゝ
○　するかと
見れハ簾柳星降し、種々の火術有けり
〈風にだに、吹せすそだて揚にしも、嘸な軍にウたれ死にけん
三月四日大陰廿二夜
朝曇
△　矢ヶ部三ノ峯麓迄真白雪のふるニ、此里の梅ハちりし也
〈一ノ峯二ノ峯雪の白妙の、ほし田の梅とくらべてそ散る
四ツ比より雨降、終夜降如し
一　夕部共ニ二夜続て隣作太郎殿事管見し事
〈久かたの、天津雲ゐのさハぐにぞ、国民くさの乱やハせん
△　大砲の音どよめきて雷声ニもとならす
△　一昨日南郷打崩し而且焼うちのよし
△　薩勢三百騎計討取したると云々
薩ニ組したる肥後士討取したるを健軍の寺ニ送り成来る由、真光寺と云此寺戦死ハ送るよし
一　子の刻比、地もゆるぐ計ニ大砲の音とよめき渡
一　自然石字彫料五銭
五日廿一夜
雨水雪まじり
一　石塔字彫料十銭
△　筒音有まれなり
沼山津郷河原
道誌
門出
一　右もんで　向ハほし田
左下古閑
しもこが　△　所ハ須之倉
右よりすの倉通り

ひたか
たきむら道
左いわうじ　　栖高
一　右たき
左す高　　所山原
一　右山道
左医王寺　　所ハぢん内
右道印彫
午後
一　石割損じ
六日二十二夜
晴天
一　石割　○徳
○有
△　筒音朝有て小止るかと高根上りて聞ニ、さながら竹山江火の入たる如くとよめきぬ
《図あり》
一　高瀬之方ニ当り筒音かど見渡ぬ

一　阿蘇辺ハ金持、役人家宅を打崩したるよし
△　熊本ハふちはなれ一荷商売三千五百計ハ今日かつ死する者有よし
△　知事様御一門錦野ニ落御座有しかとも、打崩しそふどふ故、布田旧宅へ御引移りのよし
一　ほた一ツ借候事
△　晩熊本へ明見へ、同所の方ニ当はるかに大砲の音すなり、大嶋ならんか
高瀬の方ニ当、是よりか遙先ニ筒音しげし
△　保田窪へ薩勢陣取するとのよし
△　終夜筒音不絶
△　薩州より来軍大数ニ而、西郷吉之助と云
《図あり》
石工
一　七寸角　二重台　一方面
代壱円
一　八寸角　二重台　一方面
代壱円五拾銭
一　同角　三重台　同
代弐円五十銭

木森石工　　元名林左衛門
渡邊林作
噺ニ
一　竹宮信光寺径
百五拾斤在
年廿八才
○布田郷山西河原
言葉
家の内と云ふをイエシチ
表を　ごんぜん
座敷　おざ
おけそくを　ヲケソコ
頭娘を　惣リョウ娘
他人を　ヌシ
神仏ニても首を　ゴヲラ
かすりたごを　テヲケ
下水ためを　ドブ
惣はつを　ソウジヤ
柴切鎌を　なつがま
風儀
正月ハ早く先祖墓参ス

同元日ハ宮参り、夫より十五日毎月朔日十五五日御供米壱合、又ハ弐合五勺三合持参詣し大年の夜ハ鏡餅を家毎より献

一　年娘ハ豆の萌ニ白身くじらの吸物ニ手酒のにごり、肴ハいろゝゝ

一　正月ハ先祖の初命日、茶立と云ふて親類を招て赤小豆食せかしきて居、手酒を出す

一　十四日のどんとや

一　年娘とて親類縁者の出入もきわ立たる事もなく

夏秋祭の客をけふ応する事甚し

七日二十三夜

晴天あツし

矢ヶ部雪半分消

一　石割〇有

〇徳

△　錦野、岩坂、外牧

薩州戦死植木より川尻迄持夫ニ出る

一　今朝小森村寄方致し、士族平民有男ニて籤取いたし、何時申来候而も順番ニ出立筈之由、熊本近在ハ三度四度行候よし

但夫方昼食持参之事

△　今日も筒音繁き事

けふハ横嶋ニ大筒小筒音繁し

一　須の倉小屋入

〈其座ニ門出の住人住吉新蔵と云人来居、此父ハ内膳様家臣ニ而御物書相勤候人ニ而、教導師のよし

一　林田庄次郎殿

是ハ宮山内たゝら人故、石塔弐拾計頼ムとの事

△　終夜打合の筒音しげし

〇　錦野銀主赤星ハ南郷より押寄、是を聞帳元を遣し如何様の相談にも入可申間、打崩義ハ断申との事に而

九日廿五夜朝雨

終日雲雨まじり

一　双番作〇有

〇徳

二ツ

七福神

三上

金入にけりされハ、徳下の備にハ松竹嶋台ふきのだひ、大ばん小ばん壱歩弐朱、こなたの床にかさり立、猶も目出度御代なれば、祝ひ楽む其折から、志つゝゝと入くるハ西の宮のゑびす三郎、いくわん（衣冠）忠しく入ゐエバ、思ひ懸無き人々ハ、敬ひかしつき奉バ、三郎ゆふびの御声にて、さいつ比預け置し大黒天、何卒今日お返し下さるべしとのべらるれが、聞より福録ぶつてふ顔、ならぬゝゝ成ませぬ、いや何大黒天、其方ハ此屋にて一生福を守る所存よな、某し様ざま思案を尽せども、人数とても相揃わす、おつ付ひしや門天もきたられ申なバ、御へんとふも申べし、先夫迄ハ奥の一間で御休息、拙者もりよこふのつかれざんしやのきうそく、先夫までハ神だなにて相待入、さらバゝゝと云すて神たなさしてぞ入にける、跡に大黒両手を組、思案にくれていたりしが、弁天一ト間を走出、もし大黒様お前ハ恵ひすさまの言葉に、付いぬる心でござんすか、ほんにゝゝ恥し其やに見ゑし、此日よりましりとがりの笑ひ顔、福在寿と思ひそめにし事ハ、皆金取たとへていはバ、小金の

いやし此身とあきらめても思ひ切られぬ福の道、我身もとんと大黒の、ひざに打ふせしやくり位よふすを聞居布袋の志ん、一ト間ノ内よりひよかすか走出、是々お弁さん何をいわんすぞいな、あのまつ耳のはの、ふとひ布袋さんの事ハおもわひで、あの色のくろひ黒ちハケからすか、又ハお鍋の尻を見た様な大黒天、聞へませぬおべんさん、わたしとお前の戸棚の中で、思ひそめわたしがおもひかすゝゝハ、山で木の数かやの数、千里がはまの砂のかす、決におまゑがとふよくな、あの大黒にほれたとそ、きこゑぬわいなと取付ひて、尻をひねりてもだへ行かゝる、折から表の方大音上にて呼ハりゝゝ、ヤアヽヽ大黒天必すさわぐ事なかり、七福神の旗頭布袋も残らず揃ふ上ハ、末世末代いつまでも、とふけの御倉に立籠り、福をあたゑて守るべしとのたもふそと、諸共にやこゑを唄ふ、国家こく万々歳の末までも、岩井重ぬる目出度かりけり

落

□大黒天ハ此屋の福神返す事ハまかりならんトちりはひ付ねば恵比須三郎

△　狂歌を送りし

かへしとて

吉住大工之父

吉住伊良八

〈其はし内大臣の末なるや

甲斐君夕部見かねて

けふか驚く

〈あら玉の、春の日めもす夜もすがら

しつ心なく矢音筒音

〈筒音ハ、いさましかりと云出て

心に思ふあわれものゝふ

七福神

金入にけりされバ、徳屋の備にハ松竹嶋台ふきの台、大伴小伴一分二朱、こなたの床にかざり立、猶も目出たき御代なれば、祝ひ楽む其折から、しつゝゝと入来るハ西宮恵比須三郎、衣冠正しく入ぬ■思ひ懸無人々は、敬ひかしづき奉バ、三郎ゆふびの御声にて、さひつ比預け置し大黒天、何卒今日お返し下さるべしとのへらるれば、聞より福録寿ふつてふ顔、ナラヌヽヽ成りませぬ、大黒天ハ此屋の福神、返す事ハまかりならんトちりはい付かねば恵比須三郎、イヤ何大黒天其方ハ此屋にて一生福を守る所存よな、某しさまゝゝ思案を尽せ共、人数迚も相揃ハす、おつ付びしや門天も来られるば、御返答も申べし

十日廿六夜

半雨

一　双番作　○有

○徳

昨日二ツ今日五ツ

合七ツ

△　筒音まれなり

晩亥刻より筒音はけしく、暁に原ニ出見れハ高瀬の方ニ筒音たぎる

又大砲聞

十一日廿七夜

晴天朝霜

山々見れハ高根ハ雪の白たへ

△　鳥子より百姓一騎のさたニよりて宮山

木森さわき立るよしを聞て

〈久かたの天津

めくミを待も

せてあしき風にや
さわぐ民草
〈仇に吹風に
乱る民草の
何をうらみに
立さわくらん
○　昨日上色中原百姓一騎ニ而打崩
正月廿七日
一　医王寺村　第四大区六百廿七番地八小区
片嶋丈三郎殿方
矢十六枚
ケンノフ一ツ　なま槌一ツ
金テコ一ツ　ノミ四ツ
柄ヌキ一ツ　ヌキ二ツ
ぼた一ツ
右品々預ヶ置候事
△　大津口、今日ハ軍兵押寄候事
△　冠軍ハ木ノ葉ニ逃籠しを、薩勢おつとり巻ス砲発するとの噂
△　今日大砲音なし
一　小森、宮山、日向、小牧、布田、井手ノ口、たゝら、かふげカ原ニつどひ寄、がふ家役宅を打崩、多年苦労さんぜんと評議する所ニ
万徳酒や春木平太、木森用掛須藤彦太郎、木森士族長田吉之助、右三人之取計の事
一　取立縣納ハ帳面を以清算致させ申事
一　一月税ハ小前へ割戻申事
一　借銭ハ八朱之事
一　賃ハ壱歩之事
一　古借銭ハ元向合ニ而年歩之事
右之通取計いたし、此儀聞入不申ニおゐてハ某共も打崩し組ニ入て相動き申事
一　雪はらゝゝ降
一　小牧行候処、廣瀬先生先達而野尻へ御引越しとの事
一　不動尊仕揚
一　晩高瀬の方火事有
十二日　二十八夜
晴天
一　今ハ筒音繁熊本の方ニ有、同所火事有
一　山西　布田宮山木森
田楽ヶ原ニ集る
夜通し大筒小筒しけし
一　俵山口薩州より台場築のよし
▲　田原坂の戦ニ兵たいうち死しけるを、腹たちわり見ると生米を喰居候事
一　熊本城ゐんしふ蔵米倉打崩候との事
一　南郷百姓一騎之事
古借銭ハ元年歩ノ事、此以後ハ年中一割のち小作ハ三分一之事
右之筈ニ而書替、印形取證文焼捨候事
一　りうきうより大軍押渡候との事
一　官軍六万騎鶴崎ニ着船在しと事、実定のよし
○十三日廿九夜
朝雨昼曇り
山ハ雪か吹付
一　医王寺へ行
一　不動尊開眼
一　筒音纔ニ有
《図及び説明書きあり》
不動尊開眼
〈きりよのわるいとてぼぶうやの娘尻の赤ひのに味か有
〈色の赤ひハ人じん屋の娘ほんニ誰が人かすく

〈門ニ立たる女松男松、さゝが取持しめかさり
〈けふさんなく
〈きよ
〈御姫さん
なぜにお前ハじやニ成た
古郷恋や　りりや又なぜニ
四十八人だが思い事
古郷恋や
なぜ恋しき四十八へだか有故に
〈あたま丸めてお経ハきらひ

▲　熊本の町ニ住居せし座頭法師、此数日戦ニ宮山の里ニ杖を立、祭の座ニ来れしニ
〈たゝかひの、中を忍ひて宮山の、神のかくらの世をかへにけり
〈大筒の音ハ三味ニ替りけり
一　ケツトウ　古一円
一　同　　新一円七十五銭

十四日晦日
朝雪ちら付
一　旧知事様より戦場ニ而追拂、諸所ニ散居候者江者壱人当米五升宛被下候事
一　小谷当江ハ薩より味曽将油等取ニ来、書附渡て持行候事

宿
父　坂本茂平
十九　忰　吉平
二十三　長女　おまさ
十三　二女　おまつ
石塔　壱尺角
代三円五十銭
一　石見立　〇有
〇徳
《石塔の図あり》
《魚の図あり》
一　拾銭之内
酒代四銭五厘
三銭九厘銀受取
〆残壱銭六分
吉平殿へ貸し
△　おとゝひの出町ニ而戦ニたひか出張候而、両陣共ニうち死多し
一　▲　岩坂より兵たひニ出候者、はだかニ成石垣を下りぬけ戻りし人の物語りニ、五月比迄ハ兵食米も可有之
食ハ黒米の食壱度ニ壱合宛

医王寺村
道誌
一　右矢部道　山道
左宮山
一　右宮山　かち道
左いをふじ　東
一　右おかわら
左宮山　東
一　右くまもと
かわち当　山神前
左やべ
たき
一　右たき
左したか　其次
やべ

一　右したか
　左山道　　其次
　　矢べ
一　右いをふじ
　左り　日向　　日向前橋の本
一　右志たか
　左ゐ王寺　　同所上

今日戦有けるニ
△　前つかたの事ども思ひ出
〈いにしへハちツとも
卒ともいわれしか
釣のハかねの甲斐の有おふ

十五日二月一日
晴天無氷
一　石割　○有
　　○徳
　仕石荒切
　台不割

△　筒音繁し
△　山鹿弐ヶ所焼
△　南郷の方ニ火事あり
△　九月一日竹宮須坂慶助孫、戸長勤居候者ニ而、鎮台を切同主の馬を取、打乗帰りて又行十人切候事

○十六日二月二日
　晴天朝霜少し
一　台石割　○有
　　○徳
一　河原村中小前寄、城の尾羽ねニ候事
一　のミ　二口　しぼり
　賃壱銭
一　鶴はしトギリ壱
　代七厘五銭
一　あきた才八
　三重台石塔頼
△　終夜筒音はるかに有
　夜明かた又近まりてはけしく
〈あしのねの、ふしの間も無く、夜もすがら
たゝかふ筒の音のミそ聞
〈くれ竹の、夜張いを覆す、ものゝふの
戦ふ音を襖にて聞く
　物のあわれを思ひてそすれ
一　弐拾銭
　山口徳平様へかし
　　但シ酒買用
一　六銭五厘　但シしび買用
　内　銭六匁五分　　壱斤二合
　　但シ壱斤ニ付同三匁
　　徳平様分
　六匁五分二ツ　利合
　　（有
　　（徳
△　朝廷じゆんさ五拾人
阿蘇へ入込候処、兼而談置し故騎早打立候故、
鉄炮数百丁竹やり鎌なた持て押寄候ニ付、官
のじゆんさいらつて見れども取かこミ候ニ
付、南郷の方へ罷越百姓一騎之様子聞正し、
夫々取いましめ候也
一　宮山河原寄方物語
一　米壱俵ニ付駄賃銭一合当縣より渡方有
　之候処、小前へ渡不申居候処、此度戸長
　より
一

一　熊本火事之事、清正公の当と見ゆ
一　熊本正院町上ヶ酒やニ而薩より一荷ば
　らの者へ米四升宛渡有候との事
　但ゑひ社
一　河原連会談、又明日も替らす寄方致筈ニ
　而、一組より弐人宛籤取にてとめ置候事

○十七日三夜
　朝雨晴天
　午比雨はら付、あられまじり
一　台石荒切　○甲斐
一　昨宵酒四合代六匁、徳右衛門より出し置
　（有（徳二人割合之事
△　今朝見しかば
〈つまこもる、屋かべの山の、白たへの
　雪吹附風の寒むけさ
△　朝夕ニ百姓一騎のくわ立とて、はん打な
　らし寄りつどひけるを
　むら人
〈民くさの、板をたゝひて集れと、ととふを
　結ぶ事のおろかさ
末の始比鳥似たるを見れば辰の方ニ尾有
　角力取

日本一　大津下町　不知火
同　久留米　小野川
同　薩摩　陣幕
一日　天草　西ヶ嶽　今ハ大西
三円　二十四才　三百廿斤
　宮山　山口次郎助二男
　佐平
　但七両どり
　万楽寺　万楽寺
花の弁　大力
四俵いたゝきしとなん
一　河原戸長用掛、惣小前詰寄ニ而四度喰宛
食たき送候事

○十八日四日
　朝白霜晴天
一　道しるべ彫
〈やき鎌の、とがまを持て苅稲の
　干田の里の照すのどかさ
一　夕部河原の副戸長を始、役人之面々逃候
との事
△　辰ノ刻医王寺村北ノ方ニ鉄炮の音志げ
し

　ふた
（右くまもと　所たゝらの前橋元
　ひむき
（左かわはる
　×
（右いをふじ
（左たゝら　同所
△　今日山山より二重の峠ニ炮発の音有事
　台場宮山の上より見ゆ
（右やべ　下古閑東
（左いをふし
（きのふしてけふハよミつゝ
　うつせミの世をば楽しむ甲斐の有雄
（右大づ　二リ
（左き山　二リ　下古閑村ニ立
（右たき
（左やへ　所ハ下古閑
（右たき

（左しだか
（東みや山
（西をやつすきど　　干田村原
（南ほした
（北たかゆね

（右おゝつ　　前やべ
（左たき　　山神の前

古閑久助様より工藤五郎殿へ伝語之事
所尾のへ転居候杣師、河原へ越方之儀頼ニ相成候ニ付世話仕べく候間、急ニ御越可有候事
△　今日ハ黒川打合之事
△　二重の峠ニ白はた十三本相見え候事
△　植木戦
　薩勢一万五千、肥後五千騎合て弐万
△　南郷新町より官軍南士導ニ而暁比黒川ニ押寄候処、薩勢橋を渡黒川村ニ而打合候処、官勢打死芳田新町へ荷取数不知
一　民ん勢ハ薩ニ付
一　福家ハ官ニ付候よし
一　俵山台場受取、今村亀八拾貫目ニ而薩より受合候事
二重の峠よりせめ下り、のろし揚しよし

　五王越

印有、次ニ左ニ付登、大遍計登り〇さなこ川を渡、目平手ニ付登り凹の方を当して行五王ニ付、夫より杉山の東手を通り下る、牧番小屋目当ニして下る

△　五王ノ峠ニ而如何成人ととがめる人ニ
〈君もしれ我ハ心を尽しのゝ道の印に名をも有雄
一　しらぬいのつくしの原のハちまたりめしふミのこす名をも有をふ
△　五王ノ峠より祖母山を見て
〈ゆたねまき床しかりけり
　祖母山のあのふところニ今宵ハてねぬ
▲　二着　七百人官

　十九日五日
　晴天
一　宮山出立戻候事
一　ひん付　半斤
　代拾五匁
一　ろふそく　五本
　代五匁
一　墨　弐本
　代拾匁
一　同
　代拾匁
一　元詰　一包
　代壱匁八分
一　切　五尺
　代廿七匁五分
〆七十五匁三分
一　手拭　九匁五
　七匁五分
　南郷ニ而聞候事
一　鉄炮運上六匁
一　酒運上百七十目
一　うち遣て百目計りの寒詠ても降重る雪ニ有けれハ、かへる事も成がたさに
〈白雪の、夜をも重ねてふる郷ハ、返れる道もあらぬとそ思ふ
夫より日を過て出立、返る方ニ五王の峠ニさしかゝり、我里の方なれハ祖母山のはるに見

へけれハ
〈もゝり計の旅の空我里の方見度く
雪の重乗ねて
〈白雪の、よをバ重ねてふる郷へ、かへれる
道のあらんとそ思ふ
身をつくし心をつくし
つくし野ハナのちまたにしほりたて置
久木野通吉田通候処、刀を帯したるジヤン切ぼふすニ出合候へハ、大小区用事職業等を尋ハたんさくの者ニ而者無かと甚全儀いたし候処、道具等見せ有筋申開きて通、夫より新町ハ官軍入込候趣ニ而通さす候よしニ而、高森町之様ニ通町ニ行候比、七ツ比ニ而西丁（サイテウ）火起大火事となり
一　中原国松殿方へ一泊仕、弐番茲ニ立戻り
候事
この比は火矢雷ニ雲烟鉄炮の雨の降さとニすミしと云て内へのしかば
一　昨日より石湯立ニ片山より三名下居候
事
廿日六夜
朝雨晴天

一　湯入
村々詰所へ押寄事
明治十年正月十五日片山村より二名詰所ニ罷出、年内人費ト願下懸り候処、用懸中会談を差返し申との返答ニ而引取候処、久保村十六日片山迄指越候ニ付片山笹の本打寄申筈ニ而、久保内三名寄方前ニ鶴町へ用事有とて行、其まゝ詰所にて乙年呼金備之様子ニ而三拾円金受取詰居候処、草ヶ部村矢津田両村押掛候趣田下村用掛書状参行、詰所へ内通いたし候へハ其おもむき聞取違ひにて、詰所を始鶴町打崩火を懸ると次々ニ触廻し候ニ付、町中ハ家物今日方々へ運び皆々打物たづさへ待出まし様子、草ヶ部勢蛇塚迄出懸人数をげんじ小鶴坂ニ打物飛道具なぎすて笹の中さし込げたはきにて押寄しかば、刀ミニりきミかやつて待たる物兵子ぬけしてけふさめ顔、川上よりハ詰所の帳共焼すててハくら闇ニ相成故にてとめ方ニ鉄炮鳶口鑓り打物水上勢も相加り押寄し故
一　草ヶ部者ハ詰所へ願之筋在り罷出候ニ、打物ニ而押へに押寄ニ相成とハ何故之御無本成哉と問れて、夫ハ書状之内通有し故云々取出し見れハ当所之小前共願之義有之、罷出候故御用心可被成候と有故、聞取違ニ而相済
同十七日七小区不残詰所へ押寄
医王寺より陣夫ニ行て片島平三と云人今日帰宅物語、毎日熊本田向より木山死人荷ひ出し、木山江手おひの者千余
五日
廿一日七夜
朝雨風立甚し
一　文点
物語
一　牧戸村藤本嘉一郎か妻、当正月元日産ニおもむき事外難産ニて詰所より医者を呼集て引出見れバ、かミげ長く面長く脇細ニしてつち乃この如し、摺子木似て死して出しかバ跡ニまだ有様子ニ而、いしや手をさし込しかばかミ付故、其まゝおそろしさ何もあらぬといにてさゝやき合、医ハ戻りしかば死し故ニ葬りしけれハ、其霊出でゝ腹の中ハま一ツ居子、ぞうふを喰はたす故何分身くるしく猶めひ途行れぬ故、どふぞゝゝ堀出し此子をころ

してぬ早々、と夜も日も来て夫をもむ故ニた
まり兼て、身類を集てほり揚背なたちハり見
れハ、面平たく頭ニ皿有しとなん、是三十一
日目と云ふ
又へびワくどふひよふたんの様成子ニ而有
なん人噂
二十二日八夜
一　入湯
一　金壱円四十一銭五厘買物代迄金、旧正月
八日朝瀬井常松様返し相済候事
廿三日九夜
半雨
一　入湯
廿四日十夜
雨降
一　湯入
廿五日十一夜
・所持　五十銭
十銭
二十銭
○廿六日十二夜
●春風と、共ニ立出行水の、せらかわるとも
音つれやせん
春風と、共ニ立出あし曳の、宮山ニまた音
つれぞする
けふの日ハ、ふるともよしやあが心、曇ら
て立ぬたびのすこやか
白妙の、雪古郷の寒けれバ、風の便りあら
しとそ思ふ
一　峯之宿より雨降
一　色見先生ノ元ニ泊て、明日あしたハ氷高
く雪ふり
廿七日十三夜
朝雪曇り
一　すくのふと云ふ村よりかくぢこふぢと
云ふを越、十文字と云ふニ出ると云ふ
一　きし野拙渡り五王越ニ登り、是宮山ニ近
道
一　南郷下組百姓一騎之打崩し千五百人
吉田の津留
但提尻
うしころし候処地獄屋、是を壱番ニ打崩し
中原士族　右各を万左
今圓蔵
此処ニハ
米七拾俵
圓札廿五貫目
銭たんす一ツ
柿野一行打崩し
一　五王峠ニ登て見れハ所ハ霜氷二寸計在
て風はげしく雨、寒
一　保田窪の方火事の煙おひただしくたつ
一　もミ、とち、くわしいも等土産ニ配り
一　徳平殿方江暮ニ着し
同人も木山ニ行、帰宅ス
・米一升　八匁
・粟一升　五匁
・綿晒　四拾五匁
・
・朝市砂取ニ立
廿八日十四夜
曇、寒し
一　医王寺ニ行
○石荒取　有
○　徳

△　大炮の音、小筒の音あり
△　一昨日河原より百六拾人薩死人荷出し夫出候処、安政橋の元ニ而揃居候処、城より大炮打懸候ニ付瀧村双平と云人即死、同村壱人足を打レ生死相不分
△　軍陣夫ニ残ハ仕候也
　正ニ聞、打殺されし所ハ出京町之條
△　城へ薩切入しよし
△　今日出京町火事在り
△　薩勢より金宝山ヨリ遠見のよし
△　此比黒川打合之事、抑薩州黒川村の人家ニ居候也を聞、官軍南潤之士族をかたりラツパを吹て夜うちと押寄ニ、此在之者薩に内通せし
　鎮台廿八才
かは薩勢裏の林ニ忍入、筒先揃へて待所ニ留主屋ニ押向官軍打倒しかは、後より薩勢打立し故官軍逃しとなん
△　此度陣夫ニ行し人乃噺ニ、大炮の的りたる木ハ皆ほしゝゝと打折、食運に行しかばむ田田ニぼてゝゝ雨の降如く落といふ

今晩田原坂の方ニ打合有
一　一日壱人前五ハツ
一　医王寺木ノ葉七八里植木七里
一　出京町ニ御内家之銭を借、商人米千五俵在しを十三日四日迄薩よりうばひ取候よし
一　官軍ハ剣ニ而つく故大刀ニ而ハ薩勢あたりかね、鑓長刀ニ而切入打勝しとなん
一　薩之台場土俵ニ而押寄たり引たりする様子、手前の方切立ニつき長さ壱里三合有
一　薩の死がひハ壱人も置ず、官軍ハ其侭ニ捨置しを五拾人壱ツ穴ニ堀込、又野山ニ死さらしニ成たるもあり
一　田原坂ニ而ハ薩ハ小筒計ニ而、まれにうつよし
一　向坂　吉次越
一　高瀬と熊本の境夜暗の小屋
　右之ヶ所戦場
一　甲佐ニ官軍千五百陣取候との噂
一　薩州打死ハかツゝゝ川尻ニはこび葬ニし、碑を建候よし、大将弐人ハ高五尺計立石塔建て有よし

蓮華台付も有花立も有り
　廿九日十五夜
　晴天あつし
一　石塔石削割
　○有
　○徳　七ツ比ニ帰る
　廿日十六日
　雨降
一　石切　○有
　○徳
　廿一日十七夜
　朝氷雪降
一　火伏神開眼
一　状書筆一本
　代壱銭五分
一　絹紙壱枚
　代壱銭
一　三條筆一本
　代三分

木ノ倉
ミイ作　善十
干田ノ上岩下ニ廿九日夕泊、三十日午前ニ
而年比六十計男子に取計壱人連居候、三井
作業又唐衣作

右買物〆弐銭八厘、門出出店ニ拂
一　矢ヶ部山ニ雪降、朝真白夕方消
〈きそしへの、ころも来ながらつまこもる、
　屋かべのふるさとまたも見る哉
△　昼筒音止
△　晩小筒音、夜すがら
　改
正月朔日　石見立　○有
　○徳
二月朔日　石割　○有
　○徳
同三日　○有　石切
同十四日　○有　石割
　○徳　石割
同十五日　○有　石割
　○徳　石割
同十六日　○有　石切
　○徳同
同十七日　○有　石荒切
　○徳
同十八日　○有　荒切
　○徳
同十九日　○有　仕揚切
　○徳
同廿日　○有　仏石仕揚
　○徳　台右同
同廿一日　○有　仏石上切
同廿二日　○有　仏石仕上
　○徳　上台同
一　仏上切四工　一　上台三工
同廿三日　○有　字彫
　○徳　下台切
同廿四日　○有　中台作
　○徳　下台作
同廿五日　○中台　有
　○下台　徳
一　石塔立方
　九寸角三重台上切揚
二月
廿六日　○有　上台作
　○徳　仕業受合、かぢや行
廿七日　○有徳加部
　○徳山東一介石持共不台作
廿八日　○有　仏石作
　○徳　台石作ハめのし
廿九日　○有　仏石切
晦日　○有　仏石惣仕上
　字彫
〆三十五円半厘四ツ二日掛
　三十三工正之
▲下古閑鍛冶屋口
○ノミ一口　○ツルハシ二口
廿六日
○ノミ三口　○鶴ハシ三口　○ボタ作二ツ
陽　陰二月
四月一日　十八夜
　晴天あつし
△　医王寺より夫壱人田向へ出る
△　山鹿新町焼候よし
△　薩州弐万騎之由
△　官軍七万騎之由
△　薩州へ大鰐国より押寄、官軍方へ一身之
由

△　河尻より手おひの者木山之様千人参り
候よしニ而、木山町人立除候
△　田原村家財取かた付之由
△　薪舟天草より五百さふ押渡、其下より官
軍あらハれ出候由ニ而河尻陣崩之由
△　筒音志げし
△　植木之方焼
△　官軍より茶碗位の玉、ハレツト云玉打掛
候、此玉的ルがいなや八方ニ開ひて如何
成家も火起り焼立、又人ニ的ル事甚し、
此玉ニあたり瀧の人しす
鎮台兵、城籠計して居ならバへこニ而首くび
り候様申越候也、薩勢より咄候よし出夫より
聞て予考るニ、何れも薩よりの廻し書状と思
ひ侍る
一　医王寺より干田ニ通る道ニ、たゝら日向
と云所有てけし桃花ハ盛して、桜はらゝゝ咲
初たるといほれハ
〈日向より、花の匂のおこりけり
一　日々多ク花の道を通ひけれハ
〈日々ニ跡はたゝらの道も全ゆゑに

四月二日　三月十九日

雨降

同三日　廿一夜
晴天
一　久木野佐藤文之助、日向へ家物運之事
△　筒音まれ也
一　ゑんしやう俵、玉俵河尻より薩の陣屋送
る事おびたゝし
一　木山へ薩病人、付人共ニ四千余人之由
一　河原出夫之事
壱番三十七人
弐番百六十人
三番十四人
旧二月廿一日
四番百人
廿七日
五番五十三人
廿八日
六番四十人
廿九日
七番八十人
一　今日上陣村宿札打候ニ付、村人ハ家あけ
渡し高野原と云所ニ逃去しとなん

一　旧知事様御内家、門出本宅へ御引越し被
遊候よし、今迄ハ甲佐ニ御座候由、御付
人五十人
一　旧士ハ鎮武たひと云ふ
一　今日木山江薩の薬荷拾駄付越、壱駄ニ壱
人宛馬ニ乗来候よし

四月四日廿一夜
曇り
一　一昨日
金三十銭山口徳平殿へ貸し
一　自分宮山江晩行一泊ス、作左衛門植木迄
行、月心夫ニ而休ミ帰宅候
○鹿ノ角和良久亜出法
一　同灰ヲ済し是アク水ニテ二時計焚き
米ノトぎ汁ニ七日ホドツケ置扱レハ
思ふよふニなる也
但鹿ノ角久留米ニテ壱斤代壱〆四百位
一　今日ハ誠ニ御内家門出本宅へ午比御着
之條
御子様三人之由
一　井手ノ元曽我三郎〔元名金吾〕木山ニ而
薩よりとらへ候也

一　甲佐一昨日戦候よし、軍より薩の旗立て押寄しニミかたと思ひ進付処、官より切取候也

△　薩ニ組スル者ハ紀州登州長州之よし

△　午比大炮熊本ノ方ニ六七発とよめき、此比之音増りたり

○　今宵ハ云ふさふワらびノ品をえたる

△　秋田田中江薩勢三拾人来ルよし、正十五人

△　此比ハ八代、友地ニ而戦候よし

四月五日　二月廿二夜

晴天

下古閑といへる所の酒やへ熊本より来て座る人、桜を折て立て書たるニ

〈産ふ衣、若もきておる山桜

きミがきておる桜哉

折枝の、花の元出もしりそむる

○此春計庵をたち出て

○君ぞ意におもふ此比世の中

△　昨日の大炮ハ馬場、鳥のす

△　どもちニ合戦有

砥用

△　先ツ国公の奥君、御子等桜咲此山里ニ忍入住給ふをなけきて

〈たゝかひぬ、人をおそれてしのふれば、花のもとにも宿をかるらん

〈枝折の、花の元しる浮世哉

一　陣夫宮山十八人即死之由ニ而願イ来り

徳平殿帰ル

昨日出町尻ニ夫役之者台場築候由、(但シ裏)表ハ土俵ニてつき、中ニ土砂石をつめ候よし、是城内之ゑんしう倉打崩したると見ゆ

ミき

落葉かく、深山の奥ハ迷ハねど、またふニなれぬしき嶋の道

〈夜を受て入てよき物何やらん

〈ともし火消してまとの月かな

〈にぎりすくめて夜を明すらん

〈我夫のかたき待夜の大刀のつか

一　木崎高則殿之宅ニ行候事

△　筒音遠く、終夜聞

四月六日三月廿三夜

晴天

一　宮山ハ用掛きもいり廻しニ動ムル事

一　医王寺ハ十戸長十五代シニ村廻し勤之事、但一度ニ二人

〈河原や野山が越て上をもほしだと思ひさがす酔のくし

〈日向と干田の合の道の辺ニ山桜の盛成を見て

〈行と見つ、戻に匂ふ道の辺の、花ハ思ひのたねにそ有ける

日向村の垣の中ニ桃の盛りたるを見て

〈折らすとも、見ても楽しい他人のもゝ

一　きのふ陣夫皆死といゝし当徳平戻りし所、村中くはひ泣皆々ふごをかため荷ひニと出懸し所、皆々のそゝゝとし戻りけれハ不残一度ニ笑ひまたハいかり、本心の事ならありがたけれどこふすふ冗ニ云をいゝ、宮山の者を泣さわがせ泪も一合条も泣こぼさせ、自然なしやミ折ニもなら、夫ニ置シ方を次第すせかふニしたりける

一　熊本石とも口関切、くまもとハ水海のよふニ成たるよし

△　薩のておひ木山より田代へ今日指越候よし

△　高場鳥のすニ而昨日うち合
△　七日昼ハ筒音小やミ、鶴明前より筒音と
　よめき渡りきれ間なく、暁より大炮の音
　しけし

四月七日　三月廿四夜
　雨風はげし

同八日　廿五夜
　雨降
・石塔立持夫十人
△　朝日のさし合ニ出て見れは
　《図あり》
一　壱銭二分　吉平殿へかし

四月九日　二月廿六夜
　半雨
一　直右衛門殿方石塔
△　筒音はげし
△　医王寺より陣夫夜中ニ触来
△　薩勢ちちまけ候者ハ官軍ニは入候よし

四月十日　二月廿七日
　雨風はげし
一　石塔石持
△　夜すがら筒音はけし

同十一日　廿八日
○　朝もや大泉粟売、自身下粟撰て菅ニ見
△　陣夫五番立、木山より熊本国先迄玉えん
しう持、弐人持壱揃ニ賃銭四拾八匁
○　先ニ付て玉作、加勢候ニ付酒五
△　玉作壱鋳ニ十、十五又ハ廿鋳揚切て用ゆ
△　大玉壱ツ長ク壱尺ニ而ハ持上ル者壱人
もなく、弐人ニ而も遠クハ持合不申との事
一　晩山口帰宅ス

熊本外大廻り
○由気　○向へゆげ
○一ツ橋　○祢九の木
○亀井　○西浦荒神
○中尻　○清正公
○平山　○金宝山ハ合戦
○渡し　○高橋
○川尻
△　延岡勢門ノ原より十文字通、木山へ移る
△　城兵千騎計丁六ト安政橋ニ出、砂取へ行
　甲佐之様ぬけ行となん
△　鎮台夫へゆげの者、保田くほの者行候者
　ハ壱人も返し無之也
△　今晩終夜筒音

四月十二日旧三月廿九夜
　朝霜
　晴天
　《図あり》
△　医王寺より未申ニ当、山原と云所より軍
　ハかすニ此原を未申ニ当りて筒音しけ
　し、但し瀧村見越候由
　聞人甲佐の方といへる
〈うち出て、久しくなれば古郷の、日々ニ恋
　しきはねニなれる
〈旅衣、早きさかきのいぬめりに
　（我石ふミもつくし果なん
　（此里あかで我ハ居恋し
一　松蝉の声
一　山室より出京町迄米荷
△　今日城より七百人計出候処、内三百名計
　薩よりうち取、残ハ木山の足手荒神の後

へ官軍弐万計居候て加り候よし
△　官六万程うたれとの薩より評ばんす
△　薩壱万余うち死ス
　　川原陣夫
二月晦日
　八番立百六十人
　九番八十人計
○名作
一　まがのかぶ　　熊本本城
　　代弐拾弐銭五分
一　綿車　　同所
上代
下代
四月十三日　二月晦日
　晴天
一　増本氏ノ石塔弐本、今日迄ニ建仕止
　代金之儀初金壱円受取、此度米大弐俵、当
　冬金二円受取申筈候
△　陣夫戻り咄
　　木山より南田代迄ておひ荷ひ
○官ノ鉄炮分取七千八百、陣よりとり

○官勢壱万八千うち死
　○薩勢ておひ二千、うち取千計三千名
右薩たい長ておひ荷ひ候人より聞候也
　・薩勢十五万
　・官軍八万
四月十二日
鳥のすの戦ニ薩の台場壱ツ踏越来候を、両陣
より挟ミうちニうち立候故、官軍弐百名死し
たる由
一　ヒゴ溝口殿薩州之粮〆諸出入之夫別出
四月十四日　三月朔日
　　曇
〈いをふじと、思ふむをもせまるにぞ、只一
　言もなミだ也ける
〈花の咲、此山里と重知けて、かりのつかれ
　の名残おしけれ
城崎の奥へ雛の立ツとて捧
〈獨ます、心の奥ハしらねとも、色立きぬの
　袖ぬらしけり
一　右いをふじ
山道　　宮山内医王寺道

一　右カチ
　イワウジ　　右同
　左ムマ
一　右いをふじ
　左山道　　廣背
一　名ヶ迫　　万平
△　四月十四日、木山より矢部へ薩の手追の
　者荷ひ行所
△　四月十三日、阿蘇坂梨ニ而打合候ニ、官
　軍引しりそくしかば薩追懸し所、挟ミ打
　ニ二百騎之内二十名計死残しとの噂、宮
　山安平と云ふ人南潤ニて聞し
一　壱銭宮山神社へ御神酒上ヶ
一　筆弐本
　　代六厘
一　往来紙
　　代三厘
　〆宮山ニ而
御酒代
一　壱銭徳平殿へかし

一　宅平殿方石塔字彫
△　熊本城より大勢出て、九品寺へ薩の米大炮を分取候よし
△　鳥のすニ而薩勢切入之くわ立しける処へ官より大炮二三発打出し故、三百計討取しか又薩より切入て討勝祝しけるなん
一　熊本　鍋（シンナベ）と云ふ処へハ店出来候條道ハ長峯出小屋より入込て行
△宇土の地下　当焼
△津知山　焼
△鉄炮小路　焼
△食田の目平手　焼
△御船のかミ　焼
△　宮山鬼太郎と云処ニ薩五百人追来り、一夜明し落行行し之條
△　官軍ハ七日過ニ出
△　薩勢ハ一日越ニ出、打合之事
△植木　焼
四月十五日三月二夜
半雨

一　巻物作　山口宅
△西山　焼
△鳥のす　焼
△　薩ておひ布田、万徳、日向多く発、河原十中すきを豆づ木山おひたゝしく入来ル
△　矢部道十文字、三日間下勢限なし、本日よりハ只登勢数限なし
△　才郷吉平大将、矢部へ追しよし
△　川尻へ冠軍押寄しよし
宮山村
四十九才　徳平
廿四才　繁作
二十才　仁寿
二十二才　喜平
八十七才　惣助
〆五人家内
九ツニ成娘の熊本にてよミ出したる歌
思ひきや、荒野に裾の小草まで、君の恵ミの懸るへしとは
《裏表紙》「沼山津郷河原ニ而是を製す」

《表紙見返し》「噂の筆都そ志」
明治十年丁巳四月記
肥後国阿蘇郡野尻郷尾下多々野村字廣戸谷
甲斐有雄
十一大区七小区二百四十四番地
記
大陽四月十六日
大陰三月三日
一　錦野打合
一　大津古閑橋ニ而打合
官はひ軍之由
○大将之馬迄ぼいとりよし
白馬よし
医王寺木崎殿宅ニ立寄しかは、十三番隊のまかなひ方ニ而無事之由、留主居の奥より聞て〈我津田の、まめと聞より雛祭、心の奥もけふハいわりし
○医王寺なる坂本茂平の宿ニ此ころ衣を残し置しを
〈またきぬと、残し置けるこけ衣の、袖乃ふる手向を人ニしらせて
離
いをふしと、思ふ心のはねせまり、けふの別

れぞつきなかりけり
一　薩勢矢部より十文字通り、日向河原来ル
　事数をしらす多しとなん
宮山内
一　日向といへる処ニ薩ておひ来し故、皆々
　家明渡し逃しといへる
一　大津打合ニ官ノ大将こされしよし

四月十七日　三月四日
宮山徳平
一　木山より竹宮迄夕飯過矢菜持
竹宮ニハ薩ノ勢千軒之家ニ余る程居候と
の事
木山江も壱千計も居
一　官軍船野山、食田山、水善寺ニ居り
一　薩の本陣岩坂ニ在
大津ニ相詰
一　大津の戦ニ薩ハ矢菜無といつハり逃る
ていを見せ懸しかば、官軍深入しかばど
つと懸りけし故、大将をうち取馬弐疋ば
ひ取、ゑんしう八拾駄、三百四十八名戦
死、金三万円分取候との事
一　延岡勢六百来居と同所ひきやくより聞

候よし
一　昨日薩勢
一　薩、晦日二万四千八名
三月二日　三万六千
四月十三日
矢部ニ
惣勢一万　九万
四ノ五
病院豊前や、本病院馬見原、本陣ニ矢部町
一　甲佐の戦者軍勝
矢部町ハ居所もなく、道ハ行一行、戻り一
行より外ハよけ場なし
一　人吉の城下迄勢続候よし
一　道ニ関所を建、帰者ハ打すてのよし
一　嶋津三郎殿御勢拾弐万騎引ばつし、西郷
勢二割欠候ハヽ御出陣之噂
一　奈須ニ越道中ニ十三里の間雪五尺計在
昨日も降、是を越夫方大ニ難渋之よし、わ
らち壱足弐銭のよし
一　うち死したる者ハ五百穀
一　かゝり火の事
○食田山　○阿だか山
○船の山

右ニ五ヶ所
一　薩勢一日ニ七百宛出て、三年三月迄ハ勢
い有と云ふ
一　薩より出候隊、熊本ニ而切候ニ付亥せり
ふニ来候処、戦ニ相成候との事
一　おび様十七人生残候よし
一　節句之朝大津打合之後筒音止しか、新廿
日旧七日之朝竹宮の方ニ当、遠々ニ大筒
小筒か繁し
一　薩勢引拂の趣きニ而鳥のすも川尻も引

七日
一　出夫　○建野○大津○万徳
　○木山○はつたぐ○小谷
ミまげ鳥のす、出町ハ止ミ
旧三月
一　七日打合　○建宮○保田窪○大津
　御船
ひめもす明下ハ止帰たりけり
一　熊本　○木山ハ都
一　官軍廻物　伊勢おん
　非人の躰
三人木山ニ而切　○五十○三十

○六十計

古会所橋の地

一　大津か植木の方烟立

一　木山町ハ薩多ク、せり立ちれ足よけ地ニ落付す

一　夜幾度も夫当廻り来てハ起々

一　夜すがら植の山のよふニ筒聞ゆ、植木大津同所北ニ当、夕暮ハ二重峠の方諸所ニ火見ゆ

南郷の方ニ明り見ゆ

一　夜打合の方を見ルニ打火きり出すが如くホクヽヽとしけり

一　夜の四ツ時分ニ夫出立、下古閑より矢部迄ておひ荷ひ之事

四月二十一日

旧三月八日

一　建野の陣所之薩勢千五六余とも見え、万徳通、宮山を通、矢部之様ニ行

一　木山より壱番肥後大津勢、大筒手同勢、夫より薩勢数多続も相分らす、十文字を通、矢部へ越、ておい多し

一　御内家様南郷之様御越被遊候事

柿野ニ御泊

一　八ツ比川原内、干田ノ上塔の原ニ而打合在、布田津留より打懸候事

一　上陣下陣火懸焼候ニ付、宮山村当家財外ニ運出候

一　御舟の打合ニ而ておい宮山四郎助宅ニ一宿して立たる人の咄ニ、大ニ打まけしかとも切入し故、切し勝いたし候

去ながら四ヶ所共大ニはい軍との事

一　薩ハ弐百騎ニ一長在けれ共、打死隊崩れし故矢部ニ而勢揃して又押寄るとの事

一　矢菜少なき様子ニ而引

城中ニ官軍追籠一のふくニ打死との事

四月廿二日

三月九日

一　戻る道ニ而南郷より帰る人ニ相しかハ、きのふ薩勢十三名南郷へ入込しといへる

新町ニ台場つき有よし、又上ミの方江之台場築有よし

一　熊本より軍逃とて親子四人、南郷の方へ老たる母を馬ニ乗てこしける

四月十九日　廿日

一　六日七日高千穂薩勢ておひ、馬見原より通候者千七百人有候よし

一　右両日ニ弐千人登候よし

一　馬見原ニ而弐百人死候よし

一　先達而高瀬薩之台場壱里三合有しと

四月廿五日

旧三月十二日ニ噂

一　薩勢鶴へ来候趣ニ而、町ハ荷運出し候よし

一　千六百計肥後勢高千穂へ下り通

一　高千穂通し、ておひハおも谷ヶ嶋人之よし

一　肥後より有馬様とやらん、家内不残高千穂てふニ引越ニ相成候よし、高千穂の人より聞し事

一　薩勢熊川の辺ニ溝有ともを台場として、其後ニ又掘を彫り台場をかまへしかは、官軍河を挟ミ一段高く台場を築、両陣ときを合せうち合しかバ薩の台場の土て打崩し、砂煙り目も見へす、雨の降か如

くニ鉄炮玉乱落バ、どて陰ニ皆はらぞいて居しかバ、溝陣ニ打かけし故合せて打合ふ所ニ、官軍兵はだかニ成ミなそこをくゝり、浮陣の裏より大音上無二無三ニ切立しかバ、薩勢大ニはいそふし久摩の方引志りそぐ

一　熊本出町尻の備ニハ鎮台打て出、三々ニ追敷せしゆえ薩勢不残久摩ニ逃籠となん

是矢津田僧呂見聞のよし

前

四月廿三日

旧暦三月十日

南郷へ官軍黒川より百名計新町へ入こミニ相成、色見本陣ニ而山鳥小倉原村山高森ニ御陣有

しら川より台場築之夫、俵鍬持参ニ而夫出る、山鳥の方よりかや持出し、のろしの手配之よし、夫より人馬荷物送りむかひおびたゝし

一　薩勢ニ加りし者多きよし、南郷ニ而ハ下組貧ぼう方、福家ハ官ニ組す

一　野尻ハ安藤經俊、瀬井平馬、井上禎蔵、黒岩森政親、森正義、森藤九郎、森弥武平、片山野尻正明のよし

甲斐増次郎

一　森正親　うち死しけるを安藤正義、森藤九郎、森

一　五月一日

旧三月十八夜

一　南潤へ官軍弐千騎来ル之由

昼食俵廿俵之有しよし、仁田水ニ而聞候事

後

一　五月八日の噂

長崎ニ而官軍四千騎打死の由

一　熊ニ而官軍討負候よし

前

五月六日

一　官軍差越の之事

矢部へ熊本鎮台より八百名

馬見原へ

（右同勢五百名

名ごや

大坂

廣嶋

近衛兵三百

合千五百名

高森へ御本陣ハ三どだん三浦将正

敬部　原時助

巡査　大分縣

竹田産

野尻可次郎

三木三八

島佐善

幸善一

一　熊本鎮台ハ大隊長ハ西郷弟

一　陸軍将正西郷兄

一　笹倉戦死葬式料ハ入目付出し可申様仰出されしとなん

一　坂梨病院ニテ中西組ニ入居候者

祭バ　矢津田亀太

同　矢津田平太郎

オサキ　甲斐為蔵

今村　林太郎

一　宮津組四番ニ入居候者

永ノ　松岡徳太

サカモト　波多野金蔵
永ノ　甲斐久吉
右之面々旧五月十二日三重之市之様引越候
よし

五月十七日
宿を出立、片山より古澤清次殿を誘連、同人
同道ニ而坂梨とそ志す時ニ
君か為、我身のための折なれは、思ひ立にき
此たびころも
とそよミて大雨降ニ河原の里を通り、市野尾
山崎の中谷の小屋ニ立寄しかバ
一　官軍切入候而手負四拾人ニ而、三台場乗
取候事

本戸馬場上組
上原氏　葛根尾村
与左衛門
子与作其子与八郎

五月十三日
旧四月二日
志のゝめ山路峯之宿、仁田野より東の方ニ当
り炮勢はるかニ数多聞ゆ
《図あり》
峯之宿官山くろより午ノ正当ニ烟立、炮声雨
の降が如く唱渡り
馬見原与見ゆ
畳屋弥平咄
一　才郷勢四万有よし
一　嶋津勢六万之よし
一　土佐勢矢部通り候、志秡身秡鑓長刀之由
一　竹田小郷下り、竹田迄入込しより行方不
知

五月十二日
正三十名也
竹田江四千名計薩勢梅之方来候よし
一　竹田裁判所官員三名切候よし
一　高千穂江薩台場之事
〇おし方と云所
三田井より一り
岩戸ヨリ二り
三田井より西南ノ方
〇下ノ村ヲ小坂と云所
此弐ヶ所ニ築方之よし

五月十八日　旧六日
一　薩勢恵良原ニ出張
一　仁田水大甫殿薩からめとり候よし

五月十日
一　官軍竹田江出兵
一　竹田討合
一　廿五日黒岩へ出夫して手負荷
一　廿八日旧十五日
朝筒音はげしく有て止ぬ
一　同日詰夫ニ行
一　手負三人通り
一　旧暦四月十六日中十七日八日、竹田之方
焼る
一　鶴町へ台場築、上津留上の河原ニ築
一　高千穂上之村迄官軍責寄しとなん

七月廿一日
十大区一小区
千町村
一　・東矢武平
甲為

一　・清田幸三郎
　　佐弥
一　・宮本彦八
　　甲有
四　・斎藤市良
　　山谷次郎
四　・木村幸平
　　三彦
一　・大河幸三郎
　　二惣
一　・木村新蔵
　　二一
　　銭塘
四　　亀井伊八
　　千町村　古彦
四　　清藤久平
　　中藤
　　〆九名
右金弐円宛敷
昨夕止り候相渡
尾嶋
　　甲斐為蔵
　　中嶋藤太郎
　　甲斐有雄
　　小崎
　　佐藤弥兵太
　　二子石惣三郎
　　木郷
　　二子石一内
　　黒岩
　　岩下豊三郎
　　久木野
　　古庄彦松
　　臼杵
　　三浦彦一
　　右九名
　　百長
　　高木和七
　　四番廿長
　　斎藤儀信
一　かちい峠賊の之台場、官軍より十八日せ
　　め落し
一　廿日官軍より切入、三台場乗取候処、跡
　　ニ顕出挟ミうちニして手負討取八百名
　　計有しかども、又其後ニ官勢挟てうち勝
　　しとなん

記

七月十九日より旧暦六月九日高木組壱番ニ
入、弐円五拾銭敷宮本彦八帰を次候故、此金
廿日八時ニ受取申筈
○廿日　晴天一交代の初日皆宅ニ泊
○廿一日　晴天
○廿二日　朝曇　百長金田組ニ成
○廿三日　壱番四名非常部ニ出ル、惣組中三
　　十名也
一　今日ハ酒利の村より南ニ当大炮小筒
　　之音かまびすし、薩五拾人即死、官拾
　　人即死之由
熊本縣第十一大区七小区
　・甲斐為蔵
　・中嶋藤太郎
　・甲斐有雄
　・佐藤弥三太
　・二子石惣三郎
　・二子石一内
　・岩下豊三郎
　・古庄彦松

・三浦彦一
柳野宇一郎
立石藤次郎
佐藤彦太郎
伊藤森太
小西八重八
二大区七小区
藤森甚吉
南久次郎
三大区八小区
岡部丈吉
吉本善平
二大区一小区
松本彦吉

廿三日
一　拾銭佐藤彦太郎殿へ貸し
○廿四日　朝雨大降
宮本幸平殿合
○廿五日
一　弐円五拾銭振替候分、廿日迄之処今日廿

長より受取、百長荷どまり候ニ付罰金上
納仕兼候間、願ニ付拾銭差合候事
一　拾銭　甲斐為蔵殿へかし
廿一日廿三日　三時迄
一　三百拾八匁　日銀廿五日晩受取

七月二十四日ヨリ雨
熊本縣百長
亀甲組
○廿五日雨
○廿六日晴
○廿七日晴天
・尾崎甲斐今朝次帰村ス
・弐番仕出し手紙
・岩下豊三郎殿遊医隊之小姓ニ入
一　重岡へ引越し第号之小屋ニ入
○廿八日晴天雨少シ、花の木のほふづめ山
一　壱里三合、壱里五合竹切ニ弐度持候事
本日三時迄八受代分
○廿九日晴天雨少し
一　休ミ
○卅日　晴天

一　金五銭蝋燭代振替出し置、二番廿長四番
二十長へ
○三十一日晴天
・朝酒利迄行
一銭　三浦彦一ニかし
一　金弐円五拾銭、日当一受代分受取

八月一日
坂田組三番木田衆ニ而
一　下田辰三郎殿
瀬井寿太郎殿へ手紙仕出す
一　一日ニ帰、但重岡より
同三日
一　わらぢ作り四足
同四日
大平村とも
一　上中江迄くり出しニ相成、隊付ニ而が原
持、乱薬持、器界明相持
一　熊本鎮台歩兵第拾三聯隊第二大隊第二
中隊
給養掛炊事掛より手配有
芦苅村
猿返し山ニ登り

八月三日迄ノ所
一　金五拾三円七拾五銭
　右弐番組請取渡
一　弐銭三銭五厘砂取払
　　灯かん之過銭
八月五日
一　大原村へ着
八月六日花峠
一　猿返り山ニ而打合在
　大原村より弐里在一里半とも着
　つづら折の細道伝登り、峯ニ登れハ大松繁りしを、道の左右ニ切伏てきをふせき、奥ニかしさかぎたはねたる程ニ立繁り、此中をくぐり横ニなりさかのきの中を取付ており、又はね付坂を登り打合有
一　即死三人
一　手負四十三人
一　隊長うたれ
一　切入之人二名行衛志れす
　梅の内大原村より
　　さいき六里
　　延岡十里
黒土峠　　あづさ峠

八月七日　半雨
一　大原より上中村迄引越
　八月八日　大雨大水出
一　大原ニ休
八月八日
一　金弐拾銭
　瀬井格三郎様へかし
八月八日
一　同壱円
　瀬井格三郎
　野尻杉太郎様へかりかし候事
一　馬場万次と云人のしふ紙み可綴候、但手帳弐冊
　九日大雨
一　野尻杉太郎帰紙面仕出し
一　上中村竹田十三里
　只今
一　薩州ハ只今ハ都之城迄押寄候よし、鹿子嶋より八重先を越候事
一　天草本道小宮地
　重岡之橋ニ而
一　川水出十七人流
　　但夫方之者

十日　雨降
一　本郷　二子石惣三郎様へ頼、反物入物ながら返ス
　十一日　晴天晩雨降
一　城長へ御くり出し
　十二日　晴天
一　御くり出しニ而蔵尾野へ泊
　但シ水出、人つかへ候ニ付道より引返して留
一　蔵の村ニ泊
　十三日　雨降
一　蔵野を立、山越、大川橋二ツ渡、屋な瀬村迄行て爰ニ夫小屋在り
　爰より竹田十参里
　高平より竹田八里
一　小西八重八殿帰る
　手紙五番仕出し手紙
　是より登三里、勇れき隊けさ切入と其跡へ熊本鎮台兵打入よし、下り三里有所ニ威居候よし
一　くわの原と云所ニ薩勢居候由、やなぜより壱里あり
一　柳瀬より西ニ向、二台場を越幾流と知ら

す渡り、弐里余り深山の奥ニ別入れす、
戌亥より巽ニ流れる大川の壱本橋を渡、
しやうのふ小屋ニ入てミなミの方ニ高
野在、西の方黒山在、是より食喰して兵
士ハ此野ニ忍ふ、民部ハ渡りかへりて炭
釜ニ玉薬をたきて雨水しのき候所
薩勢ハ矢立峠ニ居候よしニ而、遊医隊此
山を八里廻りて切入止ニなりしかども、
中々けんこの所ニ而切入ても跡へ引べ
き時ハ瀧より飛へき外ハ無故、全かたな
き付取候とて夜中比炭かま戻しかば、平
地せまく足を立ねるも
〈らん薬を、からふて知るその時ハ、妻子や
友を思ひてすなり
鉄炮の、玉の乱てくる時ハ、ほんニ帰りゆ
る神狂心なり
一　薩勢籠居候所ハ八天狗峠ニ居
十四日朝返りてやなぜ本村より七合、重岡の
方の枝村（おたかり）の宮泊し
十五日　晴天旧七月七日
一　右宮を立てやな瀬本村へ引越、玉薬持食
持が原、隊の衆ハ先ニ進、隊方弐名ニ夫
方十九名やなせニ泊
一　薩勢陣諸所引候よし
・たき出しハやなぜのさなこ
十六日　晴天
菜の原川渡バ、うすぎ村里ハ元延岡領ニ而黒
口の之内なり、爰より延岡八里在
隊方御出張之所ハ矢立峠、うすぎより重岡四
里半
木こら二里
下赤へ弐里
一　焼たしくわの原
△　隊の人々乙女子ニ銀のかんざし見候事
の有や
此山中ニてハ見し事有まじと云ニ、女壱円
五拾銭つゝニて弐本買三円出しましたと
云ニ
かくれ家と、思ひの外ニほかゝゝと、光ハ銀
のかんざしニして
一　うすぎ村ニ泊
十七日　晴天
一　上赤道下赤へ泊
うすぎより一り七合
十八日　晴天
一　下赤出立、川を渡、岩道通、大川伝下り
て三里程ニして熊田ニつく、六大区一小
区一番屋敷
熊本鎮台
本営
爰ニ千余名之武兵降参出る、荒垣詰廻し番兵
付てかゝ火者天をこかし、夜を明す爰ニ
十九日　晴天
熊太ニ泊
《図あり》
廿日　晴天
一　川内名熊田ヨリ延岡四り、舟ニ而行ハ五
リ、重岡六里
一　下赤ニ而夫之者四人川ニ水あミ死ス、但
シ昨日也、今日本川方人泊す
廿一日　晴天　旧十三日
廿二日　晴天　旧十四日
夕立
熊田出立城黒江と出候
一　処白石やと下赤上赤へ帰候処、食之軒ニ
暫ク芋之市へくり越ニ相成、大藤より暮
て芋の市寺の藤ニ泊
里数十二里

廿三日　晴天　旧十五日
夕雨降出し
一　米取ニ行、食たきて夜食持竹田へくり出しニ相也、途十一里暮前立八里半ニして虫せき痛、夜明て竹田ニ付
廿四日晴天　雨ばら付旧十六日
一　竹田　永昔寺ニ泊
高流
一　十三聯隊第二大隊本部へきおん寺
一　五銭　上原与八郎殿へかし
一　拾銭　松彦吉様借
小山庄作様へ貸し
廿五日　古十七日
雨ふり
一　壱円糖田廿長ニ借用
八拾銭返し、残廿銭借
一　但冬田ニ貸し
一　晩寝とぼけそふ勤ニ而声さけひ、高根より飛石垣より落者有りてこんざツしけれとも、何の訳とも知らす
一　其後大風大雨降出し

廿六日旧十八日　大雨風
一　竹田ニ而家十一軒たわれ候事
廿七日　晴天
一　竹ニ休ミ
廿八日　晴天
一　竹田より宮地ニ泊
岩下儀巣宅
廿九日　晴天
一　宮地より大津ニ泊
三十日　晴天
一　大津より竹宮ニ着宿る
一　竹宮ニ参水前ニ見物
一　下牟田トモニ上リ、中ノ瀬橋休、めど町渡し、熊の所上アダカノ山砥して松はせニ到、午後東スギ
三十一日
晴天　雨バラ付
一　有雄、林八郎、原用助、金平、梅次、有秀伊右衛門、太郎、新蔵、彦吉、作寿、太次郎、十二郎、茂一、次八、喜四郎、岩太郎、亀太郎、多喜、善次
〆廿二名
松葉瀬　関仁吉様宅ニ泊

九月一日　晴天
晩雨降
一　中嶋藤太郎殿松橋ニ来ル
一　北川善次郎殿百長
二日　晴天
一中隊ニ十二舟
一　朝三時ニ舟ニ乗、町屋沖ニ出ル、まちやの町を右ニ見て過比旭七里出浮ハ三ツ嶋有
《図あり》
金請受記
一　弐円四銭　坂梨壱番入
一　弐円四拾銭　弐番ニ入
一　四円八拾銭酒利ニ而三番入
一　一円六十五銭　足賃
一　四十二銭　食代
一　八銭手摺料　取戻し
一　壱円五拾八銭　高原より受取
〆十二円九十七銭
一　壱円拾八銭
印代

酒利村を始
一　一メ六百九十目（中西
（高木
一　四拾目　〇〇印代

記

明治十年九月三日、松橋船出して馬手に八代妙見の松原を見、待屋の浦浪シ続（ツカ）ニ有之計に三ツ嶋、鼠嶋、つく嶋、弓手ニまちや天草の老嶽染嶽倉之嶽をはるかニ見て、肥後と薩摩の境なる国見か嶽

《図あり》

をも打眺、米の津の濱ニつきて友舟待ニ日ハ入ぬ、暮て不残入来て明松を作

〇　米の津町通、田の畔道を伝ひ、六弥太村之内

〇　三日亀津と云ふ所ニ泊り、夜明て物喰抔して宮を立、四拾間余の橋を渡、三十三歩先出水の町を通、坂を登り

〇　麓の成相野と云しる者のあき屋ニ泊、此麓と云ふ所百廿四ヶ所有て、当所ハ百石之所といへる

五日同宿ニ而噂ニ聞ニ、鹿嶋より三拾里先ニ旧殿様隠居領弐万八千石之所、町屋中之者行て居候よし

一　泉　酒茶々碗壱ツ
代壱銭二厘
一　延形紙廿枚壱双
代五銭
一　いはし壱疋
代
一　将油壱升
代弐拾銭
一　米一俵弐圓廿銭
一　手拭壱筋五銭五厘
一　素麺壱膳
代壱銭五厘
一　柿一銭ニ四ツ

明くるあしたハ半道出、登四里、下り壱里の山を越となんいへり

九月六日

麓を立て山路ニむかふて

〇石ねふミ（イハ）、重る山の名もしらで、越行而ハ何国ならん

〇軍人の、飛登之ともして行先の、山また山を秋に見る哉

向より来る人の

〇名しるに、荷物重きますら男の、見かはつ都もしふ山の坂

〇山越へて、山々越てまた行先も山ニ山哉

〇峯越へて、又ミねこえて、末の峠も有ぬそ恋しかりける

此山越て坂を下りつけば志部の神社、志部の温泉有、夫より村々過て

宮の城原の道のとも松並々として千とせも経ぬる色有て有ける

千代川を船にて渡り、宮の城町はづれ

六日晴天

宮の城　泊

但軍夫ハ旧御蔵の役場ニ泊、亀甲組上一号
山川組
松下組

爰ら当りハ素麺そは餅菓子、何ニ不寄天保壱枚、但シハし買ニ紙壱枚ハ二分五厘、あゆ魚壱ツ一銭

六日晴天　宮之城
晩雨降
一　書
七日晴天　宮之城
晩雨降
一　書
八日晴天　宮之城
晩雨降
一　書
九日晴天　宮之城
此所より鹿児嶋十三里
〈給養掛五十川といへる
君より金を借りて竹宮の里より茶を求呑し
かバ、病ひいへし嬉しシのいやじとて
〇梓弓、いその川渕底深情を、汲ぬ甲斐の有
おふ
とそ読て奉りけり
十日　曇り

午後
一　勢んだひ川　此川五り下れバせん代の
城下在
一　鹿児島の城下、此宮の城の巳の方ニ当十
一り在り
一　此宮ノ城壱万五千石の旧役宅、今戸長役
所也
一　軍夫ハ御倉米受拂役宅ニ宿
一　町ニ出筆壱本
買代弐銭八厘
一　唐芋掛目拾匁代八分
一　紺足袋壱足東定之助殿へ貸し
十一日　大雨降
一　宮ノ城を朝出立、壱り計ニし山崎大川を
渡、袂をぬらしあらひたをきるもあり
又壱り計有て温のもとゝ云所温泉左、半
道計ニして入義の町、爰ニ尓昼喰して行
道、入来の水上をあちこちと渡り、坂道
ニ向ひ炭竈抔有所のいなりを過
《図》如此成山有
爰なん
栄(ハエ)ノ山越　登二り下り壱り

茶屋あり
《図あり》
宮ノ城より五里を渡
氷山(郡)村ニ宿
一　百姓の村ニ人帰り出ず、宿なくして夜半
皆泊爰を
十二日夜明ニ出立、三ツ間道と云峠ニ於大炮
の音間近聞へ、鹿児嶋の城、桜嶋見に朝より
鏡(田上)と云村を通り、川端ニ四里余りの道経て、
此川を渡らすして引戻し、鹿児嶋城の手前よ
り台場登、玉薬持也
《図有り》
十三日晴天
晩大雷雨ニ而陣屋寒風立、雨吹込中ニ棲兼候
所、雰おろして烟火さえも見へす、折から夜
中比とおぼしき時咸城より下り炮発するニ、
官軍ハ三重の垣ニ大地ニハ竹のそぎくひを
立、田畑ニハ板ニ金釘を打て数七重ニ取巻待
し所なれバ、大降の雨とあらそひ小銃ば
らゝゝと打懸しカバ、台場々々より大炮雷は
なち懸おめさけんで大打合、一時計の間雰晴

ぬれば小止ぬ
大炮ハ雷と唱合たり
十四日晴天　旧八月八日
一　台場より此当の里を見れバ、唐芋を掘て跡ニそバを植
一　鹿児島
米壱升　代拾銭
酒壱升　代四拾銭
焼酒一升　代弐拾五銭
水くさし
蕨百目　代弐拾五銭
いわし二ツ　代壱銭
柿壱ツ　代四厘
一　りうきふかすり　壱反代二圓三十銭
ミソ汁　ワカメ　膳代二銭
大根
一　威の勢三千計ニして最早兵粮も手短く、二三日中ニハ不残命を限戦ひ城を枕ニせんとの評定之噂ニ而、用心堅固ニして軍夫迄わらぢを抜かず、帯を解かず、夜も終眠すをなさすとの御達も兵中々々在様子
一　暮て夜深く西の沖を見れて

十五日　晴天
一　陣屋作
一　賊徒ノ者日々降参ニ出ル
昨日降参ニ三人、士一人夫今切捨ニ相成候事
十六日　晴天
一　陣屋作
十七日　晴天　ツル　十一日
一　床拵
十八日　晴天　旧八月十二日
雨少しばら付
《図あり》
一　鹿児島湊　町■■在
一　松原ノ湊ニ旧炮七文在
此大サハ尺廻長廿一丈計
一　松原神社　是薩州之大主之社ニシテ、境地廣クシテ宮神殿ハ椽ヲ限リ出雨戸ニシテ、前ハ合三戸彫物等在テ、ロウ下在拝殿ハ横向也
一　帰番兵小屋建
一　降参之者三人見る
十九日　雨降　旧八月十三日
一　水取印彫

廿日　半雨　旧十四日
一　二中隊之台場を下り、三中隊之人夫ニ入、亀甲組廿五名
一　今朝しのゝめ前賊切出を、台場より小銃豆のはしるか如く打立、夜明迄ニ小止、雷橋筋ニ切出し候故、又日の出迫り迄打合候事
一　降人を志バりて通
一　一昨日日栄の山ニもれ賊有、是をからめ取
一　十五名田上より切込むたくらミ有しニ、奉知したる者有て弐百名計ニ■からめ取
一　大隊本部
一　聯隊本部　田上村中住
一　鹿児嶋根元の城より南坤ニチリンカ嶋、たらの鼻、大根しめ小祢しめ、花岡山、沖の小嶋
一　城下町家庫ハ石ニ築立、又ハコンニヤクガラと云焼物
廿一日　雨天　旧十五日
一　谷山道江垣仕ニ行
廿二日　雨天

一　金弐拾圓受取
　　但八受代ト日当
一　金二朱ノ内
内　二銭　有雄
　　二銭　藤太郎
　　二銭　田中遊太郎
〃
廿三日　晴天
一　大隊本部より輜重部ニ戻ニ相成、軍夫詰
　所ニ入
一　金渡
一　金二十円受取
廿四日　半雨
一　放免ニ相成
一　午前三時ヨリ戦争打合始リ、筒音さらに
　たぎるか如く、夜明ニ城を乗取西郷高盛
　を剱ニテさし、降伏人多し
官軍即死
　　隊三名
　　夫三十四名
廿五日　晴天　旧ノ十九日
　　朝雨
一　田上出立する

一　小山谷釜ヶ原泊
　廿六日　晴天　旧十九日
一　小山谷出立、郡山通、郡山より鹿児嶋迄
　　四リ
一　西郷籠たる城中ハ家もなし穴庫
一
郡山村ヨリ米津迄十二里、鹿児しま五リ
　　張出写
今般賊徒ニ與シ、一時方向ヲ誤リ官軍ニ抗敵
スト雖モ、先非ヲ悔悟シ帰順自首スルモノハ
其罪ヲ軽めセられる筈ニ候處、追々帰郷其侭
潜伏シ、既ニ補導際ニ臨ニ不得止帰順願出の
省往ニ候て、甚以不宜次第ニ付、来ル三十日
迄ニ自首セサルモノハ其究リ定メ捕縛置、可
處厳科候条、心得違ヒノ者無之様管一ハ一般
へ無洩布達可致、此段相達候事
　　明治十年九月　　征討総督本営
　追而本文潜伏為致者も本記日付處分可致
候条、此節添達候也
廿七日　晴天
此志尾の湯より出立、此原山越て出水町通、
廣瀬橋渡、わたし口村ニ泊り

宿拂十銭
　　内米壱升ニ付
　　十銭宛
　　旧廿三日
廿八日　晴天
一　渡口村出立、米津より十二船壱船料六日
　として四十二名乗、壱名前ニ十四銭六厘、
　食心付ともに廿銭ニ而廿九日渡り口の
　尾ヨリ上り、剱神社ニ詣参し、陸地を松
　橋宇土川尻ニ泊り
三十日　晴天
一　川尻を出立、熊本向町ニ出
一　帯壱筋代四拾銭
一　ちよか一ツ代二銭五厘
一　同　一ツ代三銭五厘
　　是ハ薩摩ニ而
十一文
一　足袋代十六銭五厘
十月一日　旧八月廿五日
　　雨少降
一　熊本向町表、河原新町ニ人夫宿ニ泊

宿賃十銭ニふニんきせ、又ハ食汁共ニ配り
申筈

二日　曇り雨少し
一　傘代三拾銭
一　蕨切拾壱銭
一　帯一筋代五拾銭
一　同一筋代四拾銭
一　袷一反代八拾五銭
一　紋付袷代六拾銭
一　火打代弐銭五厘
一　足壱足代十七銭
一　付木代八銭
一　筋紙代四銭五厘
一　半紙一帖代三銭
一　状袋五ツ代壱銭
一　坪台ちよか代弐銭五厘
川尻
一　同壱ツ三銭五厘
一　~~弐拾銭　初賃~~
一　六銭六厘　田上米代　但シ渡
但一升ニ十五銭
一　宿代壱銭同宿

小山田ノ内
一　八銭壱厘　釜ヶ八村
粟食、から芋、芋から汁
一　八銭　郡山入来泊
米食ニ焼酒、そばニ而もてなし有
一　弐厘　紫尾の湯泊
温銭也
一　麓渡し口村泊
宿代拾銭
一　弐拾銭　舟銭食ともニ
一　拾銭　川尻宿代
一　弐拾　熊本向町
二夜泊
一　弐銭五厘　髪結

貸附金
中嶋藤太郎
一　八銭壱厘　粟食の宿
一　拾銭　麓渡口村宿代
一　廿銭　舟賃
一　五銭六厘　口ノ尾食酒汁代
〆四拾三銭七厘
内

一　弐銭　志尾湯そば代
一　六銭六厘　田上宿
壱銭　米代共ニ
八銭七厘
〆差引
残
一　三拾五銭
一　拾壱銭　川尻酒肴代
川尻へ
一　五円　上原与八郎へ振替分
一　弐円八拾五銭　野嶋友蔵振替渡分
一　三円　野尻杉太郎分
一　弐円三拾六銭　伊東恵八郎へ取次渡分
一　四拾七銭五厘　冬田林八へ貸渡分
一　六銭　帆足養作へ渡前之内、藤野亀太郎
へ渡候分
一　小山庄作江
四銭　松橋
四銭五厘　祢もと
拾銭
弐銭　廿一日
二銭　旧十五夜
〆廿弐銭五厘

一　清藤梅次江
一　四拾銭　上原与八郎へ償貸
一　四銭り
一　三銭五厘　松橋宿拂
〆四拾七銭五厘
一　九銭五厘　日当受分不足
一　五円　初二交代分
惣合廿円一銭
一　廿銭　甲斐為蔵殿口ノ尾ニ而貸
一　五銭　同人江野嶋友蔵トかし

三日　晴天
河原町より
一　本山伊道様の宅へ引移り

四日　晴天
一　吉田追風様の屋敷江参り
一　四銭五厘　銓はん代
一　銓ばん代銭　拾銭
一

五日　晴天
一　朝代書人佐鶴殿宅へ行、夫より本城松元

善平殿方へ行候事
一　出京町塩屋縣官出張所ニ行
中嶋
甲斐
〆三泊　但シ壱夜十三銭五厘
四十銭五厘
一　手帖　代三銭
一　金袋五代一銭五厘

十月六日
一　出京町

宿ハ
宿銭拾五銭
菜ハコンニヤク
アデ色付
一　志ひ百七拾代十三銭
一　数の子　五銭
一　酒五合代拾五匁
〆廿五銭五厘

記
一　壱円　紙幣一枚
一　弐拾銭　金札一枚
廿五銭

一　金壱分　金札
廿銭二厘五毛
一　同壱朱　同札
〆壱円五拾壱銭二厘五毛
甲斐為蔵様へ
出京町宿ノ二界ニテ貸し

七日三ツ仝　寅
旧九月一日
一　肥後国胡券ニテ七百石在
一　熊本

阿ひ　百目　十銭
上白米一升　代六銭五厘
中　六銭
上酒一升　代十五銭
綿　百目代
ひん付一斤　代十五銭

六日　晴天
一　京町　作渡小屋ニ泊

七日　晴天　一日
一　出京町坂本卯三良宅エ宿ス

八日　晴天　二夜
一　立田に行
一　伊勢物語代七匁
一　盃四ツ代　四銭

九日　雨降　三夜
一　軍夫日記清書

十日　雨降　四夜
一　松元中山来　冬田松元ハ金百疋より直
　　受取

十一日　雨降　五夜
一　坂本宇三郎宅宿代五拾銭
　但シ四泊ト一夜拾弐銭五厘
　拂相渡済
一　弐拾五銭　甲斐為蔵殿へかし

十二日　六夜
一

十三日　晴天　七夜

一　夫賃銭を売
一　壱円（遠矢武平殿へ貸
　　（甲斐為蔵殿へ

十四日　晴天　八夜
京町
一　見巡ニ出る
一　百長ニ詰る
一　金五円　甲斐為蔵殿へ
　　右受取候
一　拾五銭　遠坂両平江
　振替糖田武平ニ拂分
　中嶋藤太郎殿へかし
一　ちり紙代　甲斐為蔵殿へかし
一　書物代
　　代
一　つる代　壱銭五厘

九日　十二夜
　　晩雨降
一　高森ニ泊

十日　十六日

一　帰宅
　　軍道中記
南ノ関　尾山喜三郎
廣嶋　東定之助
熊本縣大濱町　瀬田茂一
　　四方田

十五日　九夜
　　晩雨降
一　高森ニ泊

十六日　晴天　十夜
一　帰宅

十六日　晴天　十一夜
一　峯宿へ伯父年廻ニ参

《五丁分破損あり》
※以下、日記順序不明。八月、九月にかけての日記記事と重複ヵ。但し写真掲載は省略。

弐円五拾銭
為蔵様へ返し

此所ニ三円上置
手摺料　拾銭取戻し
左候へハ是迄一受代ト二受代分
五円此次ニ受取申筈
一　是より三重の市より七里先、さかり村本
陣
上ツリ
一　五拾銭　為蔵様へ拂
一　十七銭　同人へ五厘盃代振替
組
下市　田尻茂太郎
杉澤喜一郎
ぎおん　古庄彦松
尾島　甲斐為蔵
藤太郎
《一丁破損あり》
小嶋　惣三郎
十四日　四日
十五日　五日

内
十六日　六日半雨
玉来　岩井屋泊
宿代拾銭
米五銭六厘
十七日　七日晴天
三重ノ一ニ泊
宿代十銭六厘
十八日　八日大雨
一　杣ヶ谷ニ而米拾銭
せんぞく通、たきだし握り
一　酒壱升廿銭
一　焼酒
一　げた　十八銭
酒利村之千人小屋ニ泊
十九日　晴天
一　算用
○足賃　壱円六拾五銭
但熊本迄一里五銭宛
○宿食料

四拾弐銭受取
熊野神社ニ泊
酒代壱円六拾四銭
但シ壱升ニ付代四拾銭
米壱升代拾三銭
木瓜壱本壱銭
竹田ニ而■四厘
《一丁破損あり》
宿代
一　八円八十二銭
内　壱人前四拾弐銭
甲斐為蔵
中嶋藤太郎
小原忠至
三浦彦一
岩下尽三郎
二子石惣三郎
渡邊徳次
井野茂三郎
佐藤弥三郎
古塘彦松

田尻茂太郎
橋本杢太郎
藤川専八
下原厳太郎
甲斐有雄

右則立付仕候

遊医手八斤
遊医四芳三中隊
課

〆壱貫七百三十目
三日迄之処
一　弐円五拾銭
八月五日受取

八月六日
一　金拾円
右ハ野尻半次様へ頼ミ内へ送る
袋の浦より米の津の濱ニつき
六弥太村之内亀の津村ニ十二時ニ着く
但シ米の津より壱里余
一　五銭山邊福太郎へ麓かし

護

安藤経俊　略歴

天保13年(1842)	野尻川上神社祠官安藤幸足の子として誕生
嘉永５年(1852)	伊藤大作のもとで普通学・漢籍を修行
安政６年(1859)	野尻川上神社社司となり、家督を相続
元治元年(1864)	本嶋四郎のもとで皇典・漢籍を修行
明治２年(1869)	野尻川上神社祠掌となる 和田金左衛門から新影流剣術の中段相伝目録を受ける
明治５年(1872)	野尻川上神社・尾下菅原神社など５社の祠掌となる（のちに草部吉見神社も兼務）
明治７年(1874)	白川県士族に編入 加屋霽堅のもとで国典を修行 公立河原小学校教員となる
明治10年(1877)	熊本隊に参加し、西南戦争に出兵
明治11年(1878)	公立尾下小学校授業生となる
明治17年(1884)	野尻村村会議員に当選
明治18年(1885)	公立津留小学校授業生となる
明治20年(1887)	野尻村村会議員に再選
明治30年(1897)	日清戦争時の軍用品献上につき、熊本県知事から褒賞
明治39年(1906)	日露戦争時の金銭寄付につき、熊本県知事から褒賞
大正６年(1917)	神職を依願免職となる
大正10年(1921)	死去

「安藤経俊一代ノ履歴草稿」などをもとに作成

甲斐有雄　略歴

文政12年(1829)	尾下村頭百姓大助の子として誕生
嘉永３年(1850)	家督を相続
文久元年(1861)	石標の建設を始める
慶応２年(1866)	石標建設の功により、熊本藩から表彰
慶応４年(1868)	御郡筒となり、苗字帯刀を許される
明治３年(1870)	河原組与長となる
明治６年(1873)	石標建設の功により、白川県庁から表彰 地租改正事業に際し、地券取調掛となる
明治８年(1875)	尾下村小学校世話方となる
明治10年(1877)	政府軍の軍夫として徴発され、西南戦争に参加
明治11年(1878)	村総代・氏子総代・門徒総代・学校世話方となる
明治12年(1879)	野尻村村会議員に当選
明治14年(1881)	石標建設の功により、熊本県庁から表彰
明治19年(1886)	石標建設の功により、熊本県庁から表彰
明治41年(1908)	野尻村津留に「甲斐有雄君之碑」が建設される
明治42年(1909)	死去
昭和33年(1958)	熊本県近代文化功労者（第11回）として顕彰

「甲斐有雄履歴写」などをもとに作成

展示資料一覧

番号	名称	員数	所蔵
一	明治十年戦争概略晴雨日誌	一冊	高森町安藤家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
二	明治十年日記	一冊	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
三	安藤経俊一代ノ履歴　草稿	一冊	高森町安藤家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
四	褒賞状（石塔建立）	一巻	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
五	明治十年熊本賊徒並隊名簿	一冊	熊本市立熊本博物館
六	錦絵「鹿児島新報　田原坂激戦之図」	三枚一揃	玉名市立歴史博物館こころピア
七	御船附近戦闘要図	一枚	熊本市辛島家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
八	西南役両軍配備図	一幅	熊本市立熊本博物館
九	熊本焼場方角図	一枚	熊本市立熊本博物館
一〇―一	四斤砲弾	二点	熊本市立熊本博物館
一〇―二	四斤砲弾	一点	松本達也氏寄贈資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
一一	パロット砲弾	一点	熊本市立熊本博物館
一二	アームストロング砲弾	一点	熊本市立熊本博物館
一三	スナイドル銃	一挺	玉名市立歴史博物館こころピア
一四―一	エンフィールド銃	一挺	熊本市立熊本博物館
一四―二	エンフィールド銃	一挺	玉名市立歴史博物館こころピア
一五	ヤタガン形銃剣	一振	松本達也氏寄贈資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）
一六	ゲベール銃	一挺	熊本市立熊本博物館
一七	レミントン銃	一挺	玉名市立歴史博物館こころピア
一八	火薬入れ（伝薩軍使用）	一点	松本達也氏寄贈資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）

一九	弾帯	一点	玉名市立歴史博物館こころピア	
二〇―一	小銃弾		熊本市立熊本博物館	
二〇―二	小銃弾		玉名市立歴史博物館こころピア	
二一	弾薬箱	一点	熊本市立熊本博物館	
二二	安藤経俊使用教科書	三冊	高森町安藤家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）	
二三	政府軍投降勧告ビラ	一枚	熊本市立熊本博物館	
二四	軍夫受払帳	一冊	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）	
二五	錦絵「官軍進撃シテ賊ノ巣窟タル城山岩崎谷ニ於テ衆賊ヲ鏖スル図」	三枚一揃	熊本市立熊本博物館	
二六	褒賞状	一枚	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）	
二七	尾下小学校関係書類帳簿	一綴	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）	
二八	錦絵「鹿児島英雄揃」	三枚一揃	熊本県文化企画課	
二九	錦絵「肥後熊本戦地之図」	三枚一揃	玉名市立歴史博物館こころピア	
三〇	甲斐有雄狂歌集	一冊	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）	
三一	尾下神社氏子札	二枚	高森町瀬井家資料（熊本県文化企画課松橋収蔵庫）	
三二	錦絵「西海揚波起原」	三枚一揃	玉名市立歴史博物館こころピア	
三三	錦絵「熊本城ノ将校賊軍嘲弄之図」	三枚一揃	玉名市立歴史博物館こころピア	
三四	錦絵「鹿児嶋征討記聞　田原坂進撃ノ図」	三枚一揃	玉名市立歴史博物館こころピア	
三五	錦絵「（城山攻囲）」	三枚一揃	熊本市立熊本博物館	